

脱忽察兒の軍令違反

速勒壇の異文

の傳に附記せる從孫塔察兒ならんと考へらる。塔察兒の傳に西征に従へることを載せざるは、軍令に違ひて太祖に責められたる故に、その家傳に諱みて略かれたりしなり。この三人を遣るに、「外面に往きて速勒壇の彼方に出でて、我等を到らうめて夾攻めん」と宣ひて遣りぬ。者別はかく往きて罕篋里克の城どもを経て動さず、外面を過ぎけり。その後より速別額台も、その理由に依り動さず過ぎけり。その後より脱忽察兒は、罕篋里克の傍の城ども侵入て彼の田禾を掠めき。罕篋里克は、城どもを侵されたりとて、背き動きて、札刺勒丁莎勒壇に合ひけり。(速勒壇は抹哈篋惕教徒の王號にして、阿刺額丁抹哈篋惕闊喇自姆沙は、合里發の命をも受けずに僧稱せり。この時抹哈篋惕已に死し、その子者刺勒額丁即者刺列丁は、速勒壇の位を嗣ぎたり。札刺勒丁莎勒壇は、者刺列丁速勒壇の訛なり。速勒壇は西游録に梭里檀親征録に速里壇、西游記元史郭寶玉の傳に筭端、

罕篋里克

親征録なる三將の追撃

集史なる三將の追撃

郭侃の傳に筭端、巴而朮阿而忒の傳に鎖潭とあり。者刺列丁は、親征録元史本紀に札蘭丁とあり。罕篋里克は、巴而朮阿而忒の傳に罕勉力とあり。喇失惕に據れば、篋兒甫の會長にして、一國の罕に非ず。親征録元史本紀に蔑里可汗と云ひ、秘史原文に罕と篋力克とを離し、語譯に皇帝篋力克、文譯に篋力克王と云へるは、皆非なり。者別等三將の派遣は、太祖十四年己卯の秋攻撃の始まりの時に非ず。親征録に據れば、太祖已に失兒河の畔なる諸城を下し、字合喇撒馬兒罕を平げ、拙赤察阿歹斡歌歹は兀兒堅只に克ち、拖雷は闊喇散の諸城を破り、太祖自ら阿木河を渡り、巴勒黑を破り、壬午(太祖十七年)の春塔列干の寨を破りたる後、是夏避暑於塔里汗寨高原、時西域速里壇札蘭丁遁去、遂命者別爲前鋒追之、再遣速不台拔都爲繼、又遣脱忽察兒殿其後、者別至蔑里可汗城、不犯而過、速不台拔都亦如之、脱忽察兒至、與其外軍戰、蔑里可汗懼、棄城走」とあり。この文の大意は、秘史と異ならず。然れども喇失惕の集史に據れば、三將の派遣は、者刺列丁を追はんが爲に非ずして、抹哈篋惕を追はんが爲なりき。集史の文は甚委し、その略に曰く、蛇の年(太祖十六年辛巳)の春、成吉思汗は、字合喇を破り、諸軍を集めて撒馬兒罕を圍むる時、速勒壇已に南方に遁れたり。聞き、徹別速不台を遣り、各萬人にて追はくめ、脱忽察兒巴哈都兒にも萬人にて續かしめ、戒めて曰く「彼もし強くはむかひて、汝等力足らずば、進まずして、速く我に告げよ。彼遁れば、穴に入るとも、窮めよ。過ぐる所にて、降る者は懐け、逆ふ者は壞れ、三年を期とし、迭施惕乞魄察克より抹古里思壇に回り、我等に遇へ。汝等の後より、我又拖雷に闊喇散の諸城を平げくめ、拙赤察合台斡歌台に闊喇自姆の都を取らうめん。皇天の祐護に頼り、此等の事を成し畢へば、凱旋せん」と云ひて、三將を遣り、已に撒

馬兒罕を陥して、その秋三皇子を闊喇自姆に遣り、成吉思汗は拖雷と鐵門關を過ぎ、拖雷を遣りて闊喇散を攻めしめたりと云へり。抹哈篋惕の追窮を命せられたる三將の内、脱嚙察兒の名は、その後見えす。徹別速不台は、巴勒黑你沙不兒諸城を降し、路を分けて西に進みたれば、抹哈篋惕窮迫し、裏海の小島に入りて病死せり。その子者刺列丁位を嗣ぎ、島より出でて、闊喇自姆に往きたれども、留まること能はず、南に走りて嚙自納に入りたり。馬の年(太祖十七年壬午)の春、拖雷は闊喇散の諸城を平げて還り、成吉思汗と兵を合せて塔列干の寨を攻め下し、察合台幹歌台も、闊喇自姆を平げて至り會し、その夏塔列干に駐れり」とありて、さて三將追撃の初に遡り「三將の速勒壇を追ひし時、篋兒甫の會長罕篋里克は、使を遣りて降りたれば、成吉思汗は「もし罕篋里克的の地を經ば、侵すべからず」と三將に命たり。徹別速不台は、命の如く侵さず過ぎたるに、脱嚙察兒後れ至り、軍士劫掠したれば、山居の人拒ぎ戦ひ、脱嚙察兒陣歿せり。罕篋里克は、脱嚙察兒の横暴なることを成吉思汗に告げ遣りて、衣服を贈りて謝したり。然れども懼れて安からず、者刺列丁の嚙自納に奔れるを聞き、使を遣りて屬したり」と云へり。然らば、脱嚙察兒の軍士の劫掠は、速勒壇抹哈篋惕を追ひて巴勒黑より你沙不兒に向へる時に、喇失惕は罕篋里克的の者刺列丁に屬することを叙べんが爲に、者刺列丁の嚙自納に奔れる後に至り追叙したるなり。然るを親征錄に札蘭丁を追へるが如く書けるは誤れり。されどもこの誤は、修正秘史を誤譯したるにも非ず、原本秘史より已に誤り居たるなり。又多遜の史には「二二〇年(太祖十五年庚辰)の春、字合喇撒馬兒罕を取り、徹別速不台を遣り、抹哈篋惕を追はしむ」とありて、脱嚙察兒の事を云はず、さてその秋三皇子をば兀兒堅只を攻

多遜の異説

失吉忽秃忽の敗北

めに遣り、拖雷を闊喇散に遣りて徹別速不台の後援を爲さしめたり。拖雷は、その冬姉妹の夫脱嚙察兒を先鋒として捏撒に遣り、その城を屠りたる後、脱嚙察兒は你沙不兒に至り、その已に降りたるを知らずして侵掠し、城兵に射殺されたり。二二一年(太祖十六年辛巳)の春、拖雷の軍は、篋魯沙希展即篋兒甫を降し、你沙不兒を破れる時、脱嚙察兒の妻は、萬人を率ゐて城に入り、人畜を屠りて夫の仇を報いたり」と云ひて、篋兒甫の會長罕篋里克的の事は、名も見えず、諸書と異なり。多遜は、多く主吠尼に本づきたりと云へども、恐らくは誤あらんたい。癸(癸未)以前五年の間紀年の正しきは、多遜の獨得なり。札刺勒丁、莎勒壇、罕篋里克二人は、成吉思合罕の迎(逆)に出馬しけり。成吉思合罕の前に失吉忽秃忽先鋒に行きけり。失吉忽秃忽と對陣して、札刺勒丁、莎勒壇、罕篋里克二人は、失吉忽秃忽を敗りて、成吉思合罕の處に到るまで勝ちて來つるに、(親征錄)蔑里可汗懼、棄城走の續に「忽都忽那顏聞之、率兵進襲。時蔑里可汗與札蘭丁合、就戰不利、遂遣使以聞」と云ひ、元史太祖紀十七年壬午の條に「夏、避暑塔里寒寨西城主札蘭丁出奔、與滅里可汗合。忽秃忽與戰不利」とあり。集史に、馬の年の夏、太祖塔列干に居りし時、失吉忽秃忽を三萬人にて者刺列丁を禦ぎに遣りぬ。罕篋里克は、

西游記の月日の確實

その眾と康克里人とを率ゐて者刺列丁に合ひ、勢益振ひ、蒙古の軍と別嚕安に遇へり。者刺列丁は自ら中軍を、罕篋里克は右翼を、賽弗丁阿固喇克は左翼を率ゐ、終日戦ひて決せず、明日又戦ふ。者刺列丁眾を勵まうて圍み攻め、失乞忽禿敗れ走り、死傷夥しかりき。成吉思汗これを聞きて憂ふる色なく、たゞ勝に狂れて戦を輕ずること、を誡めたるのみなりき。者刺列丁は虜獲を分てる時、罕篋里克は阿固喇克と駿馬を争ひ、阿固喇克の面を策もて搦ちたるを、者刺列丁は、祖母の族人なりとて止めざりしかば、阿固喇克怒り、部兵を率ゐて客兒曼の方に去れり。者刺列丁勢忽弱り、又蒙古の軍の至らんことを恐れ、嚙自納に退き、信度河を渡らんとせり」とあり。多遜は、二二一年太祖十六年辛巳の秋、成吉思汗は塔列干を發して南に行き、失乞忽禿忽を先鋒に遣り、その冬巴嚕安の戦ありとし、罕篋里克を阿民馬里克に作り、突兒罕合屯の弟なりと云へり。太祖の塔列干を發して欣都庫施山を越えたるは、多遜の云へる如く十六年辛巳の秋にして、親征錄集史元史の如く十七年壬午の夏ならざることは、長春の西游記を以て證すべし。そもそも西游記の記事の内には、辛巳の年(太祖十六年)客魯噠河の南岸を西に行ける時「五月朔亭午、日有食之、既、衆星乃見、須臾復明、蝕自西南、生自東北」とあり、又邪米思干の人は「此中、辰時食至六分止」と云ひ、金山の人は「巳時食至七分」と云へりとあるに由り、その書の月日の確實なることは、極印を打たれたるものなり。この日食は、金史の天文志にも「興定五年五月甲申朔日食」と記され、淮黎は、卜喇惕施乃迭兒の「支那中世旅行者」の序に、この日食は一二二二年五月二十三日倫敦の午前三時四十五分の食甚なることを推定して、長春の觀察の誤りなきことを云へり。さて長春は、十六年辛巳の十月二日伊犁

烏古孫仲端の往還

河を濟りてより、西に行くこと十二日にして、西南の一山(喀思帖克嶺)を越えたる時、逢東夏使回、禮師於帳前、因問來自何時。使者曰、自七月十二日辭朝、帝將兵追算端汗至印度。この使者は、金の宣宗の使烏古孫仲端にして、この年七月の初に塔列干にて太祖に謁し、太祖の者刺列丁速勒壇を追ひに出馬したるを見て辭し、回れるなり。金史宣宗紀に「興定四年七月、以烏古孫仲端等使大元、五年十二月丁巳、禮部侍郎烏古孫仲端翰林待制安庭珍使北還、各進一階、忠義傳に「仲端奉使乞和於大元云云。至西域、進見太祖皇帝、致其使事、乃還。自興定四年七月啓行、明年十二月還至」とあり、金の興定五年は、即太祖十六年なり。劉祁の撰れる仲端の北使記に「至五年十月復命」とあるは、十の下二の字を脱せるなり。又北使記に、四年十二月の初に北界(蒙古の地)を出で、五年四月上旬に西遼に至るとあるに據れば、仲端は、西遼より三月行きて、七月の初に行宮に朝し、辭し、回り又三月にして、十月中旬に西遼を過ぎて長春に逢ひ、又二月にして復命したるなり。元史太祖紀十六年辛巳の條に「金主遣烏古孫仲端奉國書請和、稱帝爲兄、不允」とあるは、よけれども、又十七年壬午の條に「秋、金復遣烏古孫仲端來請和、見帝于回鶻國、帝謂曰、我向欲汝主授我河朔地、令汝主爲河南王、彼此罷兵、汝主不從。今木華黎已盡取之、乃始來請耶。」仲端請哀、帝曰、念汝遠來、河朔既爲我有、關西數城未下者、其割付我、令汝主爲河南王、勿復違也。」仲端乃歸」とあるは、前年に書くべき勅語(者別速別をこの年に書き、仲端再至れりとして「復」の字を加へたるなり)者別速別額台脫忽察兒三人は、札刺勒丁、莎勒壇、罕篋里克二人の後

信度河の戦

額台脫忽察兒三人は、札刺勒丁、莎勒壇、罕篋里克二人の後

集史なる信度河の戦

より入りて、却て彼等を敗りて殺して、不合兒薛米思加
 ト兀荅喇兒の城に彼等を合はしめず、勝ちて申木唵に
 到るまで追ひて行かれ、申木唵に跳込みて入るとなり、
 多き撒兒塔兀勒をそこに申木唵に滅したるぞ。札刺勒
 丁莎勒壇、罕篋里克二人は、命を助かりて、申木唵に
 逃れたり。(この時者刺列丁を追ひたるは、太祖親らなり、者別速別額台は、抹哈
 簏惕死し、者刺列丁南に奔りたる後、亦喇克以西の地を侵し、遂に乞
 ト察克の地に入り、申木唵の戦には加はらざれば、こゝに二將を引出したるは、大
 なる誤なり、不合兒等の三城は、後に注すべし。申木唵は、唐西域記の信度河即今の
 印度河なり、申は信度の下略、木唵は蒙語河なり、親征録に辛自速河とある自速は、
 目連の誤なり、親征録に「上自塔里寒寨、精銳親擊之、追及辛自速河、獲蔑里可汗、
 屠其眾、札蘭丁脫身入河、泳水而遁」とあるを、元史に「帝自將擊之、擒滅里可汗、札蘭
 丁遁去」と云ひて、河の名も云はざるは、いつもながら餘りに簡略なり、喇失惕の集
 史には「失乞忽秃忽敗れて歸りたれば、成吉思汗自ら軍を率ゐて塔列干を出で、路
 を急ぎて飯をも炊かず米を蓄みながら行き、別魯安の戦地に至り、敵味方の陣處

巴魯安原の駐夏

を問ひ、地を善く擇ばざりしことを責め、嗚自納に至れば、者刺列丁は、已に十五日前
 に去りたりき、一將を留めて城を守らしめ、疾く追驅けたり、者刺列丁已に船を備
 へ、明日信度河を渡らんとする處へ、成吉思汗夜疾く行き、曉に追附きて取圍めり、者
 刺列丁を生捕らんと欲し、軍士に矢を發たざらしめ、兀克兒古勒札古都思古勒札二
 將をして敵の後を絶たしむ、古都思古勒札は、秘史卷七卷八に見えたる巴魯刺思の
 忽都思合勒潺なるべし、敵兵漸く退き河に至れば、その右翼を二將烈しく攻め破り、
 罕篋里克を殺せり、者刺列丁は、中軍を率ゐ、晨より日中まで戦ひ、左右兩翼皆破られ、
 中軍僅に七百人となり、右に左に衝擊す、諸軍は令を奉りて矢を發たざる故に、者
 刺列丁は圍を衝破りて出で、胸甲を棄て、馬を躍らして多遜は、二丈の崖より、信度
 河に入り、盾を負ひ、旗を攜へて泳ぎ去れり、成吉思汗感入り、諸子を顧みて、誰も
 かくこそありたけれ」と云へり、この戦は、巴魯安の戦の續にて、親征録元史
 集史は皆壬午の年とすれども、倭勒甫は、一二二年辛巳の年の秋とし、多遜は、そ
 の年の冬とせり、罕篋里克は、東西の諸史皆この戦に殺され、成吉思合罕は、
 たりとすれば、札刺列丁と共に逃れたりとせるは、誤ならん、
 申木唵に派り往きて、巴惕客先を掠めて去りて、母小河
 牝馬小河に到りて、巴魯安客額兒に下馬して、
 荅黑山に似たり、巴荅黑山は唐西域記に、
 鉢鐸創那、元史地理志に、
 巴達哈傷、清人の書には、
 巴達克山

巴魯安原の位置

者刺列丁を巴刺の追駈

と書けり。その地は、阿木河の上流に在りて、印度河の上流に在らず。又巴魯安原を平げたるは、多遜に據るに、一二三〇年の秋、帖兒篋惕を取れる後、阿木河を渡る前にあり。巴魯安原は、もしその地ならば、こゝ、**額客豁囉罕**、は、蒙古語、牝馬小河、**格溫豁囉罕**、は、蒙古語、牝馬なる格溫を子なる可温と誤りたるなり。明譯に二河を合せて子母河と譯したる、に於て、土名を蒙語に義譯したるなり。明譯に二河を合せて子母河と譯したる、と音近き故に、小河を塞と誤れり。巴魯安原は、親征錄元史に八魯彎川、集史に別魯安とあり、即失乞忽禿忽の敗北したる所なり。今も喀不勒と安迭喇トの溪との間、欣都庫施山の高き處に帕兒彎の峽あり。そこに又同ト名の河と小邑とありて、西紀一六〇三年に僧正誥思は、喀不勒より巴魯安に至る路にてそこを通りき。第九世紀の人亦奔忽兒答惕必は、巴に珀魯安を巴米安に屬する諸邑の中に擧げたり。速勒壇巴別兒はその記録に「帕兒彎の峽路は甚險く、そこと大谷との間に小峽七つあり」と云ひ、又「喀不勒にて夏吹く風は、帕兒彎の風と名づけらる」と云へり。

札里牙兒の巴刺を札刺勒丁莎兒壇罕篋里克二人を追は
 じめに遣りて、(札里牙兒は、札刺亦兒の誤なり。札刺亦兒の巴刺は、功臣の第
 追之不獲、因大擄忻都人民之半而還。癸未太祖十八年春、上兵循辛自速河而北、命三太子循河而南、至不昔思丹城、欲攻之。遣使來稟命。上曰、隆暑將及、宜別遣將攻

噶自納昔思壇の位置

之。夏、上避暑於八魯彎川、候八刺那顏、因討近敵悉平之。八刺那顏至、遂至可温寨。三太子亦至。元史に遣八刺追之不獲。十八年癸未、夏、避暑八魯彎川、皇子朮赤察合台窩闊台及八刺之兵來會。親征錄の三太子は、幹歌歹を云へるなり。察阿歹幹歌歹の行宮に會したるは、前年の春にあり。元史に今三皇子の來會を云へるは、錄の三太子亦至を誤會したるに似たり。集史に「者刺亦兒の巴刺那顏を者刺列丁を追はしめに印度に遣り、朮兒伯にも同トく往かゝり、云云。羊の年の春、成吉思汗は、信度河の上流に至り、下游の地を定めさせに幹歌台を遣りき。幹歌台は、噶自納を掠め、その城を毀ち、又薛亦思壇を攻めんとて命を請ひたれば、成吉思汗は「暑さに向ひたれば回れ。別の將に攻めさせん」と云へり。夏、別魯安に暑を避けて、巴刺那顏を待ち、別魯安の近處を平げたり。巴刺朮兒伯至りて、成吉思汗は古納温庫兒干に往き、幹歌台も至れり。多遜に據れば、一二三二年(十七年壬午)の春、成吉思汗は、別刺禿兒台を遣り、信度河を渡りて速勒壇を追はしめ、云云。者刺列丁未得られず、軍退きて後、噶自納の叛かんことを慮り、幹歌台を遣り、その民を屠らしめ、別魯安の敗軍に赫喇惕叛きたり。かば、亦勒赤喀歹は命せられて往き、六月餘りにて(西曆六月十四日)攻め落し、その民を屠れり。成吉思汗は、信度河の西岸に沿ひて北に行き、者刺列丁の餘黨を平げたり。幹歌台は、巴に噶自納を定めて、昔思壇の城を攻めんと請ひたれば、成吉思汗は、極暑の爲に許さずして、呼び返せり。この夏は、別魯安の野に駐營し、別刺禿兒台の印度より回れる時、全軍又動き、古納温庫兒干の邊にて幹歌台の軍も大軍に合へり。噶自納は、喀不勒の西南にある古城に於て、吉自紉とも云ひ、元史地理志に哥疾寧と書けり。唐西域記にある漕矩吒國の都魯悉那城は、即噶自納なり。宋の世に

西游記に據りて考へたる太祖行畱の年月

は噶自尼朝の速勒壇の宮所なりしが、この朝は、一一八六年(宋の孝宗淳熙十三年)誥兒朝に滅され、抹哈篋惕闊喇自姆沙は、誥兒の國を并せ、一二二六年(太祖十一年)噶自納を取れり。録の不昔思丹は、即薛亦思壇又昔思壇にして、本書の下文に昔思田とあり。その都は、李思惕と云ひ、希勒綿篤河の畔にありき。元史地理志に不思議とあるは、これなり。ト喇惕施乃迭兒曰く「不昔思丹は、李思惕と昔思壇とを合せて表はせるに似たり。嚕西亞の大地圖に、朶哩河の希勒綿篤河に注ぐ所に、喀刺必思惕と云ふ地あり。これは蓋李思惕なり。」集史の朶兒伯は、本書の下文に朶兒伯朶黑申とあり。多遜の禿兒台は、音訛れり。多遜の亦勒赤喀歹は、本書卷九卷十二にある額勒只吉歹なるべし。さて巴嚕安原の駐夏は、親征錄元史集史皆太祖十八年癸未の事とせるは、例の一年後れにて、多遜の十七年壬午とくたるのみは實を得たり。西游記に、辛巳(太祖十六年)閏十二月の末、二太子(察合台)の言に「上駐蹕大雪山之東南」とあるは、太祖已に者刺列丁を敗り、正に信度河の西岸に居りし時なり。又壬午正月十三日阿里鮮は、邪米思干(撒馬兒罕)を發し、馳三日、東南過鐵門、又五日過大河、二月初吉、東南過大雪山、南行三日、至行宮」とあり。然らば阿里鮮の阿木河を過ぎたるは、正月二十日にして、それより行宮までは僅に十餘日にして達したれば、十七年二月上旬には行宮漸く北、大雪山即欣都庫施山より三日路の處に至り、已に珀沙兀兒喀不勒の間にありき。又長春は、その年三月十五日に邪米思干を發し、二十九日大河即阿母沒鞏を濟り、四月五日行在に達するを得たり。阿木河より行在に達するに六日に過ぎざれば、四月上旬には、太祖已に北に回り、欣都庫施山に入り、謂はゆる母小河牝馬小河の邊に在りくならん。また時適炎熱、從車駕廬於雪山避暑、暑上約四月

者別速別額台の恩賞

脱忽察兒の責められ

十四日問道、將及期、有報回紇山賊指斥者、上欲親征、因改卜十月吉、師乞還舊館、上曰「再來不亦勞乎」師曰「兩旬可矣」遂に宣差楊阿狗に送られて邪米思干に還れり。「廬於雪山避暑」は、即巴嚕安原の駐夏なり。山賊征伐は、親征錄の「討近敵悉平之」集史の「別嚕安の近處を平ぐる」を云ふ。「兩旬可矣」は、撒馬兒罕より行在まで二十日にて到るべきを云へり。太祖の行畱の年月は、唯西游記に由りて委しく分りたり。この年八月以後の事は、更に下に言ふべし。者別速別額台二人を甚く恩賞して、者別汝は、只兒豁阿歹と云ふ名なりき。台赤兀惕より來て、者別となりたるぞ。汝、脱忽察兒は、罕篋里克の邊の城どもを己が心に依り侵して、罕篋里克を叛かせたり。法に當て斬らるめんと云ひ畢へて、却て斬らるめず、甚く責めて、彼の軍を知ることより罰ひて下せり。(明)只重責罰不許管軍。巴嚕安原の駐夏額台は、已に高喀速山を越えて、歐囉巴に入りたれば、太祖のこの賞罰は、この駐夏の時の事にあらす。太祖十五年庚辰の夏、三將續きて罕篋里克的城を過ぎ、脱

脱忽察兒死せりと云へる誤傳

三皇子の兀兒堅只攻め

阿木答哩牙の古名

忽察兒の亂暴を罕篋里克より訴へられたる時の事なるべし。かくて脱忽察兒は、軍を知ることを罷めたる故に、者別速別額台の二將のみ西の方に進みたり。脱忽察兒は、その時古兒只思壇の山民に殺されたりと喇失傷は云ひ、拖雷の先鋒として你沙不兒に戰死せりと多遜は云ひたれども、傳聞の誤ならん。元史博爾忽の傳なる從孫塔察兒は、即この脱忽察兒、即西史の脱曷察兒にして、太祖崩後、太宗に從ひて金を伐ち、五年癸巳金帝を蔡に圍み、六年甲午金を滅し、十年戊戌に卒したり。

かくて成吉思合罕は、巴魯安原より回りて、拙赤察阿歹幹歌歹三人の子だちを、右手の軍にて、阿梅木噠を渡りて兀囉格赤の城に下營せよとて遣りぬ。巴魯安原より

云ふは、叙事の順序違へり、三皇子の派遣を命せられたるは、太祖の者刺列丁を追ひて南下する前、十五年庚辰の春撒馬兒罕を攻め落したる後、その秋速勒壇駐夏の地に太祖の駐まりし時の事なり。親征録は、庚辰を誤りて明年辛巳とし、是夏上駐軍於西域速里壇避暑之地、命忽都忽那顏爲前鋒、秋分遣大太子二太子三太子率左軍攻玉龍傑赤之城と云へり。左軍は右軍の誤なり。集史にも右軍とあり。阿梅木噠は、即阿木答哩牙にて、西游記に阿母沒鞏、劉都の撰れる常徳の西使記に暗木河、元史に阿母河阿木河などあり。木噠は河の蒙古語、答哩牙は河の突兒克語なり。額篤哩昔の地誌に哇黑施と云へるは、この河の古名にして、希臘人の幹克速思、漢書の鳩水

兀兒堅只の所在

突兒罕合屯の事略

隋書唐書の烏澹水、唐西域記の縛芻河は、皆哇黑施の轉なり。哇黑施の名は、今阿木河の上流なる北源の一大河の名に残り、阿喇必亞人は只渾河と云ひ、突兒克人は阿木河と云ふ。李合喇の西南に當り、河の左岸、今の察兒錐の邊に、阿抹勒と云ふ城あり、由り阿木河の名は起れり。阿抹勒を阿木也とも云ひたれば、河をも阿木也河と云ひたること、中世の抹哈篋傷教徒の記録に見ゆ。阿梅は、即阿木也の轉なり。兀囉格赤は、親征録元史本紀にも玉龍傑赤とあれども、正しくは兀兒堅只と云ふべし。耶律楚材の西游録に云く、蒲華之西有大河、西入於海、其西有五里韃城、梭里檀母后所居、富庶又盛於蒲華、五里韃は、即兀兒堅只の訛略、梭里檀母后は、速勒壇抹哈篋傷の母、突兒罕合屯なり。曷思麥里の傳に、月亦心揭赤とあるは、月戀揭赤の寫し誤りなり。兀兒堅只は、闊喇自姆國の舊都にして、今の希哇城の西北、鹹海の南や、西阿木河の下流の西二十七英里にありき。阿木河は、古は希哇城の北にて二派に分れ、一派は今の如く北に流れて鹹海に入り、一派は西に流れ折れて西南に流れ、裏海に入りき。兀兒堅只の城は、その西派の兩岸に立ち、橋にて續きたり。西紀一五七五年の頃より西派は沙壅がりて流れず、城も久しく廢れて、只舊址のみ残り、嚕西亞の地圖には庫尼牙(舊)兀兒堅只と名づけて、也尼(新)兀兒堅只に別てり。新兀兒堅只は、元代以後に起れる城にして、舊兀兒堅只の東南九十英里ほどにあり、希哇城の東北に當り、阿木河の西岸に接し、希哇國の商都なり。清一統志に烏爾根齊城とあるは、即新兀兒堅只なり。多遜に據れば、突兒罕合屯は、康克里の部長の女なるが故に、康克里の將士從ひて闊喇自姆に入りたるもの多く、抹哈篋傷の征戰常にその力に倚れり。それが爲に康クリの諸將驕横跋扈し、突兒罕の權もその子に埒か

拖雷の闊喇
散侵掠
赫喇惕の舊
名

你沙不兒の
の異文

りき。抹哈篋惕の撒馬兒罕に遷りて後も、突兒罕は兀兒堅只に留まりしが、蒙古の兵
孛合喇に向へる時、抹哈篋惕は、撒馬兒罕を去り、兀兒堅只に使を出して、母と妻とに
馬贊迭喇に敵を避けよと言ひ遣りたり。太祖、撒馬兒罕を圍める時、人を遣りて突兒
罕に降を勸めたれども、突兒罕答へずして出で去り、馬贊迭喇の山中なる亦剌勒の
堡に隠れ、後、徹別速不台の軍に虜へられたり。抹哈篋惕は、徹別速不台の軍に追はれ、
裏海の小島に入り憂死し、その子者刺列丁位を嗣ぎ、曼固施刺克より上陸して兀兒
堅只に入りたれども、康克里的將士に忌まれ、一二二二年二月十日、兀兒堅只を棄て
て南に走れり。者刺列丁去りて後三日目に拙赤等の軍は、兀兒堅只に近づきけり。

拖雷を亦嚕亦薛不兒を始とせる多き城どもに下營せ

よとして遣りぬ。(亦嚕も亦薛不兒も、中世闊喇散四大城の一なり。他の二は、
巴勒黑篋兒甫なり。亦嚕は親征錄に也里また野里と書き、元

史本紀に也里、烏古孫仲端の北使記に益離また遣里とあり。即今の赫喇惕なり。古
は阿哩牙と云ひ、中世は哈哩また赫哩と云ひ、大佐裕勒の喀台(支那の交通)に附録
せる一三七五年の喀塔閣地圖には額哩と見え、裕勒の作れる捏思脫哩宗の教正分擔
の地圖にては哈喇と讀まる。明史西域傳に「哈烈一名黑魯、在撒馬兒罕西南三千里、
去嘉峪關一萬二千里、西域大國也。元、駙馬帖木兒、既君撒馬兒罕、又遣其子沙哈魯
據哈烈」とあるは、この地なり。亦薛不兒は、正しくは你沙不兒、また你沙普兒にして親
征錄に泥沙兀兒、また匿察兀兒、元史本紀に匿察兀兒、地理志に乃沙不耳、巴而朮、阿而忒
的斤の傳に你沙卜里、常德の西使記に納商とあり。曷思麥里の傳に你沙不兒と書け

斡惕喇兒の
城攻め

斡惕喇兒の
遺址

るは音最正しく、抹哈篋惕教徒の記錄に合ひ、又地理志の乃沙不耳も、阿不勒弗答の
乃撒不兒に近し。されども阿不勒弗答は又珀兒沙人は你沙兀兒と呼ぶと云へれば、
諸書に兀と書けるも悪くからず。你沙不兒は、阿哩牙と共に古く開けたる所にて、希
臘囉馬の古書に你薛阿と云ひ、祇教の古經に你賽阿と云へり。阿喇必亞珀兒沙の記
者は薩散朝の沙波兒王これを立てたる故に、王の名を取りて名とせり」と云へれ
ども、附會の説なるべし。本書に亦嚕亦薛不兒とあるは、蒙古人の頭韻を協はする癖
あるより出でたる訛ならん。さてこの派遣の事を、親征錄には、辛巳(太祖十六年)の
秋、上進兵過鐵門關の次に「四太子攻也里泥沙兀兒等處城」と云ひ、喇失惕は蛇の
年の秋、撒馬兒罕を發し、拖雷罕と共に納黑舍トに往き、帖木兒合魯曠(鐵門)を過ぎ、拖
雷罕を闊喇散を平げに遣りたり」と云ひて、いづれも辛巳の事とすれども、多遜
に據れば、一二二〇年(太祖十五年庚辰)の秋なり。

成吉思合罕は、自兀的喇兒の城に下營

せり。(兀的喇兒は、前にも後にも兀都喇兒とあり、正しくは斡惕喇兒なり。耶律楚
材の西游錄に訛打刺、また訛答刺、親征錄に斡脫羅兒、元史本紀には訛答刺
とも斡脫羅兒ともあり、地理志には兀提刺兒、賈塔刺渾の傳には斡脫刺兒とあり。そ
の城今は廢れたり。列兒楚の突兒其思壇考古游歴に據れば、失兒答哩牙の東の渾水

なる阿哩思河の納の北緯四十三度に近く、その遺址ありと云ひ、嚕西亞の突兒其
思壇大圖には、阿哩思河の納の東北六英里ばかりにその遺址を標記せり。列兒楚
は、一八六七年より前にその地を探りたり。さて斡惕喇兒の攻圍は、西亞細亞征服の
手始めなれば、太祖西征の初に書くべき事なるを、本書は誤りてこゝに書けり。喇失

四軍の分れ
戦ひ

湯多遜の二史に據るに、成吉思汗は、斡惕喇兒に到り、全軍を四に分け、察合台斡歌台の一軍は、斡惕喇兒を攻め、拙赤の一軍は、昔渾河に沿ひ西北に行き、斡篤延吉肯篤を攻め、阿剌克那顔速客禿脫該の一軍は、昔渾河に、浜り東南に行き、闊鼈篤別納客惕を攻め、成吉思汗は、拖雷と共に大軍を將ゐて昔渾河を渡り、孛合喇に進みて敵の援兵を断ちたり。洪鈞曰く、是時西域王駐撒馬爾干在、東布哈爾在西、其舊都烏爾韃赤更在西北、搗其中、則新舊都呼應不靈、所以斷其援也。先西破布哈爾返而東、攻撒馬爾干、太祖兵法如是、一斡篤篤は、元史地理志に斡的とあり、今闊兒忽惕と云ひ、失兒河の右岸に在り、鹹海に近し、延吉肯篤は、親征錄元史に養吉干とあり、失兒河の左河口より一日路の處にその遺址あり。阿剌克那顔は、巴阿囉の阿剌黑、功臣の第二十六、速客禿は、晃裕壇の速亦客禿、徹兒必、功臣の第三十一、脫該は、速勒都思の塔孩、巴阿禿兒、功臣の第二十四なり。闊鼈篤は、唐書西域傳に俱戰提、西游錄に苦蓋、西游記に霍闌、元史地理志に忽斡、伯顏の傳に忽禪、薛塔刺海の傳に忽纏、西域水道記に霍占とあり、失兒河の左岸、大曲の上に在り、別納客惕は、明の世に沙囉乞牙と云ひ、拙赤察阿明史西域傳に沙鹿海牙とあり、失兒河の右岸、大曲の下に在りき。拙赤察阿

斡歌歹三人の子だち奏して遣るには「我等の軍ども揃へり。兀朮格赤の城に到れり。誰の言に依り行はん

(誰の命に従ひ、我等)と奏して遣りたれば、成吉思合罕勅あ

斡歌歹の節
制

兀兒堅只の
なが持ち

り「斡歌歹の言に依り行へ」と宣ひて遣りぬ。(親征錄に、三皇の城攻に遣りたる續に「以軍集奏聞、上有旨曰、軍既集、可聽三太子節制也」とあるは、この文を譯したるなり。喇失惕曰く、者刺列丁兄弟の兀兒堅只より出奔したる時、城内の兵民は、突兒罕合屯の族なる忽馬兒を主將に戴けり。蒙古の前鋒到れる時、城兵出で戦ひ、伏に遇ひ大敗せり。拙赤等兄弟至り、城の形勢を視察し、招き降したれども應せず。近傍に石なく(礮撃すること能はず)、大木を伐りて濠を填め、三千人を河道を截ちに遣りたれば、城兵に圍まれ皆死し、城兵益元氣旺になれり。拙赤察合台素より中惡く、師和せずして、屢城兵に敗られ、七月を経たれども城下らず。成吉思汗塔列干に在せる時、三皇子より、使もて軍事を告げ遣りたるに、成吉思汗その争の事を聞きて怒り、斡歌台に命じて師を統べさせたり。(斡歌歹の總帥を命せられたる事情は、喇失惕に依りて善く分れり。)

斡惕喇兒の
落城

かくて成吉思合罕は、兀都喇兒の城を下して、(この事も云へる如く、太祖西征の初に書くべき事なり。喇失惕曰く、斡惕喇兒の守將は、哈亦兒罕にして、都より至りし、哈刺札罕は、二萬人にて助け守れり。五月の間圍まれて、城民亂れ、哈刺札罕は降らんと云ひたれども、哈亦兒罕は從はず。哈刺札罕は、夜城を出で、通れんとて虜へられたれば、察合台斡歌台は、その不忠を以て殺して、遂にその城を破れり。哈亦兒罕は、親兵三萬を率ゐて内堡を守り、一月の間禦ぎ戦ひ、士卒皆死して始めて擒となり、庫克撒來に送りて殺されたり。哈亦兒罕は、多遜

該兒罕の死
物狂

元史叙事の
不都合

字合喇撒馬
兒罕の戦

撒馬兒罕の
名稱地理

の書に亦納勒主克該兒罕と云ひ、突兒罕合屯の弟にして、太祖の使者を殺したる人なり。元史本紀に「取訛答刺城、擒其會哈只兒只蘭禿」とあり、二つの只の字は、蓋皆亦の誤にて、哈亦兒は哈亦兒罕なるべく、亦蘭禿は亦納勒主克の訛なるべし。庫克撒味は、太祖撒馬兒罕を圍める時御營のありし所なり。幹惕喇兒の城攻は、秋の末より始まりて六月を費やしたれば、落城したるは、翌年の春の末にて、正に太祖の撒馬兒罕を圍める時なり。親征録の紀年は、喇失惕と同く、一年つづ後れたれば、庚辰（太祖十五年）の秋（至幹惕羅兒城、上置二太子三太子攻守、尋克之）とあるは、城攻の始まりを云へるにて、「尋克之」と云へるは、翌年の事を終言したるなり。元史本紀に、十五年庚辰（駐蹕也石的石河、秋、攻幹惕羅兒克之）とあるは、親征録に據りたるなれども、「尋克之」の尋の字を略きたる故に、秋攻めて秋克てることとなれり。又本紀の叙事は、多くは親征録に據りながら、又紀年正しき他の書に據りて、「帝率師親征の下に、直に取訛答刺城」と書きたる故に、叙事重複せるのみならず、六月師を出して、その月の内に幹惕喇兒を取れ）兀都喇兒の城より動きて、薛米思加卜の城に下營せり。薛米思加卜の城より動きて、不合兒の城に下營せり。（薛米思加卜は、下文に薛米思堅ともあり、撒馬兒罕篤に於て、希臘の阿歷散迭兒大王の至りたる馬喇罕答は、即この地なりと云ふ。漢書西域傳に「大月氏國治監氏城」とある監氏は、撒馬兒罕篤の罕篤又は罕答の訛なるべし。魏書西域傳に「悉萬斤國、都悉萬斤城、在迷密西、其國南有山名伽色那山」とあるは、撒馬兒罕篤を國の名として記せる始なり。迷密伽色那は、唐西域記の彌鉢賀羯霜那なり。唐西域記に「風林建國、唐曰康國、周千六七百里、東西長、南北狹、國大都城、周二十餘里、極堅固、多居人、異方寶貨多聚此國、土地沃壤、稼穡備植、林樹翳鬱、花菓滋茂、多出善馬、機巧之技、特工諸國、氣序和暢、風俗猛烈、凡諸胡國、此爲其中進止威儀、近遠取則、其王豪勇、鄰國承命、兵馬強盛、多是赫翔」とあり、唐の初は、西突厥の屬國となりしかども、その猶富強なりしを見るべし。隋書西域傳に曰く「康國者、康居之後也、遷徙無常、不恆故地、然自漢以來、相承不絕、其王本姓溫、月氏人也、舊居祁連山北昭武城、因被匈奴所破、西踰蔥嶺、遂有其國、支庶各分王、故康國左右諸國、並以昭武爲姓、示不忘本也、都於薩寶水上、阿祿迪城、城多聚居、名爲強國、而西域諸國多歸之、康國と云へるは、撒馬兒罕篤の罕の音を取りて、單名となせるにて、彌鉢賀を米國と云ひ、乞史を史國と云ひ、屈霜你迦を何國と云ひ、貨利督穆を穆國と云ひ、漕矩吒を漕國と云へると同例なり。薩寶水は、今の咱喇甫山河なり。匈奴に破られ云云は、史記大宛の傳に「始月氏居燉煌祁連間、及爲匈奴所敗、乃遠去、過宛西擊大夏而臣之、遂都焉水北、爲王庭」とあるを謂へるなり。焉水（阿木河）の北即失兒阿木兩河の間は、漢の初より月氏に屬したれば、康居の後なりと云へるは、甚誤れり。月氏の事を叙べたる下文とも自ら矛盾せり。こは、たい康の字同トきに由り附會したるなり。康居の地は大宛（今の弗兒嘎納）の西北にありて、今の乞兒吉思曠野なり。舊唐書の西戎傳は、隋書に據りて「康國、即漢康居之國也」と誤り、又その「被匈奴所破」を「爲突厥所破」と改めて、更に誤を加へたり。蓋舊唐書の作者は、康國は

成吉思汗實錄卷の十一

古の康居の國なりと思へるに由り、月氏のそこに遷りたるは近世の事ならん
考へて、匈奴を突厥と改め、史記漢書に明記せる月氏西遷の事を忘れたるなり。新
唐書の西域傳は、康者、一曰薩末健、亦曰颯林、建元魏所謂悉萬斤者」と云ひて、康居な
りとは云はざれども、月氏を破れるものを匈奴とせずして突厥とすたるは、舊唐
書に同く「高宗永徽時、以其地爲康居都督府」とあるを見れば、高宗の朝臣も、貞觀
の隋書を作れる史官の誤を承けて、康國と康居とを混じ居たるなり。又新唐書は、
史國即羯霜那を康居の小王蘇雍城の故地なりとし、何國即屈霜你迦を康居の小
王附墨城の故地なりとし、安國即捕喝を康居の小王罽城の故地なりとせり。され
ども屈霜你迦は、貴霜匿とも云ひ、漢書に見えたる大月氏の五翁侯の一なる貴霜翁
侯の故地にして、康居の故地に非ず。羯霜那即今の舍勒も、捕喝即李合喇も、皆兩河
の間に在りて、月氏の地なるを、安に康居の故地とすたるは、唐人のでたらめなり。
又唐人は、捕喝即李合喇を漢の安息に當てて、安國と名づけ、何國と安國との間な
る喝汗(喝捍)國を安息の木鹿即篋嚕(今の篋兒甫)に當てて、東安と名づけ、顯慶三年
遂に安を安息州とし、東安を木鹿州としたり。唐人の地理を誤れることかくの如
し。然るに東西の史家は、新舊唐書のかく安なるに心附かず、康居の五小王の故地ま
で實らしく列記せるを見て、月氏康居の地を考ふるに迷へるもの多きに由り、序な
がらこゝに辨じ置くなり。さて撒馬兒罕篇の篇を略きて呼ぶは、漢文の常なるが、
馬兒科保羅も、漢人より聞きなれたる爲にや、撒馬兒罕と云ひて、篇の音を略けり。
中世の基督教の傳道師は、この城を薛米思罕と云へり。耶律楚材の庚午元曆を進
むる表に「庚辰、聖駕西征、駐蹕尋思干城、西游錄に「訛打刺西千餘里、有大城曰尋思

字合喇の異稱

二古城の沿革

干、尋思干者、西人云肥也、以地土肥饒故以名。甚富庶、環城數十里、皆園林、飛渠走
泉、方池圓沼、花木連延、誠爲勝槩。瓜大者如馬首。尋思干乃謀速魯蠻種落、梭里檀所
都。蒲華苦蓋訛答刺城皆隸焉。尋思干の名は、早く遼史の天祚紀に見えたり。漠然居
士集に又尋思度と書き、尋思肥也、度、城也」と譯し、元史郭寶玉の傳には「擣思干とあ
り。尋思も尋思も、擣思も、皆薛米思にて、親征錄元史本紀察罕、曷思麥里等の傳に薛
迷思干と書き、長春の西游記には、前に尋思干、後に邪米思干と書けり。薛米思は、突兒
克語に肥を謂ひ、罕篤は、珀兒沙語に城を謂へば、楚材の解は善く當れり。西游記に
辛巳の年「仲冬十有八日、過大河、至邪米思干大城之北」云云。其城因溝岸爲之。秋
夏常無雨、國人疏二河入城、分繞巷陌、比屋得用。方算端氏之未敗也。城中常十萬
餘戶。國破而來、存者四之一。其中大率多回紇人。城中有岡、高十餘丈、算端氏之新
宮據焉。又壬午の年二月二日遊郭西、隨處有臺池樓閣、間以蔬圃。望日復遊郭西、
園林相接百餘里、雖中原莫能過、但寂無鳥聲耳。又瓜を賞て、味極甘香。中國所
無。間有大如斗者、十枚可重一擔」と云へり。元史地理志に「撒麻耳干、明史西域傳に撒
馬兒罕とあり、不合兒は、即李合喇にして、これもいと古き名城なり。北史西域傳に「恆
密」とあるは、この地なり。隋唐の人は、安國と名づけ、新唐書西域傳に「安者、一曰布
密、一曰捕喝、元魏謂恆密、西瀕烏訶河」とあり。捕喝と書きたるは、唐西域記なり。西游錄
は、蒲華と書きて「尋思干西六七百里、有蒲華城、土產更饒、城邑稍多」と云へり。親征
錄に「ト哈兒、元史地理志に「不花刺、察罕の傳に「李哈里、明史西域傳に「ト花兒」とあり。今
嚕西亞人は「不哈兒」と云ふ。李合喇、撒馬兒罕の二城は、上古より亦囉の國に屬し、漢の
初より大月氏に占據せられ、隋の世に西突厥に屬し、唐の高宗の時暫く唐に屬し、

二城の攻め落し

中宗の時大食の國に屬し、僖宗の時撒曼朝興りて李合喇に都し、宋の眞宗の時撒曼朝は西回紇の亦列克罕に滅され、亦列克罕の子孫は撒馬兒罕に都し、北宋の末に西遼興りても、その屬國となりて河間の地を統べ居たりしが、元の太祖八年、西回紇の末王幹思曼は、速勒壇抹哈篋惕に殺され、河間の全土は闊喇自姆朝に屬したり、この二城を太祖の平げたるは、撒馬兒罕は後に李合喇は前なり、本書の叙事顛倒せり、喇失惕曰く「成吉思汗は、既に各軍を分け遣り、その子拖雷を伴れ、沙漠の僻路を行き、翌年の春李合喇に至りて圍み攻めたり、守將庫克罕等、眾を率ゐて遁れんとして打ち破られ、城民降を請ひたれども、内堡は猶抗禦し、兵民三萬人皆死せり、春の末撒馬兒罕に向へり、撒馬兒罕は要害堅固にして、突兒克(即康克里)の兵六萬塔只克の兵五萬にて守りたれども、速勒壇抹哈篋惕は既に遁れて居らざりき、御營は庫克撒味に駐まり、拙赤等の諸軍皆至り、五日の間圍み攻めて、城壞れ、兵民多く屠られたり、親征錄に曰く「辛巳、上與四太子追攻ト哈兒薛迷思干等城皆克之、大太子又攻克養吉干八兒眞等城二八兒眞は、元史地理志に巴耳赤刊とあり、喇失惕は、巴兒合里肯篤と綴りたれども、普刺諾喀兒關尼は巴兒沁と云ひ、小阿兒篋尼亞の君海團の紀行に帕兒沁とあるは、巴兒眞の方に音近し、その遺址は確ならねども、列兒出の云へる「巴兒眞の名ある古錢」は、その地にて鑄たるものなるべし、喇失惕曰く「拙赤の一軍は、昔固納克を屠り、幹自肯篤巴兒合里肯篤を降し、額施納思を破り、氈篤を取り、兵を分けて養吉罕篤を取れり、又阿刺克那顏等の三將は、別納客惕に克ち、闊氈篤に克てり、昔固納克は、海團の紀行に薛固納黑とあり、列兒出の「突兒其思壇考古游歴」に據れば、その遺址は、失兒河の濱なる主列克砲臺の東南四十二哩里、河より十

右軍の勝利

左軍の勝利

元史の重複

金寨嶺の避暑

八哩離れたる處に在り、今速納克庫兒干と云ふ、幹自肯篤は、失兒河の下流にあり、弗兒嘎納の兀自肯篤と異なり、拙赤の氈篤養吉罕篤を取れるは、察合台幹歌台の幹惕喇兒を破り、阿刺黑等の闊氈篤に克ち、太祖の李合喇に向へると大抵同時にして、三路の軍は、各その使命を畢へたる後、大軍に會つて共に撒馬兒罕を圍めり、親征錄集史は、誤りて此等の戦を太祖十六年辛巳の事とすたれども、多遜は主吠尼に據り、一二二〇年十五年庚辰の事とせり、元史は十五年庚辰春三月、帝克蒲華城、夏五月、克尋思干城と云ひ、又十六年辛巳春、帝攻ト哈兒薛迷思干等城、皇子朮赤攻養吉干八兒眞等城、竝下之と云へり、庚辰の蒲華尋思干は、前年己卯の訛答刺と共に、西游録と譯字全く同トければ、蓋西游録の原本に據りて書けるならん、今の西游録は、盛如梓の節録したるにて、全本に非ざれば、此等の記事なし、辛巳のト哈兒薛迷思干養吉干八兒眞は、庚辰の也石的石也兒的石的誤寫、そこに成吉思合罕は、幹脫羅兒と共に、親征錄に據れること甚明なり、) 巴刺を待たんと、(この一句は、不都合極まる贅疣なり、撒馬兒罕を取りて避七年壬午の夏なり、) 金の寨の嶺なる莎勒壇の避暑處に避暑して、(金の寨阿勒壇豁兒罕、土人は何と云ひしが、知らず、親征錄には云ひて、その秋三皇子を玉龍傑赤に派遣したることを叙べ、於是上進兵過鐵門關と云ひ、喇失惕はその夏成吉思汗は、撒馬兒罕の境内に駐まり、者別速不台脫噶察

鐵門關の地理

兒を速勒壇を追ひに遣り、三皇子を兀兒堅只に遣り、その秋、拖雷汗と共に納黑舍トに往き、路路游牧して帖木兒合魯噶を過ぎたり」と云ひ、多遜は撒馬兒罕に駐まれる時、徹別速不台を派遣せり、一二三〇年の夏皆を撒馬兒罕と納黑舍トとの間に過し、その秋三皇子を派遣せり」と云へり、謂はゆる金の寨は、納黑舍トの邊に在り、なるべし、帖木兒合魯噶は、鐵門關の蒙語なり、元史に「夏四月、駐蹕鐵門關」と云へるは誤れり、この鐵門關は、撒馬兒罕の南にある峽路にして、撒馬兒罕より往くに路二つあり、南に向ひ喀施を、過ぐるは順路にして、西南に向ひ納黑舍トに廻れば遠し、太祖は、金の寨に避暑したる故に、納黑舍トの路を通れり、喀施は、魏書西域傳の伽色尼國にして、隋書西域傳に「史國、都獨莫水南云云、俗同康國、北去康國二百四十里、南去吐火羅五百里、西去那色波國二百里」唐西域記に「從颯秣建國西南行三百餘里、至羯霜那國、唐曰史國、土宜風俗、同颯秣建國」新唐書西域傳に「史、或曰法沙、曰羯霜那、居獨莫水南、西百五十里、距那色波南四百里、吐火羅也、隋大業中築乞史城、那色波は、即納黑舍トなり、伽色尼羯霜那法沙乞史は、皆一音の轉にして、喀施なる名の原なり、亦奔好喀勒は、北宋の初に始めて喀施の名を記し、西游記には、碣石、明史西域傳には、渴石と書けり、元の時、巴嚕刺思氏世世この地を領し、駙馬帖木兒こゝに生れたり、その山川清麗なるが故に、舍里薛ト思即綠城の名あり、今は略きて舍勒と云ふ、城の傍を流る、小河即隋書新唐書の獨莫水を今喀施喀答哩牙と云ふは、古名喀施の遺れるなり、納黑舍トは、魏書の那識波國にして、新唐書に「那色波亦曰小史、蓋爲史所役屬」とあり、亦奔好喀勒は「納黑沙トは、喀施の山より二日路離れたる野に在り」と云へり、元史地理志に「那黑沙トとあり、察合台の五世の孫客珀克汗、そこ

喀施

納黑舍ト

玄奘の鐵門の記

に宮殿即喀兒失を築きたる故に、後世はその地を喀兒失と云ふ、鐵門關は、喀施の南五十五英里にあり、唐西域記羯霜那國の條に曰く「從此西南行二百餘里、入山路崎嶇、路徑危險、既絶人里、又少水草、東南山行三百餘里、入鐵門、鐵門者、左右帶山、山極峭峻、雖有狹徑、加之險阻、兩傍石壁、其色如鐵、既設門扉、又以鐵鋼多有鐵鈴、懸諸戶扇、因其險固、遂以爲名、出鐵門、至觀貨邏國、新唐書史國の條に「有鐵門山、左右峻峭、石色如鐵、爲關、以限二國、以金鋼圍」と云へるは、西域記の文を約めたるなり、阿喇必亞の地理家牙庫必(唐の末の人)は、鐵門を珀兒沙語にて答哩阿漢と云ひ、城市の名とせり、亦奔好喀勒の納黑沙トより帖兒蔑惕に至る紀行の中にも鐵門あり、類篤哩昔南宋の初の人)は、鐵門に一小邑ありと云へり、西游記に、壬午の年、長春は、撒馬兒罕より三月十有五日啓行、四日(即十八日)過碣石城云云、過鐵門、東南度山、山勢高大、亂石縱橫、軍軍挽車、兩日(即二十日)方至前山、沿流南行、五日(即二十五日)至小河、亦船渡、七日(即二十七日)舟濟大河、即阿母沒輦也、二二九八年、明の洪武三十一年)の春、駙馬帖木兒、印度より師を班せる行程を舍哩甫額丁の叙べたるに據れば、帖木兒は、阿木河を渡りて、帖兒蔑惕に二日駐まり、三日行きて、科魯噶即鐵門を過ぎ、巴哩克河の邊に宿り、又五日行きて、喀施に入りたり、速勒壇巴別兒も、鐵門を科魯噶と云へり、歐囉巴人にて鐵門の事を記せるは、克刺腓卓より始め、二四〇四年、明の永樂二年、克刺腓卓は、喀思提勒の王顯哩第三の命を奉りて、帖木兒の朝に使せり、西曆八月二十二日、帖兒蔑惕を發し、二十四日、河の岸に近き野に宿り、二十五日、高山の下に至れり、その山に鐵門と云ふ峽路あり、路傍の石壁は、人工にて削りたるが如く見え、山は、兩方ともに甚高く、路は、平にして甚深し、峽路の半に村あり

舍哩弗丁の紀行

克刺腓卓の紀行

門なき鐵門

馬也甫の記

牙佛兒思奇の紀行

り、村の後の山甚高し。鐵門の外に通路なき故に、この路は、撒馬兒罕の南方の要害なり。印度より來る商人は、皆こゝを通る故に、帖木兒伯克は、こゝにて關稅を多く收め得るなり。土人曰く「昔はこの峽路に鐵もて裏める大門ありき」と云へり。それより三日行き、二十八日に喀施の大城に達したり。明史西域傳に「渴石西(南の誤)三百里、大山屹立、中有石峽、行二三里出峽口、有石門、色如鐵、番人號爲鐵門關。蓋元明以來鐵門は峽路の名となり、眞の關門なくなれるなり。克刺腓卓の後四百七十年の間に歐囉巴人この地に入らざりしが、一八七五年(清の光緒元年、我が明治八年)嚕西亞の陸軍少佐馬也甫は、阿木河上游の右岸の地を探らんが爲に、喀兒失より拜孫に赴ける時、察克察河の廣き溪を過ぎたれば、名高き鐵門の峽は目の前に現れたり。土人は今不自果刺合納(山羊の舎)と呼ぶ峽の北の口に近き所にて、沙勒撒(思喀施)よりの路と喀兒失よりの路と合ふ。一八七八年(明治十一年)嚕西亞の將軍思脫列脫甫は、阿富噶尼思壇の額米兒に使用する路に鐵門を過ぎ、隨行せる軍醫牙佛兒思奇は、その「阿富噶尼思壇字合喇紀行」に峽路の事を委しく述べたり。嚕西亞の突兒其思壇大圖に據れば、峽路の長は一半英里にして、西北より東南に向ひ、分水嶺を横斷せり。畫の如き懸崖は路を挟み、峽の廣三十步、或る處にてはたゞ五步なり。察克察河は西北に流れ、北の口を出でて北に曲る。南の口の外に擲喇卜小河あり。そこにて路分れ、本道は東に曲り、口より五英里ばかり離れたる所に迭兒邊篤あり、それより拜孫希撒兒に至る。險き細路は、南の方に別れ、失喇巴惕阿木河に至る。)

拖雷の處に使を遣りぬ。(この事も、前の事と續かず。速勒壇の避暑處に避暑したるは、拖雷も一處にて、)

拖雷の凱旋

親征錄喇失
惕多遜三書
の異同

十五年庚辰の夏なり。拖雷を召し歸したるは、十六年辛巳の春太祖の軍塔列干を圍み居る時なり。)

「年熱くなりぬ。別の軍どもは、下馬するぞ。汝は我等の處に會せよ」と宣ひて遣りたれば、拖雷は、亦嚕亦薛不兒等の城どもを取りて、昔思田の城を破りて、出黑扯唵の城を破り居る時、使はこの言を致したれば、拖雷は、出黑扯唵の城を破ると、回り下馬して來て、成吉思合罕に會しぬ。(親征錄に曰く上進兵過鐵門、遣四太子、攻也里泥沙兀兒等處城。上親克迭兒密城。又破班勒紇城。圍守塔里寒。寨冬。四太子又克馬魯察葉可馬盧昔刺思等城。復進兵。壬午春。又克徒思。恩察兀兒等城。上以暑氣方隆。遣使招四太子速還。因經木刺夷國大掠之。渡擲擲蘭河。克野里等城。上方攻塔里寒。寨。朝覲畢。并兵攻之。喇失惕曰。蛇の年の秋。成吉思汗は、帖木兒合魯噶を過ぎ、拖雷罕を關喇散を平げに遣り、自ら帖兒篋似を攻め破り、撒曼に至り、軍を分け遣りて巴荅黑商を收め、只渾河を渡り、翌年の春、巴勒黑を屠り、塔列干の寨を取り、又奴思喇惕庫を攻めたれども、七月の間下らず。拖雷罕は、篋魯察克の路を経て、篋魯を取り、你沙不兒に至り、薛喇黑思捏撒禿思札只喇等を取り、你沙不兒を取

帖兒篋惕

れり。成吉思汗は、塔列干より拖雷罕に大暑の前に回れと云ひ遣りぬ。拖雷罕は庫希思壇より庫姆者喇河を過ぎ、赫喇惕を取りて、回りて成吉思汗に見え、兵を合せて、塔列干の堅き寨を攻め下し、この夏全軍塔列干に駐まれり。多遜曰く、「一二二〇年の秋、成吉思汗は、帖兒篋惕を攻め破り、薛曼に至り、軍を分け遣りて、巴答黑商を收め、拖雷を闊喇散を平げに遣り、一二二一年の春、只渾河を渡り、巴勒黒を屠り、塔列干の山地に入り、奴思喇惕庫の寨を攻む。この寨は、先に將を遣り攻めさせられたれども、六月の閑下らざりしが、大軍至りて攻め破れり。その夏は、塔列干に避暑せり。拖雷は、脱噶察兒を前鋒として、闊喇散に入りたり。脱噶察兒は、捏撒を屠り、一二二〇年の十一月、你沙不兒を攻めて戦死せり。一二二一年の二月、拖雷は、安篤恢を下し、馬魯沙希展を屠り、薛兒主克の速勒壇散札兒の墓を發き、你沙不兒を砲撃して、その民を屠り、別軍を遣り、禿思に近き合里發哈翰阿勒喇失惕の墓を毀り、拖雷は、庫希思壇を荒し、赫喇惕を破り、塔列干に往き父に會せり。録の迭兒密は、喇失惕の帖兒篋似、多遜の帖兒篋惕にして、漢書西域傳の都密、唐西域記新唐書西域傳の咀蜜なり。元史地理志に忒耳迷薛塔刺海の傳に帖里麻通鑑綱目に帖力迷とあり。帖兒篋惕の名は、費兒都昔の詩史に見え、亦思塔黑哩は、字合喇撒馬兒罕より鐵門を經、巴勒黒に往く路にありと云へり。駟馬帖木兒は、撒馬兒罕より巴勒黒に往く時、常に帖兒篋似にて阿木河を渡れり。今鐵門より巴勒黒に往く路の渡津は、それより西に移れり。嚕西亞の地圖に、帖兒篋似の遺址は、阿木河の北岸にて速兒合卜河の納の西北十一英里ばかりにあり、巴勒黒の東北に當れり。録の班勒紇は、西史の巴勒黒にして、西游記に班里、西游録に班城、元史地理志に巴里黑、察罕の傳に板勒紇、明史西域傳に把力黑とあり。速不台

巴勒黒

塔列干

の傳なる必里罕、易思麥里の傳なる阿刺黒も、巴勒黒の訛なるべし。この地は、いと古き名城にして、希臘の史家に據れば、古は巴克惕喇と名づけ、その州を巴克惕哩牙納と云へり。漢書の撰挑、後漢書の撰達、魏書の撰羅薄提は、皆巴克惕喇の訛略。周書の撰底延、新唐書の撰底野は、皆巴克惕哩牙納の訛略なり。唐西域記に、縛喝國北臨縛芻河、國大都城、周二十餘里、人皆謂之小王舍城也」とある。縛喝は、即巴勒黒にして、巴勒黒の名の物に見えたる始なり。巴勒黒の落城は、喇失惕も多遜も、河間征服の年の翌年とすれども、下文に塔列干を落すに六七月か、れりとあるに據れば、阿木河を渡り、巴勒黒を取るは、その前年にあらざるべからず。親征録に「破班勒紇城、圍守塔里寒寨」を河間征服の年（辛巳は庚辰の誤）の秋の内に書きたるは、全く事實なるを、喇失惕は偶誤りて翌春に移せり。察罕の傳に「察罕、西域板勒紇人也。父伯德那、歲庚辰、國兵下西域、舉族來歸」とあるも、庚辰の年巴勒黒落ちたる時、舉族歸附したるなり。録の塔里寒は、西史の塔列干にして、巴勒黒の東に當れる坤都似の東邊にあり。古は秦干とも呼び、亦思塔黑哩の地理書に、巴勒黒の東、巴答黑商に近く、脫合哩思壇の都秦干ありと云へり。中世の阿喇必亞地理家は、巴勒黒の西、巴勒黒と篋嚕阿勒嚕篤（篋嚕察克）との間にも塔里干ありて、篋嚕阿勒嚕篤に屬せりと云ひ、脫合哩思壇にあるをば塔亦干と云ひたれども、額篤哩昔は、二つともに塔里干と云へり。唐西域記の咀刺健、元史地理志經世大典の圖にある塔里干は、西にあるものなり。東にある塔里干は、地理志にも見えざれども、馬兒科保羅は、巴勒黒より東に十二日行きたる時、秦干と云ふ寨に至れりと云へるは、この寨なり。一八三八年（天保九年）烏篤そこを尋ねて、さびくき村なりと云へり。喇失惕（別喇津の譯せる）に據れば、塔列干の寨

篾魯察克

篾魯

撒喇黑思

捏撒
禿思

木刺希答

の外に堅き寨ありしが如くなれども、多遜に據れば、奴思喇惕庫は即塔列干の寨なり。錄に只塔里寨とあれば、恐らくは別喇津の誤れるならん。錄の馬魯察葉可は、喇失惕の篾魯察克にして、古くは篾魯阿勒魯篤と云へり。阿喇必亞の地理家に據れば、馬魯又は篾魯と云ふ所二所あり。大なるを篾魯沙希展と云ひ、その屬邑を篾魯阿勒魯篤と云ひ、共に篾魯魯篤(木兒嘴卜)河の濱に在りき。今も篾魯察克と云ひて、篾兒甫の東南百十英里、嚕西亞阿富汗の界に近き所に在り。錄の馬盧は、西史の篾魯即馬魯沙希展にして、今の篾兒甫なり。篾魯は、古き名城にして、漢書西域傳に「安息東界木鹿城號爲小安息」とあり。中世は闊喇散四大城の一となれり。新唐書大食の傳に呼羅珊木鹿とあるは、闊喇散の篾魯なり。錄の昔刺思は、西史の薛喇黑思又は撒喇黑思にして、元史地理志に撒喇哈西とあり。遺址は、篾兒甫の西南、赫哩嚕篤河の東岸に在り。嚕西亞に屬せり。西岸に新撒喇黑思と云ふ堡あり。珀兒沙に屬せり。西史の捏撒は、薛喇黑思の西北、禿思の東北に在り。錄の徒思は、西史の禿思にして、元史地理志に途思とあり。禿思は、名高き古城にして、名君哈哈阿勒喇失惕は、こゝに崩じ、詩人費兒都昔星學の大家納思喇丁は、こゝの人なりき。遺址は、篾魯魯篤の西北十七英里にあり。錄の泥沙兀兒魯察兀兒は、秘史の亦薛不兒、西史の你沙不兒、前の注に見えたり。秘史の昔思田は、西史の昔思壇又薛亦思壇なり。然れども昔思壇に入りたるは、拖雷の兄幹歌歹明年壬午の事なれば、この昔思田は、庫希思壇の誤なるべし。錄の木刺夷は、元史太祖紀は同トク、太宗紀に木羅夷、憲宗紀に沒里奚、郭侃の傳に木乃今、常德の西使記に木乃奚とあり。正しくは木刺希答にして、國の名に非ず。抹哈篾惕教徒の一派より成れる部落の名なり。亦思馬額勒を祖とするが故に、亦思馬額勒宗徒

出黑扯噠

三皇子の我儘

太祖の怒り

とも云ふ、元史譯文證補に木刺夷補傳ありて、その興亡を委しく述べたり。裏海の南なる額勒不兒思連山の城寨に據り、その領土は庫希思壇の地に及べり。故に拖雷の庫希思壇を荒せることを錄に木刺夷を掠むと云へり。出黑扯噠の城は、喇失惕の札只欄なり。錄の擲擲蘭河は、舍哩弗丁の「咱弗兒納篾」に見えたる卓克卓囉河にして、出黑扯噠と音近ければ、地の名を取りて河に名づけたるものなるべし。咱弗兒納篾に據れば、この河は、你沙不兒より安篤恢に往く路にて、木兒嘴卜河の西にあり。然らば赫哩嚕篤河の異名なるべし。喇失惕の庫姆者囉河も、赫哩嚕篤河の外にはあるまじ名のはきは知らず。錄の也里野里は、秘史の亦嚕、西史の赫喇惕前の注に見えたり。

拙赤察阿歹幹歌歹三人の子だちは、幹嚕格赤の城を降して、三人にて城の民を分け合ひて、成吉思合罕に分前を出さざりき。(喇失惕曰く幹歌台は、軍を統ぶることを命せられ、二攻め落し、民を分けて軍士に與へ、一人にて二十四人づつを得たり)とありて、太祖に民を分たすとはなし。この三人の子だち下馬して來ぬれば、成吉思合罕は、拙赤察阿歹幹歌歹

三大臣の諫言

三人の子だちを咎めて三日見えさせざりき。(親征錄に「三傑赤城、大太子還營所、塞塔里寒破後、二太子三太子始歸朝覲」と云ひ、喇失惕も察台台幹歌台は、闊喇自姆より來て成吉思汗に見え、拙赤は、闊喇自姆より行李を挈へて去れり」と云ひて、拙赤の去れる所明ならざるを、多遜は、昔渾河の北なる地方に残れりと云へり、然れども拙赤いかに狼戾なりとも、軍に擁して外に駐まり太祖に會せざることは、事情に於てあるべからざることなれば、)そこに孛斡兒出(原本秘史の非にして修正秘史の是なりとも定め難し)木合黎失吉忽都忽(この三人の内、失吉忽都忽の軍中に居りしことは、論月十五日、長春邪米思干を出立ちて、十八日礪石城を過ぎたる時、預傳聖旨令萬戶播魯只領蒙古回紇軍一千護送過鐵門とあり、播魯只は、即孛斡兒出なり、只木合里は、太祖十二年八月、太行以南經略の命を蒙りてより、十三年には河東に入り、十四年も河東に戦ひ、十五年河北を定め、十六年河西に入り、十七年鳳翔を攻め、十八年三月薨て、西征の師には従はざれば、)三人奏さく「服はざりし撒兒塔兀勒の民の莎勒壇を平けて、彼が城どもの民を取れり、我等分けて取らるゝ、斡囉格赤の城も、分け合ひて取

太祖の訓誡

豁兒赤三人の建議

る子だちも、都て成吉思合罕のものなり。皇天后土に力を添へられて、撒兒塔兀勒の民をかく平けたる時、我等爾のあまたの男驕馬歡びて馬孩(動詞なれども譯する能はず)てあり。合罕は、何ぞかく怒りて在せる。子だちは、過を悟りて畏れたるぞ。後を戒めよ。「然らずば」子だちは、性行を怠らん。恩賜せば見えさせば可からん」と奏したれば、成吉思合罕怒息みて、拙赤察阿歹幹歌歹三人の子だちを見えさせて聲を出し、翁等の辭を引ききて、舊き辭を尋ねて、立ちたる地に仆るゝまで、額の汗を拭ひ敢へぬまで陳べて、譴責により教訓により諭して在せる時、見孩豁兒

秃別惕の名

赤、見塔合兒豁兒赤、擲兒馬罕豁兒赤、この三人の箭筒士は、成吉思合罕に奏さく「雖なる鷹の調習にやつと入りたる如く、子だちはやつとかく征伐を學び居る時、子だちを退くるが如く、いかんぞかく叱りませる。子だちは懼れて心を落さん。日の没る處より出づる處に至るまで敵の民あり。我等を脱字都惕の狗どもを嚇けて遣らば、敵の民を、我等は皇天后土に力を添へられて、金銀段物財民住具を爾に持ち來ん。」(脱字都惕は、脱字惕の復稱にして、明譯に西蕃とあり。脱字惕は唐書の吐蕃今の圖伯特即西藏の民なり。吐蕃は蓋秃字篤篤は惕の濁音を音譯せるなり。宋遼金元の諸史皆吐蕃又は土蕃の字を用ふれども、遼の興宗重熙十七年鐵不

得國遣使來、乞以本部軍助攻夏國、不許」と云へること、遼史本紀兵衛志屬國表の三所に見えたり。この鐵不不得は、即秃字篤篤の轉なり。又道宗紀に見えたる陳王塗字特

巴固答篤の合里發

速勒壇の號の濫用

遊幸表に見えたる圖不得泉を、殿本は皆圖伯特と改めたり。國の名を取りて人名泉の名とすたるにやあらん。經世大典の圖には土伯特とあり、全く今の音に同じ。嚕卜嚕克馬兒科保羅は、帖別惕と云ひ、喇失惕は、秃卜別惕と云へり。亦奔忽兒答惕必馬速的を始として阿喇必亞の地理家は、大抵梯別惕と云ひ、故に、今もその名にて世に聞ゆ。されどもその國人は、秃字篤篤の名を忘れて、今は自ら字篤篤の國と云ふ。脱字都惕の狗は、蒙古人の雄雄しく猛きに譬へたるなり。秃別惕の國に驢馬ほど大なる猛き狗ありて、野牛を捕へ、豹と闘ふことは、大佐裕勒の馬兒科保羅紀行の第四十六章とその證注とに見ゆ。その民と云へば、この西に巴黑塔惕の民の合里伯莎勒壇と云へるありと云へり。(巴黑塔惕は、巴固答篤の訛にして、抹哈篋惕教徒の宗主なる合里發の都なり。趙汝适の諸蕃志に白達、元史憲宗紀に八哈塔地理志に八吉打とあり。郭侃の傳常徳の西使記に報達とあるは、馬兒科保羅の巴兀答思と呼べるに音近し。合里伯は合里發の訛にして西使記に哈里法とあり。憲宗紀に三年六月命諸王旭烈兀及兀良合台等帥師征西域哈里發八哈塔等國、二年二月諸王旭烈兀討回回哈里發平之、禽其王」とあるは、哈里發を國の名と誤りたるが如く聞ゆ。合里發は、英吉利思語に喀里甫と云ふ。莎勒壇は、即速勒壇にて、合里發の冊封を受けたる諸侯王の號なれば、合里發の下に附けたるは、誤れり。然れどもこの誤りは、祕史のみならず、元史郭侃の傳にも合里法等灘とあり。蒙古人は、速勒壇の號を西域の君長誰にも附くものと思へりと思えて、郭侃の傳に、木乃分(木刺希答)の將忽

擲兒馬罕の出征

都答而兀朱筭灘、乞都卜(吉兒篤庫)の兀魯兀乃筭灘(囉克捏丁)、兀里兒の海牙筭灘、阿刺汀(阿刺額丁)の領地)の禡答而筭灘、乞石迷(喀什米兒)の忽里筭灘、天房(阿喇必亞)の巴兒筭灘(額只魄惕)の將別伊巴兒か、密昔兒(米思兒)即額只魄惕)の可乃筭灘(可乃)の誤か、速勒壇(屈突思)富浪(富囉克)の兀都筭灘、石羅子(發兒思)の都失喇思)の換斯干(阿答畢)筭灘(西使記)換思(阿塔卑)阿塔卑は發兒思の君の爵、賓鐵(國の名に非ず、印度の產物)の加葉筭灘、兀林の阿必丁筭灘、乞里變彎は蠻の誤、客兒曼)の忽都馬丁筭灘(科惕別丁)などあり、巴固答篤の興亡の事)それらの處に我等出征せん」と奏は、洪鈞の報達補傳に見ゆ)それらの處に我等出征せん」と奏ければ、合罕悟りて、この言に怒息みて、成吉思合罕は可うとて勅あり、晃孩、晃塔合兒、擲兒馬罕三人の箭筒士を恩賞して、阿答兒斤の晃孩、朶龍吉兒の晃塔合兒二人を「我が前に居れ」とて留めて、「斡帖格歹の擲兒馬罕を巴黑塔惕の民の處に合里伯莎勒壇の處に出征せよめたり。(朶龍吉兒の姓、始めてこゝに見ゆ、親征錄元史十三翼の戰の後に朶龍吉部來降の事あり、即朶龍吉兒なり、喇失惕は、者刺亦兒の分部朶龍吉と云

抄馬那顔の誤解

ひて、者刺亦兒十部の一とし、錄の朶龍吉札刺兒部もその意なるを、元史に「若朶龍吉、若札刺兒」と二部に分けたるは非なり、斡帖格歹の姓は、外に見えず、輟耕錄蒙古七十二種の中に合忒乞歹とあるは、や、似たり、擲兒馬罕は、次の卷に綽兒馬罕とあり、多遜は察兒抹昆と云ふ、親征錄元史本紀にはこの人見えざれども、曷思麥里の傳に西域の大帥察罕とあるは、列傳第七なる唐兀惕の察罕に非ず、察兒馬罕の中略なり、又續通鑑綱目宋の理宗寶祐六年、憲宗八年の條に「初蒙古遣宗王旭烈伐、西域至是以抄馬那顔郭侃總統諸軍、前後平西域乞石迷十餘國、轉鬪萬里」とある抄馬那顔をト喇惕施乃迭兒は察兒抹昆なりと云ひたれども、察兒抹昆は、旭烈兀西征の前太宗十三年に死したれば、旭烈兀の下に働くべき由なし、續綱目は何に據れりやと、郭侃の傳を見れば、王子、送兵仗至和林、改抄馬那顔、從宗王旭烈兀西征」とあり、この抄馬は、人の名に非ず、侃の祖父郭寶玉の傳に、寶玉はもと金の將にて、野狐嶺の大敗の時、軍を率ゐて蒙古に降りて授抄馬都鎮撫、太祖八年復帥抄馬、從錦州出燕、侃の父郭德海の傳に「大軍至、乃出降、爲抄馬彈壓、從先鋒柘柏西征」などありて、抄馬は、降附の軍の名、抄馬都鎮撫抄馬彈壓抄馬那顔は、皆官名なり、郭侃は、初百戸となり、次に千戸に進み、今改められて抄馬那顔即抄馬の長官となれり、續綱目の文は、郭侃の上に官名を冠したるなりけり、多遜に據れば、察兒抹昆の西征は、太宗二年の事なれども、太祖の時にも「徹別速不台の高喀速山を越えたる後、又蒙古の軍三千人東より來て、闊喇自姆の潰兵の聚れる喇亦の城を破り、撒哇庫姆喀山を荒し、西は哈馬丹を焚き、阿在兒拜展に入り、喇亦の逃眾を敗り、その帖卜哩似に逃れたる者をば、阿在兒拜展の會長に命じて縛り送らうめて、東に返れり」と云ひ

朵兒伯朶黑
申の出征

印度の名稱

て、その將の名なし、秘史なる綽兒馬罕の西征は或は即この軍ならんと洪鈞も云へり。

又欣都思の民巴黑塔惕の民二つの閉なる阿嚕馬嚕馬荅撒哩の民の阿卜禿の城に朵兒別惕の朵兒伯朶黑申を出征せしめたり。(欣都思は、欣都の蒙語複稱なり、古名は信度と云ひ、信度河より出でたり、後轉トて欣都となり、又轉トて印度となれり、史記漢書の身毒は即信度、高僧傳の捐毒賢豆は即欣都なり、天竺も信度の轉訛にして、山海經には天毒、漢書には天篤ともあり、後漢書以後は、天竺の字多く用ひられたり、竺も、古音は篤なり、珀兒沙人の欣都思壇と云ふは、欣都の國と云ふことなり、歐囉巴人の因的亞と云ふは、印度の喇甸語なり、親征錄には忻都、元史憲宗紀には身毒とも欣都思ともあり、阿嚕は、前文の亦嚕にして、今の赫喇惕は、中世赫哩とも哈哩とも云ひ、赫哩は額哩とも亦嚕とも訛りたれば、阿嚕は哈哩の訛れるなるべし、馬嚕は、篋嚕沙希展今の篋兒甫なり、馬荅撒哩阿卜禿は、考へ得ず、地は三つにして城一つなるも異むべし、朵兒伯朶黑申は、禿馬惕を平けたる人にて、卷十に見えたり、この西征の役には、親征錄にその名見えざれども、集史には朵兒伯とありて、巴刺那顔と同トく、者刺列丁を追ひに印度に入りたりとなせり、又多遜曰く、者刺列丁の敗れたる後、亦勒赤喀歹は命を受けて、叛きたる赫喇惕を討じ、六月圍みて、一二二二年太祖十七年の六月始めて攻め落して、その眾を屠り、こ

康鄰即ち康
克里

乞卜察兀惕
即ち乞魄察
克

の外に篋嚕も再侵掠せられたり、と云へり、本書に依れば、朵兒伯は、印度に入りたるに非ずして、赫喇惕篋嚕を攻めたるは、即朵兒伯なるに似たり。

又速別額台巴阿禿兒を北なる康鄰(康鄰は、漢代の康居の遺種にして、抹哈篋惕教徒の

記録には、康喀里又は康克里と呼び、第十三世紀の初には、牙亦克(兀喇勒)河の東、闊喇自姆の湖(鹹海)の北なる廣き荒野に住めりと云ひ、阿不勒噶資に據れば、成吉思汗の即位の頃、康克里の領地は、逸昔郭勒の湖、楚河、塔刺施(塔喇思)河まで東に及べり、第十三世紀の中ごろに、歐囉巴の高僧二人、その地を過ぎて、紀行に載せ、その民の名を普刺諾喀兒關尼は、康吉台と云ひ、嚕卜嚕克は、康勒と云へり、嚕西亞の史に、珀徹捏固と云へるは、即康克里なりと信せらる、元史には、康里と云ふ、康里の名は、已に金史に見え、忠義傳粘割韓奴の條に、大定年中、康里の部長、字古内附の事あり、康克里人は、武勇勝れ、故に、蒙古に事へて、名臣となれる人甚多く、元史に專傳ある者十三人)乞卜察兀惕(乞卜察兀惕は、乞卜察克の複稱にして、卷八に、欽察兀惕とあり)乞卜察兀惕(元史には、欽察と云へり、黑海、高喀速山、裏海の北、今の嚕西亞の南部なる荒野に住める部族にして、抹哈篋惕教徒の史家、地理家は、乞魄察克又は迭施惕乞魄察克と云へり、迭施惕も乞魄察克も、荒野の義なりと云ふ、額篤哩昔は、第十二世紀の中ごろ(南宋の初)に、突兒克諸部を數へ擧げて、その一を乞甫察克と云へり、西游錄に、印度西北、有可弗又國、數千里、皆平川、無復丘垤、不立城邑、民多羊馬、以蜜爲釀)と云へるも、この國を云へるなるべし、嚕西亞人は、玻羅物次と云ひ、第十一世紀の半(北宋の中頃)よりその記録に見ゆ、嚕西亞の史家は、玻羅物次を平野

巴只吉惕即
ち巴施客兒
篤

幹魯速惕即
ち魯西亞

の義と解せり。他の歐囉巴人は、庫曼又は科曼と云へり。ト咧惕施乃迭兒曰く「この名は、喀思開の海に流れ入る庫馬河より出でたりと見ゆ。」普刺諾喀兒關尼魯ト魯克小阿兒篋尼亞の海圍馬兒科保羅みな科曼と呼び、その國を科馬尼亞と云へり。欽察)巴の人にて元史列傳に列したる者は名將土土哈以下專傳七人附傳三人あり。巴只吉惕(巴只吉惕は、巴施客兒篤の訛にして、康克里的北佛勒噶河の東に住みたる部族なり。今も巴施乞兒と云ひ、その地方に猶住めり。ト咧惕施乃迭兒は、乞ト察兀惕巴只吉惕を乞ト察兀巴只吉と讀みて、「兀巴只は、高喀速の西部黑海の東濱に今も住める幹別資阿巴資又は阿ト合資ならん」と云へり。蓋祕史の帕刺的兀思本には、乞ト察兀の兀の字を巴只吉の上に附けて、兀巴只吉と誤りたるなり。巴只吉の上には、乞ト察兀の字なくとすれば、幹別資には似ずして、巴施客兒篤に近し。巴施客兒篤は、又巴施庫兒篤とも云ふ。九二二年(梁帝友貞龍德元年)合里發木克帖的兒の命を奉て、佛勒噶河の畔に居る不勒噶兒を教化せんが爲に派出したる亦奔拂自闌の紀行に巴施庫兒篤の名始めて見えたり。中世歐囉巴西亞細亞の史家は、みな巴施客兒篤は、突兒克種の分部にして、歐囉巴の洪噶兒人はそれより出でたりと云へり。普刺諾喀兒關尼は、巴思喀兒惕と云ひ、魯ト魯克は、帕思喀提兒と云へり。) 幹魯速惕(幹魯速惕は、魯思の蒙語兀魯思又は幹魯思の複稱にして、我等の魯西亞なり。蒙古人は、魯囉を正しく呼びて、魯囉と混るゝこと無ければ、幹魯速惕の魯は、もと魯とありたるを筆寫の際に誤れるならん。又蒙古語は、我が國の古語の如く、Rの音にて始まる詞なきが故に、魯囉の上に母音一つを加へて呼びたるなり。

馬札喇即ち
洪噶哩亞

り。魯思の名は、柳哩克の創業の時(八六二年、唐の懿宗咸通三年)より始まりと見え、東囉馬の記録に八六七年咸通八年皇帝米海勒第三の時、囉思と云へる異教の民船二百艘にて、京城を侵せることあり。その後教主拂丑思は、傳道師を囉思の國に送り、抹哈篋惕教徒にて始めて魯思の名を書きたるは、八九〇年(唐の昭宗大順元年)ごろに地理書を著したる牙庫必なり。九二一年不勒噶兒の國に派遣せられたる亦奔拂自闌は、屢魯思の民に遇ひ、その民に關する珍き記事を遺せり。第十世紀より第十四世紀までの間、阿喇必亞、珀兒沙の史家は、皆魯思の事を云へり。元史憲宗紀睿宗の傳、曷思麥里の傳に、幹魯思、成宗紀一に、兀魯思、速不台の傳には、幹魯思とも兀魯思とも、地理志には、阿羅思とあり。清人の書には、鄂羅斯、厄羅斯、兀魯斯など書き、今では俄羅斯と書くことに定れり。いづれも蒙古語の幹魯思、兀魯思を音譯したるなり。康熙乾隆時代の書に、羅利とある。馬札喇(次の卷には馬札兒とあり、即ち佛書の羅利に引附けたる惡口なり。) 馬札喇(今の洪噶哩亞なり。洪噶兒人は、もと巴施客兒篤より出でたりと一般に信せられたる故に、主吠尼喇失惕等の史家は、洪噶兒人をも巴施客兒篤と呼べり。阿不勒弗苔の引きたる亦奔賽篤(第十三世紀の人)は、珀徹捏固の北に住める異教の民として、巴施客兒篤を記したる後に、都納河(蒼紐下河)の畔阿列曼也(獨逸人)の近處に住み、亦思藍教に従へる突兒克種の巴施客兒篤と云ひ、又都納河の畔に住める鴻固魯思(洪噶兒人)は、巴施客兒篤の同族にして、阿列曼也より基督教を受けたりと云へり。普刺諾喀兒關尼は、今の如く、洪噶哩亞の名を用ひ、かつ大不勒噶哩亞に近き巴思喀兒惕は大洪噶哩亞なりと云ひ、魯ト魯克も、帕思喀提兒の方言は、洪噶哩亞のそれに同トと云ひ、大洪噶哩亞と呼べり。魯西亞

阿速惕即ち阿蘭

の史に據れば、佛勒噶不勒噶兒の東北兀喇勒山に近く、兀固喇又は余固喇と云ふ所ありて、芬種（フン種）の民住めり。一四九九年（明の弘治十二年）嚕西亞の大公約安伐昔列威赤は、兀固喇を打破りて、兀固喇の君の稱を兼ねたり。抹思科の克喇姆鄰宮の門にその時に關せる喇甸文の銘ありて、この君を翁噶哩大公と稱せり。然らば兀固喇は、喇甸語にて翁噶哩と云ひ、洪噶兒の名は、それより出でたるなり。洪噶兒人は、第九世紀に歐囉巴に入り、自らは馬札兒と稱したれども、嚕西亞の史家捏思脫兒は、兀固哩と名づけ、艾約瑟の職方外紀には翁牙里とありて、舊土の同族と名同じ。阿不勒弗答は馬只噶兒と云ひたれども、そは亞細亞の巴施乞兒を指せるなり。馬札兒の名は、喇失惕の史にも見え、元史速不台の（アスマト）阿速惕（アスマト）名は、元史に屢見え、西史には阿蘭又は阿思と云ひ、その國を阿刺尼亞と云へり。元史地理志に阿蘭阿思とあるは、二名併せ擧げたるなり。阿蘭は、古くより高喀速山の北の麓に住みたる部族にして、西紀の初頃より希臘囉馬の書に見え、その後には東囉馬阿喇必亞の書に見えたり。嚕西亞の史には、阿蘭を牙失と云へり。九二六年（晉の高祖天福元年）思威阿脫思刺甫は、董河の畔にある合咱兒の屬城を取り、遂に牙失喀鎖吉と戦ひたりと云へり。第十三世紀の嚕西亞の史家は、牙昔を帖喇古河の後（南）、高喀速山に近く住める民なりと記せり。蒙古の西征を述べたる抹哈篋惕教徒の史家は、この民を阿蘭又は阿昔と呼べり。普刺諾喀兒關尼は阿刺尼（アラクニ）また阿昔と云ひ、嚕卜噶克は阿刺尼（アラクニ）また阿思と云ひ、基督教徒なりと云へり。阿不勒弗答の引ける亦奔賽篤は、阿蘭と阿思とを二種に分けたれども、阿思は、阿蘭の隣に住み、同トク突兒克種に屬し、同トク基督教徒を

奄蔡即ち閩蘇

撒速惕即ち撒克新

薛兒客速惕即ち徹兒客思

奉たりと云へり。高喀速山に今も居る幹思薛提人は、阿昔の苗裔又は同族なり。史記大宛の傳に奄蔡、在康居西北、可二千里、行國與康居大同俗、控弦者十餘萬、臨大澤無崖、蓋乃北海云。漢書西域傳も同じ。漢書陳湯の傳に、鄯支單于遣使責閩蘇大宛諸國歲遺とあるに、顏師古注して、胡廣曰、康居北可二千里、有國名奄蔡、一名閩蘇、然即閩蘇、即奄蔡也と云ひ、史記正義にも漢書解詁を引きて、奄蔡、即閩蘇也と云へり。奄蔡の音は嚕西亞の舊史なる牙失に近く、閩蘇は即阿速にして、位置名稱は合へり。謂はゆる大澤は、裏海なるべきを、北海に當てたるは、張騫の想像の誤ならん。又三國志東夷傳の注に、魚豢の魏略の西戎傳を引きて、又有柳國、又有巖國、又有奄蔡國、一名阿蘭、皆與康居同俗云云。故時稱屬康居、今不屬也と云へるは、阿蘭の名を正しく著はせり。後漢書西域傳に、奄蔡國、改名阿蘭聊國と云へるは、魚豢の魏略に據りて、阿蘭國と柳國とを誤りて一國に合せたるなり。然らばこの部族は、希臘囉馬の人に早く知られたるのみならず、支那人にも早く聞えたるなり。阿速人は蒙古に征服せられたる後、蒙古の朝に仕へて名將となれる人多く、元史列傳に專傳あるもの九人あり。撒速惕（アスマト）撒速（アスマト）の單稱は、の史には撒克新とあり、撒克新は、亦提勒佛勒噶（アタルボラカ）河の下流にありし城の名にて、その民をもくか呼べり。抹哈篋惕教徒の書には、既に第十二世紀にその名見え、主吠尼は、撒喀新と云へり。普刺諾喀兒（アラクニ）薛兒客速惕（アスマト）阿蘭の南高喀速山の東に居た關尼の撒克昔も、それなるべし。徹兒客速惕（アスマト）阿蘭の南高喀速山の東に居たは徹兒喀失、阿不勒弗答は者兒客思、普刺諾喀兒關尼は客兒乞思、又は乞兒喀昔、嚕卜噶克は徹兒乞思、喇失惕は徹兒客思、元史地理志には撒耳柯思とあり、嚕西亞の史に、蒙

客失米兒即
喀施米兒

屬賓の誤認

李刺兒即ち
李勒噶兒

古人の高喀速山を踰えたる時征服せる部族の中に喀思瑣吉の名あるにつきて、
 克刺普囉惕は「徹兒客思」の古名は、喀思撒黑なりき。今も韓思薛惕人明喇勒人は、徹兒
 客思を喀思撒黑と（客失米兒は、漢書以下歴代の史と高僧傳等の佛書
 呼ぶ）と云へり。**客失米兒**（客失米兒）と見えたる屬賓國即今の喀施米兒に於て、唐西
 域記に「迦溼彌邏、舊曰屬賓、訛也」と云へり。後漢の初に健馱邏の迦膩色迦王、五百の阿
 羅漢を集めて三藏を結集したる所は、即この國なり。哩惕帖兒は、屬賓を希臘史家
 の科弗捏即今の喀不勒に當て、喇纏咱は、堪答哈兒に當てたるは、いづれも隋書西域
 傳に「漕國、在葱嶺之北、南の誤、漢時屬賓國也」新唐書西域傳に「屬賓、隋漕國也、居
 葱嶺南」とあるに誤られたるなり。新唐書の屬賓の傳は、全く舊唐書の屬賓の傳に
 據り、迦溼彌邏の事を述べたるに、「隋漕國也」を加へたるは、蛇足なり。隋の煬帝の
 時、西域諸國を招きたれども、屬賓天竺に至らざりし故に、隋書には屬賓天竺の傳
 なし。隋書の漕國は、唐西域記の漕矩吒國にて、鶴悉那（即鳴自納）を都とし、弗栗特薩儂
 那國（今の喀不勒）の南に在り、屬賓即迦溼彌邏と異なり。隋書に「漢時屬賓國也」と云
 へるは、唐の史臣の臆度の誤なり。新唐書は既に屬賓の傳に「隋漕國也」と斷りなが
 ら、その下に更に漕國の傳ありて「謝肥、居吐火羅西南、本曰漕矩吒、或曰漕矩云云、
 東距屬賓云云、其王居鶴悉那城」と云ひ、又その次に更に屬賓の傳ありて「箇失蜜、
 或曰迦溼彌邏云云」と云へり。新唐書の疏謬複沓は、元史にも譲らず。元史憲宗紀に
 怯失迷兒、經世大典の圖に乞失迷耳、郭侃の傳常徳の西使記に乞石迷、普刺諾喀兒關
 尼は、喀思米兒、馬兒科保羅は、喀失木兒、喇（李刺兒は、次の卷に不刺兒とも
 失惕は今の如く喀施米兒と云へり）李刺兒（李刺兒は、次の卷に不刺兒とも
 あり、即佛勒噶河の東に居りし不勒噶兒又は李勒噶兒なり。大典の圖に不里阿耳と
 あるは、里を思と書き誤れるなり。抹哈篋惕教徒の記者は、不刺兒とも李刺兒とも
 云へるは、正に秘史に同じ。不勒噶兒は、早くより東西二部に分れ、東部は即佛勒噶不
 勒噶兒にして、普刺諾喀兒關尼嚕卜嚕克はその國を大不勒噶哩亞と云へり。こゝなる
 李刺兒は、この東不勒噶兒なり。西部は、東部より分れて、第五世紀の末に苔紐ト河
 を渡りて今の不勒噶哩亞國を立てたり。佛勒噶不勒噶兒に對して、苔紐トの不勒噶
 兒とも云へり。喀塔蘭地圖には、苔紐ト河の下流の南に不勒噶哩亞、その河の北に
 不兒噶哩亞、額勒勒佛勒噶河の東に李兒噶兒と記せり。東不勒噶兒の事を委しく述
 べたる舊記は、第十世紀の初にその國に到れる亦奔拂自闌なり。その地は、佛勒噶
 河の東岸と喀馬河の濱とに廣がり、その都をも不勒噶兒と云へり。蒙古に取られ
 てより、不勒噶兒の國は亡びたれども、不勒噶兒城は、商業學術の要地たることを失
 はずして、金韓兒朶の諸汗の宮所とさへなりしが、第十五世紀の初に、その城廢れて、
 喀散城代り興れり。遺址は、佛勒噶河の東四英里、喀散より八十三英里ほどなる喀
 散州思帕思克郡にありて、今兀思片思科頁また李勒噶兒思科頁と云ふ村となれり。）

客喇勒即ち
客刺兒

喇喇勒（次の卷に二たびこの十一部の名を擧げたる時、この喇喇勒の代りに
 客喇勒とあれば、上の喇は客の誤なるべし。客喇勒は、洪噶兒語にて王
 の義なる乞喇兒に似たり。蓋蒙古人は、誤解して國の名に取りたるならん。喇失惕
 は、客刺兒に作りて、巴施吉兒篤の王とし、又時としては秘史の如く誤りて國の名
 ともせり。客喇勒は、王號を國の名としたりとすれば、前の馬札兒と重複せり。喇失
 惕も、この重複を犯して、屢客刺兒、巴施庫兒惕を竝べ擧げたり。然れども亦奔賽篤は、

亦的勒河即
ち佛勒噶河

亦思藍教に従へる者を巴施客兒篤、基督教に入りたる者を鴻固囉思(洪噶兒人)と分けたれば、馬札兒、巴施庫兒、楊の外に客喇勒、客刺兒、即洪噶兒人を擧げて、も重複にあらざる)この十一部^{ジライチ}部落なる外國の民の處に到るまで、亦

的勒(亦的勒河は、今の佛勒噶河なり、突兒克語に河を亦的勒又は阿帖勒と云ふ、突兒克人は、それを以て佛勒噶河に名づけて、東方の人皆その名を用ふ思

刺物人の佛勒噶と名づけたるは、その河の畔にあり、字勒噶兒城に本づけりと云ふ、西紀五六九年(周の武帝天和四年)東囉馬帝の命を受けて突兒克(西突厥)の汗

に使用したる在馬兒忽思は、その歸路に歹克(兀喇勒)河と阿提里亞河とを渡れり、第十世紀に、亦思塔黑哩は、阿帖勒河は合哈兒の國を通ると云ひ、亦奔忽兒答惕必は、阿帖

勒城あることを云へり、その城は、蓋今の阿思惕喇干なり、普刺諾喀兒關尼は額提勒と云ひ、嚕卜嚕克は額提里亞と云ひ、喀塔關地圖には額的勒とあり、朔方備乘には額

集爾また額濟)札牙黑(札牙黑河は、今の兀喇勒河なり、突兒克語の原の名は、牙亦勒と書けり)水ある河を

額克、嚕卜嚕克は牙噶克と云ひ、喀塔關地圖には牙也黑とあり、一五五八年(元憲宗)の字合喇旅行の記には、牙克大河とあり、)水ある河を

渡り、乞瓦綿客兒綿の城の處に到るまで(乞瓦は、次の卷には客亦別ともあり、嚕

西亞の古き都なる乞額甫を云へるなり、綿客兒綿は、次の卷に蠻客兒蠻ともあり、突兒克語に、蠻は大客兒蠻は城市にて、乞瓦綿客兒綿は、乞額甫大城なり、舍哩甫額丁

乞瓦綿客兒
綿即ち乞額
甫大城

札牙黑河即
ち兀喇勒河

者別速別額
台二將の遠
征

の(咱弗兒納篋)に、一三九五年、帖木兒の嚕西亞を征することを叙べたる所に「乞魄察克の君必恰囉克阿固連は、兀資河の畔なる蠻客兒綿の城に都せり」とあり、兀資河は、阿不勒弗答の阿租河に同トク、今の篤鼎珀兒河即尼珀兒河なり、嚕西亞の舊史には蠻客兒蠻の名見えざれども、幹迭思撒の教授ト喻は、一八七四年「乞額甫の第三考古會の記事」に乞額甫の古名を述べて「この古城は、中世蠻客兒蠻の名にて聞えたり」と云へり、喇失惕は、一二四〇年巴禿の南嚕西亞を征することを叙べて「嚕西亞の大城民格兒堪は、九日の攻圍の後、落ちたり」と云へり、民格兒堪は、多遜の音譯にて、別喇津は、蠻客兒蕃と音譯せり、これも乞額甫にて、正しくは蠻客兒蠻なるべし、吠捏失亞の公使寬塔哩尼は、一四七五年ごろ珀兒沙の往復に嚕西亞を通りて、乞鄂(乞額甫)は馬固囉蠻とも呼ばると云へり、)速別額台巴阿

禿兒を出征せさせたり。(この遠征の主將は、速別額台一人に非ず、者別

罕にて速勒壇抹哈篋惕の追撃を命せられたる時は、者別速別額台脱忽察兒三人なりしが、脱忽察兒軍令に違ひ、降將罕篋里克の地を侵して、軍を管することを罷め

られて後、者別速別額台二將は、闊喇散を経て、馬贊迭喇に入り、喇失惕は、二將の急追速勒壇の窮死者刺列丁の南奔を叙べたる後、二將の遠征を叙べたり、その略に

曰く「徹別速不台は、成吉思汗に使を遣り、速勒壇死し者刺列丁通れたることを告げ、これより後は、さきに受けたる命令に違ひ、乞魄察克の地を繞り、抹古里思壇に回ら

んと奏し、軍を進めて亦喇克に入り、喇亦庫姆哈馬丹、篋展喀自微音諸城を取り、阿在兒拜展に入り、帖卜哩自を降し、篋喇噶を破り、哈馬丹の叛民を討つて回り、阿兒關に

喇失惕の史

多遜の史

入り、古兒只の兵を破り、失兒彎に入り、迭兒邊篤の關門を破り、阿蘭の地に入りき。多遜に據れば、篋喇鳴を破れるは、一二二一年太祖十六年、迭兒邊篤を破れるは、一二二二年太祖十七年なり。迭兒邊篤は、高喀速山の東端に在りて、亞細亞歐羅巴の界を爲せり。者別速別額台の歐囉巴に入りたることは、喇失惕の史には委くからざる故に、多遜は亦奔阿勒阿提兒の「喀米勒兀惕帖哇哩克」(全き歴史)に據りて記せり。その略に曰く「蒙古人は、高喀速山を踰えたれば、阿蘭列思吉徹兒客思乞魄察克兵を連ねて禦ぎ戦ひ、勝敗決せず。蒙古人は、甘言を用ひて乞魄察克人を誘ひ、その同盟を棄てさせ、然る後に阿蘭等の眾を破り、帖兒乞の城を取り、遂に乞魄察克の地を襲ひて、その眾を追ひ散らし、大なる曠野を過ぎて、速答克まで進みたり。乞魄察克の大眾は、嚕西亞に逃げ入りたれば、嚕西亞人は、それらと同盟して敵に當らんとす。一二三三年(太祖十八年)蒙古人は、嚕西亞に攻め入らんとして、嚕西亞乞魄察克連合の兵に遇ひ、伴り負けて逃げ走り、十二日の間敵に逐はれて、伏を設けて遽に起り、七日烈く戦ひて遂に勝を決し、嚕西亞乞魄察克は全く敗れたり。それより蒙古人は、嚕西亞に入りて焚掠を逞せり。一二三三年の末に、蒙古人は、嚕西亞を去りて、不勒鳴兒の地を侵し、その兵を破り、撒喀新を過ぎて、大軍に會せり。喀喇姆津の嚕西亞史に曰く「その時嚕西亞はあまたの小國に分れ、その中に速思答勒(兀刺的米兒)は、重要な國にて、その大公は列國の宗主の如く見られたり。大公の宮所は、もと乞額甫にありしが、一一六九年に兀刺的米兒に遷れり。嚕西亞に逃げ入りたる玻羅物次(乞魄察克人)の内に、嚕里赤の君姆思提思刺甫の妻の父なる部長科提安(洪鳴兒の史には庫壇)と云ふ人あり、塔塔兒(蒙古人)を禦ぐ手段を取ることに必要なをその塔姆思

喀喇姆津の嚕西亞史

速不台の傳

提思刺甫に説き勸めたれば、姆思提思刺甫は、南嚕西亞の諸侯と乞額甫に會して、玻羅物次を援けて塔塔兒に當らんことを議決せり。乞額甫徹兒尼郭甫嚕里赤の三君(名は皆姆思提思刺甫)とその他の諸侯と篤聶珀兒(尼珀兒)河の濱に軍を聚めたる所に、塔塔兒の使十人至りたれば、それらを皆殺して、然る後に軍を進め、闊兒提擦河(額喀帖哩諾思刺甫の南五十英里ばかりにある尼珀兒河の渾水)に近く塔塔兒の軍に遇へり。勝を得たれば、嚕西亞人は、篤聶珀兒河を渡りて、塔塔兒を九日逐ひて喀喇河に至れり。嚕里赤の姆思提思刺甫は、北軍に居り、玻羅物次と共に河を渡りて、塔塔兒の中軍を衝かんとして打破られ、塔塔兒人は、勢に乗つて河を渡り、嚕西亞の南軍を襲ひて、その眾を殲滅せり。これは、名高き喀勒喀河の戦なり。喀勒喀河は、他の書には喀刺克河ともあり。喀喇姆津は、馬柳玻勒の傍にて阿索甫の海に入る。喀勒喀河の渾水なる喀列租河に當てたり。元史速不台の傳に、只別(者別)と共に回國主を追ひたる事を叙べたる後に「癸未、速不台上奏請討欽察、許之。遂引兵繞寬定吉思海、展轉至太和嶺、鑿石開道、出其不意。至則遇其酋長玉里吉及塔塔哈兒方聚於不租河、縱兵奮擊、其眾潰走云云。遂收其境、又至阿里吉河、與斡羅思部大小密赤思老遇、一戰降之、略阿速部而還」とあり。癸未は、太祖十八年にして、喀勒喀河の大戦の年なり。二將の歐囉巴に入りたるは、その前年壬午なれば、癸未の書き所や、違へり。寬定吉思海は、後文に寬田吉思海ともあり、裏海を云へるなり。突兒克語に、願吉思は海の義にして、それより裏海巴勒喀施の如き大湖の名となれり。寬即康安は、委古兒語に湖なり。願吉思は名となれる故に、その上に湖を冠せたるなり。太和嶺は、高喀速山を指せるなり。玉里吉塔塔哈兒は、洪鈞の哲別補傳の自注に、西域書

易思麥里の傳

に玉兒格塔伊兒とありと云へり、ト喇惕施乃迭兒曰く、嚕西亞の史に據れば、玻羅物次(乞魄察克)の汗の一人、名は玉哩兒察喀威赤と云へるもの、一二二三年蒙古人に殺されたり。阿里吉河は、喀勒喀河の訛なるべし、大小密赤思老は、乞額甫の君と徹兒尼郭甫の君となり。又易思麥里の傳に「帝遣使趣哲伯疾馳以討欽察云云、進圍斡羅思於鐵兒山克之、獲其國主密只思臘、哲伯命易思麥里、獻諸朮赤太子、誅之、尋征康里、至孛子八里城、與其主霍脫思罕戰、又敗其軍、進至欽察、亦平之、軍還、哲伯卒」とあり。鐵兒山は、哲別補傳に「孩耳桑と書き、嚕西亞の北軍大敗の地とし、その自注に「鐵兒山、乃地名、非山名」と云へり、この密只思臘は、徹兒尼郭甫の君なり、康里を征つたるは、不勒噶兒より回れる時の事なるべければ、進至欽察」とあるは非なり。さて本書に列ねたる十一部落、馬札兒と客喇勒とは同國なりとて十部落の内、乞卜察兀惕即乞魄察克、玻羅物次、斡羅速惕即嚕西亞、阿速惕即阿蘭、撒速惕即撒喀新、薛兒客速惕即徹兒客思、孛刺兒即不勒噶兒の六部の名は、珀兒沙嚕西亞の舊史なる二將、西征の條に見え、巴只吉惕即巴施客兒篤の名は、そこに見えざれども、不勒噶兒と康克里との間にあれば、不勒噶兒より回れる時從へたるならん。康鄰即康里を征したることは、上に引ける易思麥里の傳に見えたり、唯馬札兒の國即洪噶哩亞は、二將の至らざるのみならず、出征の目的の中に加へられたりとも思はれざれば、太宗八年の西征の時、二將と混つて誤り加へたるに似たり。又客失米兒即喀施米兒は、二將出征の路とは遙に隔たれば、これも誤りならん。

又撒兒塔兀勒の民を取り畢へて、成吉思合罕勅あり、

蒼魯合赤の設け

城城に蒼魯合臣を置き、(親征錄癸未の夏八魯魯川避暑の處に「時上

ひ、元史も同じ、蒼魯合臣は、蒼魯合赤とも云ひ、元史は常に達魯花赤と書き、明譯には鎮守官とあり、蒙語蒼魯忽は、壓ふる鎮むるの義あるより、その語尾を變へて、一州一局を統ぶる官の名とせり。趙翼の二十二史劄記に曰く「達魯花赤、掌印辦事之官、不論職之文武、大小、或路府、或州縣、皆設此官。太祖時、授札八兒、黃河以北、鐵門以南、天下都達魯花赤、木華黎以谷里夾打爲元帥、達魯花赤、又帖木兒補化爲鞏昌都總帥、達魯花赤、世祖以別的因爲屯田府、達魯花赤、唵木海爲隨路砲手、達魯花赤、多蒙古人爲之、漢人亦有官、此者、劉好禮爲永熙路、達魯花赤、張焯爲鎮江路、達魯花赤、張君佐爲黃州、達魯花赤、張貴亨爲處州、達魯花赤、珀兒沙にては、蒼魯合赤の赤を略きて呼びたりと見え、喇失惕の史には、蒼兒噶とあり、珀兒沙の亦勒罕すら自ら蒼魯噶と稱し、その頭鑄たる貨幣に、大汗即元帝の名を書きて、その下に、蒼魯噶の稱を加へたりと(多)兀囉格赤の城より、牙刺哇赤、馬思忽惕と云ふ父子(選)云ふ、

二人、忽魯木石の姓ある撒兒塔兀勒來て、城の緣故體例を成吉思合罕に奏して、「緣故に遵ひ知らせ」と云はれて、その子を馬思忽惕、忽魯木石を、我等の蒼魯合思(蒼魯合赤の複稱)

忽魯木石の父子

兀丹即ち和
闐

と共に不合兒薛米思堅兀囉格赤兀丹(兀丹は、史記の子實漢書以來歷代史志の子闐今の和

乞思合兒即
ち喀什噶爾

闐なり。唐西域記はその梵語の名を擧げて「罽薩且那國、唐言地乳、即其俗之雅言也、俗語謂之渙那國、匈奴謂之于遁、諸胡謂之豁旦、印度謂之屈丹、舊曰子闐、焉也」と云ひ、耶律楚材の西游錄には「高昌西三四千里、有五端城、即唐之于闐國、河出烏白玉」と云へり、子闐の玉を産することは、歴代の史に詳なり、元史には「屢幹端」と書かれ、只地理志に「忽炭」とあり、西域記の豁旦、地理志の忽炭は、皆突兒克語の闐壇を音譯せるなり、闐壇の名は、珀兒沙の古史に屢見え、馬兒科保羅は科壇と呼べり、この國は、西亞細亞には玉のみ、乞思合兒(乞思合兒は、漢書以來の疏勒、今の喀什噶爾ならず、麝香の爲に名高し)兀囉格赤(兀囉格赤は、漢書以來の疏勒、今の喀什噶爾ならず、麝香の爲に名高し)兀思合兒(兀思合兒は、漢書以來の疏勒、今の喀什噶爾ならず、麝香の爲に名高し)兀思合兒(兀思合兒は、漢書以來の疏勒、今の喀什噶爾ならず、麝香の爲に名高し)

兀哩罕即ち
葉爾羌

謂疏勒者、乃稱其城號也、正音宜言室利訖栗多底、疏勒之言、猶爲焉也」と云ひ、新唐書疏勒の傳には「又王居迦師城」と云へり、元史世祖紀至元十一年に「合失合兒、二十五年に可失合兒、地理志に可失哈耳、曷思麥里の傳に可失哈兒、耶律希亮の傳に可失哈里」とあり、珀兒沙、阿喇必亞の史家は、古くより喀什噶兒と云ひ、馬兒科保羅は喀思噶兒と云ひ、捏思脫哩宗の教正分擔(兀哩羊)兀哩羊(羊は、恐らくは罕の誤ならん、兀哩罕は、漢紀至元十一年の條に「鴉兒看、曷思麥里の傳に押兒看、耶律希亮の傳に也里度」とあり、突兒克語には「牙兒堪篤」と云ひ、馬兒科保羅は「牙兒牽」と云へり)古先

古先苔哩勒
即ち曲先苔
林

苔哩勒(明史西域傳に曰く「曲先衛、東接安定、在肅州西南、古西戎、漢西羌、唐吐蕃、元設曲先苔林元帥府、曲先苔林は、即ちこの古先苔哩勒なり、安定衛は、甘

乞塔惕の苔
嚕合赤

州の西南千五百里に在りて、廣袤千里なりとありて、曲先はその西に在りと云へば、その地は、肅州の西南、于闐の東南に當り、今の青海の西邊、西藏の北邊に在り、りなどの城どもを知らしめに任して、その父を牙刺哇赤を伴れ來て、乞塔惕の中都の城を知らしめに伴れ來たり。撒兒塔黑の人より牙刺哇赤、馬思忽惕二人の、城の體例緣故に通じたるの故に、乞塔惕の民を知らしめに、苔嚕合赤と共に任たり。(牙刺哇赤は、喇失惕の史多遜に馬呵木惕也、勒縛只と呼び、抹哈篋

史録の牙老
瓦赤麻速忽

惕教徒にして、太祖以下四朝の開蒙古の大官を勤めたりと云ひ、馬思忽惕は、馬思速惕閉と呼ばれ、突兒其思壇、只渾河地方の牧長となれりと云へり、親征錄己丑、太宗元年八月、太宗即位の所に「河北先附漢民賦調、命兀都撒罕主之、西域賦調、命牙魯瓦赤主之、」また辛丑、太宗十三年に至り、冬十月、命「牙老瓦赤主管漢民」と見え、元史太宗紀元年己丑八月、即位の所に「命河北漢民以戶計出賦調、耶律楚材主之、西域人以丁計出賦調、麻合沒的滑刺西迷主之、」また十三年辛丑、冬十月、命「牙老瓦赤主管漢民公事、」憲宗紀元年辛亥六月、即位の續に「以牙刺瓦赤、不只兒幹魯不觀答兒等充燕京等處行尙書省事、以訥懷塔刺海麻速忽等充別失八里等處行尙書省事、」世祖紀に

兀兒秃撒哈勒

〔歲壬子(憲宗二年)帝駐桓撫間憲宗命斷事官牙魯瓦赤與不只兒等總天下財賦于燕云云〕と見えたり。牙魯瓦赤牙老瓦赤は即牙刺哇赤なり。麻合沒的滑刺西迷は牙刺哇赤の全名馬呵木惕牙刺哇赤にして西迷は瓦赤の誤なり。麻速忽は即馬思忽惕なり。兀都撒罕は正しくは兀兒秃撒哈勒長髯の蒙古語にて耶律楚材の稱號なり。元史楚材の傳に「楚材身長八尺美髯宏聲帝偉之云云。遂呼楚材曰吾圖撒合里而不名吾圖撒合里蓋國語長髯人也」とあり。睿宗の傳に楚材を吾圖撒合里と書き食貨志歲賜の篇に「曳刺中書兀圖撒罕里」とあるも楚材にして金人(隨て蒙古人)は耶律を曳刺又移刺と呼べり。親征錄に牙刺哇赤の漢民を管する事を太宗十三年即本書(秘史續集)の成りたる翌年の所に記したれどもこゝに明に「中都の城を知らん」めに伴れ來たり」とあれば太祖の時より燕京の財政に與り居たるならん。

七年の遠征

撒兒塔兀兒の民の處に七年行きて、そこに札刺亦兒

の巴刺を待ちて居る時に、(太祖の西征は十四年己卯より二十年乙酉まで七年かゝれりされども巴刺を待

ちたるは、その七年目にはあらず四年目なる十七年壬午の夏巴魯安原に)巴刺

巴刺の印度侵掠

は、申木唵を渡りて、札刺勒丁莎勒壇罕箴里克二人を欣

都思の地に到るまで追ひて、札刺勒丁莎勒壇罕箴里克

二人を失ひて、欣都思の中に到るまで尋ねて、「得」かれ

て回りて、欣都思の傍邊の民を虜へて、多き駱駝多き

薛兒客思(勢を去り)を取りて來ぬ。(親征錄に曰く「遂遣八刺那顏將兵

半而還」集史に曰く「者刺亦兒の別刺那顏は、朵兒伯と共に、者刺列丁を追ひて印度に入りたれども、ゆくへ知れず、必亞の城を取り、木勒壇まで進みたり。その地に石

なく、筏を作り石を運び來て、攻具備はりたれども、暑さ烈きが爲に捨て去り、刺和兒珀沙兀兒箴里克普兒を侵掠して回り、羊の年の夏成吉思汗別魯安に避暑し

必亞木勒壇

居る時、別刺等至れり。必亞は、必亞思河の畔にあり、城なるべし。木勒壇は、唐西域記の茂羅三部盧にして、徹納卜河の左邊にあり。印度のいと古き名城にして、阿歷散

迭兒東征の頃は、馬里國の都となり、希臘人のそれを攻め落す時、阿歷散迭兒は重傷を受けたりき。城内に莊嚴なる日天の祠ありて、西域記に「其日天像、鑄以黃金、飾

刺和兒

以奇寶、靈鑑幽通、神功潛被、五印度國諸王豪族、莫不於此捨施珍寶、建立福舍」とあり、その祠堂は、木噶勒帝奧郎在卜に廢せられたり。刺和兒は、喇昆河の左邊に

あり。西域記にその名見えざれども、玄奘の、磔迦國より至那僕底國に往く時、磔迦の東界なる大城に一月留まれりと、慈恩三藏法師傳に見えたるは、その城ならん

珀沙兀兒

と、堪寧哈姆云へり。刺和兒の壯麗なる都となれるは、木噶勒朝の時なり。珀沙兀兒は、健馱羅の迦膩色迦王の故都なる布路沙布邏にて、喀不勒の東孩巴兒山口の東麓に

印度の奴隸王朝

あり、今の英領印度の西北の隅なり。篋里克普兒は、知らず。印度は、西紀千一年、嚙自尼朝の侵略を被りてより、一一八六年、詰兒の沙哈ト兀丁は、嚙自尼朝を滅し、遂に邊嚙勒までも平げたれば、印度の過半は、抹哈篋惕教の國となれり。一二〇六年、沙哈ト兀丁死し、その將、庫塔ト兀丁自立して、印度の王となり、迭勒希即今の迭里に都せり。庫塔トは、突兒克人にして、もと奴隸なり。故に、この朝を世に「奴隸王朝」と云ふ。者、刺列丁の迭勒希に逃げ入りたるは、奴隸王朝の三世、阿勒塔姆施(庫塔トの塔)の時なり)そこに成吉思合罕回りて、(親征録に「甲申班師」とあるは、八魯彎紀一二三三年なり。喇失惕もそれに同トク、別魯安駐夏の後、信度河の上游に駐冬し、欣都思壇より、唐古惕の路に出でて還らんと思ひしが、山深く路險しく行き難くと聞き、回りに、珀沙兀兒に至り、來る時經たる路に循ひて還れり。猴の年、巴米安の山路を踰え、巴喀蘭に留め置きたり。輻重を取り、秋、只渾河を渡り、冬、撒馬兒罕に至れり)とあり。親征録集史は、己卯より壬午まで四年の間の事を一年づゝ後れさせ、庚辰より癸未までとくたれば、この甲申も、癸未の誤りと見ざるべからず。然らば、太祖の師を班して、撒馬兒罕に至れるは、癸未の年なりやと云ふに、また、然らず。實は壬午の年に師を班して、その年の内に、撒馬兒罕に至れるなり。西游記に、長春は、壬午の四月、欣都庫施山中の行在所より還り、五月五日、邪米思干に達し、八月八日、二たび往き、十五日、阿沒河を濟り、二十二日、行宮に至り、上に見え、二十七日、車駕北に回り、九月、朔河橋(阿沒河)を渡り、十五日、十九日、二十三日、途に在り、幄を設けて道を説き、それより扈從して行き、時、時道化を敷奏し、又數日、にて邪米思干大城の

太祖の凱旋

西游記なる壬午の回駕

西南三十里に至り、十月朔、奏して舊居に還り、上は大城の東二十里に駐まれり。六日に上に見えて、自此或在先或在後、任意而行」を許され、十一月二十六日、即行き、二十三日、雪寒く、又三日、霍開河を過ぎ、二十八日、行在に至り、震雷の間に對へたりとあり。この記に據れば、太祖は、壬午の八月二十七日、山中の行宮を發し、九月の末に、撒馬兒罕に至れり。太祖の撒馬兒罕を發したる日は、確ならねども、長春の失兒河を過ぎて後に行在に至れるを見れば、太祖は、蓋長春より先に發し、その年の内に、失兒河の東に至りたること明なり。又元史太祖紀十九年甲申の條に「是歲、帝至東印度國、角端見班師」と云ひ、耶律楚材の傳に「甲申、帝至東印度、駐鐵門、關有一角獸、形如鹿而馬尾、其色綠。作人言、謂侍衛者曰、汝主宜早還。帝以問楚材、對曰、此瑞獸也。其名角端、能言四方語、好生惡殺。此天降符、以告陛下。陛下天下之天子、天下之人皆陛下之子。願承天心、以全民命。帝即日班師」とあるにつきて、程同文曰く「蓋本於宋子貞所作神道碑、極以歸美文、正然非實錄也。唐書「東天竺、際海、與扶南林邑接。太祖西征、無由至彼、角端能言、書契所無、晉卿何自知之。讀湛然集、晉卿在雪山、數程、其地應爲北印度。晉卿實未從征、無由備顧問。且願師爲壬午之春、非甲申也」と云へり。この角端の事は、楚材の孫なる宣慰柳溪の詩集(庶齋老學叢談)に引けるに「角端呈瑞、移御營、益元問罪、西域平」とありて、その自注に「角端、日行萬八千里、能言曉四夷之語、昔我聖祖皇帝出師問罪、西域、辛巳歲夏、駐蹕鐵門、關先祖中書令奏曰、五月二十日晚、近侍人登山、見異獸、二目如炬、麟身五色、頂有一角、能人言、此角端也。當於見所備禮祭之。仍依所言、口口則吉」とありて、宋子貞の耶律

角端の奇談

成吉思汗實錄卷の十一

秃別惕の方に進みたりと云ふ説

公神道碑(元文類卷五十七)の文とは稍異なり。又輟耕錄にも「太祖皇帝駐師西印度、忽有大獸其高數十丈、一角如犀牛然能作人語云此非帝世界宜速還」左右皆震懼耶律文正王進曰「此名角端乃旄星之精也聖人在位則斯獸奉書而至且能日馳萬八千里靈異如鬼神不可犯也」帝即回馭」と云ひて至正庚寅江浙の郷試に角端を賦の題とせることを載せ、又白洪淵先生の續演雅十詩の發揮を引きて「西狩獲白麟至死意不吐代北有角端能通諸國語」者角端北地異獸也能人言其高如浮圖」と云へり然らば角端の奇談は元人の評判となれることにて宋子貞の碑文に始れるに非ず、たゞ西印度を東印度とくたるは宋子貞の誤れるなり。角端は司馬相如の上林の賦に角端とありて郭璞の説に「角端音端角在鼻上」と云へるに據れば角端と名づけられたる一角獸は印度の犀牛なるに似たり又浮圖の如く高くとあるに據れば西亞細亞の駝豹を指せるにも似たり、いづれにても蒙古人の見慣れざる獸にして洪鈞の曰へる如く或者當日軍行見此詫爲異獸其後展轉傳訛遂至鋪張符瑞に過ぎざるなり又多遜の史は一二一九年(己卯)より一二二二年(壬午)までの紀年は正しけれども別嚕安駐夏の後は喇失惕に本づきてやゝその文を易へ「蒙古人は信度河の上流なる不牙客惕沃兒に駐冬し一二二三年(癸未)の春成吉思汗は印度秃別惕を経て蒙古に還らんと欲し實にその方に進みたれども路險くして行き難く、珀沙兀兒に回れり」と云ひ、餘は集史に同く、只途上の日数は集史より一年長く、西游記より一年短し。秃別惕通過は多遜の臆度に出でたりと見ゆるが故に、洪鈞曰く「考其自注未言本自何人、但引元史謂成吉思汗至東印度角端見乃班師玩其詞意蓋爲元史所誤而二十年正月還宮則拉

額兒的失の駐夏 長春の歸路

赤兒赤克河 癸未の駐夏

施特與他書所紀年分相同、在途歲月過多、無事可叙、乃牽引元史、以意附會、不知元史此說固不足憑也、多桑著書時、元史已有譯本、西游記時尙未譯、故有此誤」と云へ、途に額兒的失に駐夏して、(太祖の歸路に額兒的失に駐夏したることは他の書に見えず、こは必ず出征の初十四年己卯の事を誤りたるなり、西游記に據れば、十八年癸未の正月元日には、長春行在に留まりて、將帥醫卜等官の賀を受け、十一日大軍に先だちて發し、二十一日至一大川東北去賽藍約三程」とあるは、塔什肯篤に近き赤兒赤克河の邊なるべし、水草豐茂、可飽牛馬に因りて、そこに盤桓したる間に、太祖も至りたれば、二月七日長春入りて見えたり、その時太祖は「朕已東矣、同途可乎」と云へるに、長春固く辭みたれば、太祖曰く「少俟、三五日太子來、前來道話、所有未解者、朕悟即行」と云へり、八日太祖東山の下に獵して馬より墜ちたりと聞き、長春入りて獵を諫めたれば、太祖は「我蒙古人、騎射少所習、未能遽已、雖然神仙之言在衷焉」と云ひて、それより兩月は獵に出でざりき、かくて二十四日再朝を辭し、三月七日又辭し、十日遂に辭去り、その年七月雲中に至れり、太祖は猶留まりていつ出發したるか、は記に見えず、親征錄には、たゞ「甲申班師、住冬避暑、且止且行」とあり、多遜の史はやゝ委しく「一二二四年(甲申)の春、大軍再動き、昔渾河を渡れり、察合台斡歌台は、李合喇の邊に獵して來て、あまたの獲物を上れり、拙赤は、呼べども至らず、たゞ昔渾河の北より獸を驅りて行在に向はくめ、圍獵の便に供へたり、その夏成吉思汗は、喀闐塔失の地に駐まりて、遊獵を以て日を送れり」とあり、「大軍再動き、昔渾河を渡る」は、西游記に據れば、壬午の冬なり、察合台斡歌台の獲物を上れるは、三五日

阿勒馬里克
甲申の駐夏

太子來と云へる時にて、癸未の二月なり。喀闐塔失は、即塔什肯篤に於て、謂はゆる「水草豐茂」の地は、その近郊なり。太祖は、諫を容れて、兩月獵を罷めたれども、蒙古人の習は、遽に已め難く、癸未の夏は遊獵を以て送りたるなり。さて癸未の駐冬は、いづこなりしか知るべからず。洪然居士集に從容菴錄の序あり、甲申中元、序於西域阿里馬城と云へり。阿里馬は、即阿勒馬里克なれば、耶律楚材は太祖に從ひ、十九年甲申七月十五日、阿勒馬里克に居たるなり。また丁亥九月望日に作れる過夏國新安縣の詩ありて、昔年今日度松關の句あり、その原注に「西域陰山有松關」と云へり。陰山は、即天山なり。松關は、賽喇姆諾兒の西南に在り。西游記に「左右峰巒峭拔、松樺陰森、高踰百尺、自巔及麓、何啻萬株」と云へる所なり。西域水道記に「賽喇木、漳爾當、惠遠城、正北二百里、在松樹頭嶺下」また「果子溝、谷長七十里、北有峻嶺、扼之、嶺上多松、名曰松樹頭嶺」とありて、松樹頭嶺は、山に於て關に非ざれども、その險隘なるに由り、詩には松關と云へるなり。「昔年今日」とは、丁亥の三年前なる甲申の九月十五日を云へるなり。阿勒馬里克より松樹頭嶺までは、二日路に過ぎざれば、楚材等の阿勒馬里克を發したるは、早くとも九月望日の三四日前に於て、九月上旬までは阿勒馬里克に留まれるならん。然らば阿勒馬里克は、即甲申の駐夏の地なるべし。又多遜の史に「皇孫二人、十一歳なる忽必來、九歳なる忽刺古は、額米勒河まで迎へに出で、忽必來は兔を殺し、忽刺古は鹿を殺して上れり」とあり。額米勒河は、今の塔兒巴哈台城の南にあり、西に流れて阿刺克庫勒の湖に入る。その溪は、牧場とて名高し。元史憲宗紀の葉密立地、耶律希亮の傳なる葉密里城は、額米勒河の邊なり。西域水道記は、額敏河と書き、額敏者、回語清淨平安之謂、音轉爲額密爾」と云へり。忽必來は、即

額米勒河甲
申の駐冬

者別速不台
の大軍に追
ひ付き

世祖にて、太祖十年乙亥に生れたれば、十一歳なる時は、二十年乙酉なり。松樹頭嶺より額米勒の地までは、十數日の路程なるに、甲申の九月十五日、松樹頭嶺を踰えて、翌年猶額米勒に留れるは、蓋甲申の冬額米勒に駐冬して、翌年の春未だ出發せざるに二皇孫の至れるならん。又者別速不台の軍は、乞魄察克康克里の地より還り、いづこにて大軍に會せしか、東西の諸史に明文なし。者別は、多遜の史に途にて死にたりと云ひ、曷思麥里の傳にも「軍還哲伯卒」とあれば、大軍に會してまもなく歿したるなり。速不台の傳に、西征より還りて後「略也迷里霍只部、獲馬萬匹以獻」とあれば、二將は、甲申の額米勒駐冬の前に大軍に會したるにて、庚辰の夏速勒壇追討の命を受けたる時、抹古里思壇に會せんと宣へる勅旨に適合せり。但三年の期限は、後れたりかくて太祖は、壬午の冬、失兒河を渡りてより、甲辰の冬、額米勒河に駐まるまで二年の間、徐行したるは、何故ぞ。洪鈞曰く「太祖東歸之時、正哲別速不台入欽察敗俄羅斯之時、豈因二將暴師於遠、故運行以俟軍信耶」と云へるは、さもあるべし。七年に當る雞の年の秋、禿刺河の合喇屯に斡兒朶の處に下馬せり。雞の年は、後堀河天皇嘉祿元年乙酉、宋の理宗寶慶元年、六十四歳の時なり。親征錄に「乙酉春、上歸國、自出師至此、凡七年。元史に「二十年乙酉春正月、還行宮、喇失惕は、雞の年の春」と云ひ、親征錄に同じ。多遜は、二二二五年二月と云ふ。西曆の二月は、即東曆の正月なり。この春、額米勒を發したりとすれば、元史の正月は、早きに過ぎ、秘史の秋は、遅きに過ぎたり。親征錄の春に從ふべし。合喇

乙酉の歸國

四皇子の分封

屯即黒林の幹兒朶は、王罕の舊營なり。多遜は、この處に四皇子分封の事を叙べて、「成吉思汗東に歸り、四子の分地を定め、喀喇科嚕姆の山と幹難河の源との間を拖雷に與へ、額米勒河の邊を幹歌台に與へ、昔渾河の東を察合台に與へ、喀思關の海の北、闊喇自姆の湖、阿喇勒海の周圍を拙赤に與へたり」と云ひ、額兒篤曼は、幹歌台の分地を亦米勒孫嚕哩亞の地とし、察合台の分地を委古兒の境より、孛合哩亞までの地とし、拙赤またその諸子の分地を喀牙里克貨喇自姆より、不勒嚕兒撒克新まで、蒙古の馬の蹄の跡みたる限りとし、拖雷は、蒙古の本國を領する外に、帳殿家族國の記録の保管を任せられたりと云へり。今これを短く言ひ換ふれば、拖雷は、蒙古の地を得、幹歌台は、乃蠻の故地を得、察合台は、西遼の故地を得、拙赤は、闊喇自姆、康克里、乞卜察克の地を得たり。秘史の太祖西征の條は、親征錄、元史より委くけれども、叙事の顛倒錯亂多きは、惜むべし。今尙書の「今考定武成」の例に倣ひ、試にその次序を左の如く考へ正せり。

今考定西征之役

兔の年、撒兒塔兀勒の民の處に阿喇亦に依り越え出馬するに、成吉思合罕は、合屯より忽闌合屯を伴れ進み、弟たちより幹惕赤斤那顔を大老營に畱守せしめて出馬せり。遂に額兒的失に駐夏して、成吉思合罕

戰の始まり

は、自兀的喇兒の城に下營せり。かくて成吉思合罕は、「龍の年の春」兀都喇兒の城を下して、兀都喇兒の城より動きて、不合兒の城に下營せり。「その夏」不合兒の城より動きて、薛米思加卜の城に下營せり。そこに成吉思合罕は、「巴刺を待たんと」金の寨の嶺なる莎勒壇の避暑處に避暑して、者別を先鋒に遣りぬ。者別の後援に速別額台を遣りぬ。速別額台の後援に脱忽察兒を遣りぬ。この三人を遣るに、「外面に往きて、速勒壇の彼方に出でて、我等を到らうめて夾攻めん」と宣ひて遣りぬ。者別は、かく往きて、罕篋里克の

三將の速勒壇追撃

三將の賞罰

城どもを経て動さず、外面を過ぎけり。その後より速別額台も、その理由に依り動さず過ぎけり。その後より脱忽察兒は、罕箴里克の傍の城どもを侵して、彼の田禾を掠めき。罕箴里克は、城どもを侵されたりとて、背き動きて、「その後」札刺勒丁莎勒壇に合ひけり。「成吉思合罕は、」者別速別額台二人を甚く恩賞して、「者別汝は、只兒豁阿歹」と云ふ名なりき。台赤兀惕より來て、者別となりたるぞ、汝脱忽察兒は、罕箴里克の傍の城どもを己が心に依り侵して、罕箴里克を叛かせたり。法に當て斬らるめん」と云ひ畢へて、却て斬ら

三皇子の兀
囉格赤せめ

らめず、甚く責めて、彼の軍を知ることより罰ひて下せり。

かくて成吉思合罕は、「その年の秋」拙赤察阿歹斡歌歹三人の子たちを、右手の軍にて、阿梅木噠を渡りて、兀囉格赤の城に下營せよとて遣りぬ。拖雷をば、亦嚕亦薛不兒を始とせる多き城どもに下營せよとて遣りぬ。「蛇」の年の春」拙赤察阿歹斡歌歹三人の子たち奏して遣るには「我等の軍ども揃へり。兀囉格赤の城に到れり。誰の言に依り行はん、我等」と奏して遣りたれば、成吉思合罕勅あり「斡歌歹の言に依り

拖雷の凱旋

行へ」と宣ひて遣りぬ。

「又その春成吉思合罕は、塔里罕に在りて」拖雷の處に使を遣りぬ。年熱くなりぬ。別の軍どもは下馬するぞ。汝は、我等の處に會せよ」と宣ひて遣りたれば、拖雷は、亦魯亦薛不兒等の城どもを取りて、昔思田の城を破りて、出黑扯哩の城を破り居る時、使はこの言を致したれば、拖雷は、出黑扯哩の城を破ると、回り下馬して來て、成吉思合罕に會りぬ。

三皇子の叱られ

「その夏」拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちは、斡囉格赤の城を降りて、三人にて城どもの民を分け合

ひて、成吉思合罕に分前を出さざりき。この三人の子だち下馬して來ぬれば、成吉思合罕は、拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちを咎めて、三日見えさせざりき。そこに孛斡兒出「木合黎」失吉忽都忽三人奏さく「服はざり」撒兒塔兀勒の民の莎勒壇を平けて、彼が城どもの民を取れり、我等分けて取らるゝ斡囉格赤の城も、分け合ひて取る子だちも、都て成吉思合罕のものなり。皇天后土に力を添へられて、撒兒塔兀勒の民をかく平けたる時、我等、爾のあまたの男驕馬歡びて馬孩してあり。合罕は、何ぞかく怒りて在せる。子だち

は、過を悟りて畏れたるぞ。後を戒めよ。「然らずば子
 たちは、性行を怠らん。恩賜せば、見えさせば可からん」
 と奏したれば、成吉思合罕怒息みて、拙赤察阿歹斡歌
 歹三人の子たちを見えさせて聲を出し、翁等の辭
 を引きて、舊き辭を尋ねて、立ちたる地に仆るま
 で、額の汗を拭ひ敢へぬまで陳べて、譴責により教訓
 により諭して在せる時、晃孩豁兒赤、晃塔合兒豁兒赤、
 擲兒馬罕豁兒赤、この三人の箭筒士は、成吉思合罕に
 奏さく「雖なる鷹の調習にやつと入りたる如く、子だ
 ちはやつとかく征伐を學び居る時、子たちを退くる

豁兒赤三人
 の奏議

が如くいかなぞかく叱りませる。子たちは、懼れて心
 を落さん。日の没る處より出る處に至るまで敵の
 民あり。我等を脱孛都惕の狗どもを嚇けて遣らば、敵
 の民を、我等は、皇天后土に力を添へられて、金銀段
 物民住具を爾に持ち來ん。その民と云へば、この西
 に巴黑塔惕の合里伯莎勒壇と云へるありと云へり。
 それらの處に我等出征せん」と奏しければ、合罕悟り
 て、この言に怒息みて、成吉思合罕は、可しとて勅
 あり、晃孩晃塔合兒擲兒馬罕三人の箭筒士を恩賞し
 て、阿荅兒斤の晃孩朶籠吉兒の晃塔合兒二人を「我が

前に居れ」とて留めて、幹帖格歹の擲兒馬罕を巴黑塔揚の民の處に合里伯莎勒壇の處に出征せさせたり。

朶兒伯の出征

又欣都思の民巴黑塔揚の民二つの間なる阿嚕馬嚕馬答撒哩の民の阿卜禿の城に朶兒別揚の朶兒伯朶黑申を出征せさせたり。

速別額台の出征

又「者別那顏」速別額台巴阿禿兒二人を北なる康鄰乞卜察兀惕巴只吉惕幹嚕速惕馬札喇阿速惕撒速惕薛兒客速惕客失米兒孛刺兒客喇勒、この十一部落なる外國の民の處に到るまで、亦的兒札牙黑なる水ある河

を渡り、乞瓦綿客兒綿の城の處に到るまで、「者別那顏」速別額台巴阿禿兒二人を出征せさせたり。

札刺勒丁罕
蔑里克の追
ひ捲くられ

「蛇」の年の秋、成吉思合罕は、塔里罕より南に動きたれば、その冬「札刺勒丁莎勒壇罕蔑里克二人は、成吉思合罕の迎に出馬せり。成吉思合罕の前に失吉忽禿忽先鋒に行きけり。失吉忽禿忽と對陣して、札刺勒丁莎勒壇罕蔑里克二人は、失吉忽禿忽を敗りて、成吉思合罕の處に到るまで勝ちて來つるに、「者別」速別額台「脱」忽察兒三人は、札刺勒丁莎勒壇罕蔑里克二人の後より入りて、却て彼等を敗りて殺して、不合兒薛米

思加卜兀答喇兒の城に彼等を會せしめず、勝ちて申木噠に到るまで追ひて行かれ、申木噠に跳込みて入るとなり、多き撒兒塔兀勒をそこに申木噠の處に滅したるぞ。札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人は、命を助かりて申木噠に浜り逃れたり。成吉思合罕は、札刺亦兒の巴刺を札刺勒丁莎兒壇罕篋里克二人を追はしめに遣りて、「馬の年の春」申木噠に浜り往きて、巴惕客先を掠めて去りて、「その夏」母小河牝馬小河に到りて、巴嚕安原に下馬して、そこに札刺亦兒の巴刺を待ちて居る時、巴刺は、申木噠を渡りて、札刺勒丁莎勒壇

答嚕合臣の
設け

罕篋里克二人を欣都思の地に到るまで追ひて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を失ひて、欣都思の中に到るまで尋ねて得かねて回りて、欣都思の傍の民を掠めて、多き駱駝多き羯羊を取りて來けり。
又撒兒塔兀勒の民を取り畢へて、成吉思合罕勅あり、城城に答嚕合臣を置きて、兀嚕格赤の城より牙刺哇赤馬思忽惕と云へる父子二人、忽嚕木石の姓ある撒兒塔兀勒來て、城の緣故體例を成吉思合罕に奏して、「緣故に遵ひ知らせ」と云はれて、その子を馬思忽惕忽嚕木石を、我等の答嚕合思と共に不合兒薛米思堅

兀囉格赤兀丹乞思合兒兀哩罕古先蒼哩勒などの城どもを知らしめ、任して、その父を牙刺哇赤を伴れ来て、乞塔惕の中都の城を知らしめ、に伴れ來ぬ。撒兒塔黑の人より牙刺哇赤馬思忽惕二人の、城の體例緣故に通ずたるの故に、乞塔惕の民を知らしめ、に、蒼嚕合思と共に任したり。

大凱旋

かくて成吉思合罕は、「馬の年の秋」巴嚕安原より回りて、「その冬薛米思堅に下馬して、羊猴の二年は、駐夏駐冬して、徐に動き、者別速別額台二人を待ち合はせ」撒兒塔兀勒の民の處に七年行きて、七年に

當る雞の年の秋、禿刺河の合喇屯に斡兒朶の處に下馬せり。

成吉思汗實錄卷の十一終り。

成吉思汗實錄卷の十一

唐兀惕最後の征伐

乙酉丙戌兩説の可否

その冬冬籠て唐兀惕の民の處に出馬せんとて、新アラき數カズ(兵)を數へて、狗の年(我が嘉祿二年丙戌、宋の寶慶二年、金正大三年、元の太祖二十一年、西紀一二二六年、太祖六十五歳の時)秋、成吉思合罕は、唐兀惕の民の處に出馬せり。合敦より也遂合敦を伴れて往けり。(この出陣を、親征錄集史は乙酉の秋とし、元史

本紀は丙戌の正月とし、皆本書と異なり、湛然居士集なる辨邪論の序に「乙酉日南至、叙於瀚海軍之高昌城」とあり。瀚海軍の高昌城は、西游錄に「回鶻城、名別石把、有唐碑、所謂瀚海軍、城之南五百里有和州、即唐之高昌」とありて、畏兀兒に屬する和州の城を唐の名にて呼べるなり。その地は、今の哈喇和卓にて、西域水道記に吐魯番の東七十里にありと云ひ、一八七九年にその地に至りし嚕西亞の博士喇格勒は、名を喀喇古札と書き、秃兒番の東南四十嚕里に在りと云へり。この征夏の役に楚材の従へることは、楚材の傳に見え、この役は夏國の西より進みたること、本紀に見え、金國志にも「蒙古由回鶻往攻西夏、西夏遂亡」とあれば、太祖二十年乙酉の冬至の日には、楚材は大軍に従ひて哈喇和卓に在りたり。然らばその出陣を本書元史の戊の年とくたるは非にして、親征錄集史の酉の年とくたるは是なり。元

再征の理由

史に曰く二十一年春正月、帝以西夏納仇人赤騰喝翔昆及不遣質子、自將伐之。赤は亦の誤寫にして、續通鑑綱目には亦とあり。亦騰喝翔昆は、即親征錄の亦刺合鮮昆、秘史の你勒合桑昆なり。癸亥の年王罕の滅びたる時、亦刺合走西夏、日剽掠以自資、既而亦爲西夏所攻、走至龜茲國、龜茲國主以兵討殺之」と元史に有り。仇人を納るとは、その事を指せるなり。然るに西夏書事實慶元年太祖二十年の處に「九月、蒙古仇人赤騰喝翔昆來奔、納之。赤騰喝翔昆乃蠻部屈律罕子云云。德旺以其同仇納之、給以糧糗」といれ、いと書きたるは、杜撰も甚し。また桑昆の西夏に走りたるは、二十餘年前の事なれば、その事を以て西夏を責めたるは、乙丑の年始めて西夏を征したる時の事なるべし。今度の再征の理由は、秘史の前文に詳なるのみならず、集史には唐古未還遣使結漠北諸部爲外援、陰圖拒守計、諸部出兵應之」とあり。この事も、實ならずば、集史の「叛けり」と云へるも、形なきことにはあるまじ。また續通鑑綱目に「蒙古鐵木真伐夏」を乙酉の冬十月といたるは、耶律楚材の序文に合ひて是なるが如くなれども、元史本紀丙戌の夏避暑の後に記せる戰事、「取甘肅州西涼府、十一月取靈州、進次鹽州川」をみな乙酉の年の内に記したるは、また非なり。集史に曰く「唐古揚又叛けりと聞きて、雞の年秋、軍を整へて合申を攻め、察合台には本部の兵にて老營の後路を守らうめ、拙赤は已に死し、斡歌台は軍に従へり。拖雷罕はその妻失兒忽克屯別乞痘を出せるに由り、數日後れたり。妻の名は、」路にて冬に秘史に「莎兒合黑塔泥別乞」元史に「唆魯禾帖尼」とあり、皆音近し。

續綱目集史の記事

太祖の負傷

阿兒不合の多き野馬を圍獵したれば、成吉思合罕は、勾莎秃孛囉（馬の種類の名にして、明譯紅沙馬）に騎りて在りき。野馬ども撞きて來つれば、勾莎秃孛囉驚きて、成吉思合罕を馬より落したれば、膚を甚く痛めて、搦斡兒合惕に下營せり。その夜宿りたれば、朝に也遂合敦言く「諸王眾官人に告げ合はん。合罕は夜膚熱り寝ね給へり」と云へり。そこに諸王眾官人聚れば、晃豁塔惕の脫命扯兒必建議して言く「唐兀惕の民は、築きたる城ある、動かざる營盤あるなり。築きたる城を撞げては去らじ、彼等動かざる營盤を撤しては去らじ、彼等我等退きて合罕の膚冷めなば、又却て

試みの詰問

出馬せんぞ、我等」と云へば、馱の諸王官人等、この言を是として、成吉思合罕に奏しければ、成吉思合罕宣はく「唐兀惕の民は、我等を心怯ちて回れりと云はん。我等は、使をまづ遣りて、使をすぐ此の擲斡兒合惕にて試みて、彼の言を察て退かば可からん」と宣ひて、そこに使を命持ちて遣るに「先年不兒罕汝言く我等唐兀惕の民は、爾が右の手とならん」と云ひき。汝にかく云はれて、「撒兒塔兀勒の民に協議に入られずして、出馬せん」とて、索めて遣れば、汝不兒罕は、言(東約)に遵はず、軍をも與へず、言にて侵して來てありき。別に向へる時、後に折證

阿沙敢不の暴言

せん」とて、撒兒塔兀勒の民の處に出馬して、長生の上帝に祐護せられて、撒兒塔兀勒の民を正路に入らしめて、今不兒罕の處に言を折證せんとして來ぬ」と云ひて遣りたれば、不兒罕言く「侵せる言は、我言はざりき」と云ひき。(太祖十四年己卯西征の軍を興さんが爲に使を遣りて兵を徹したる時、この不兒罕は、即ち德旺なり。)阿沙敢不言く「侵せる言は我言ひき。今も有らば、汝等忙豁勒は、戰に慣れて戰はんと云はば、我こそは阿刺篩の山に營盤あり帖兒度天幕の家あり。駱駝の馱くるあるなれ。阿刺篩指して、我が處に來よ。そこに戰はん。金銀織物財用ふるあらば、額哩合牙額哩折

阿刺篩即ち
賀蘭山

兀に向へ」と云ひて遣りき。(阿刺篩は、明譯に賀蘭山とあり。元和郡縣志賀蘭山、在靈州保靜縣西九十三里。山

額哩合牙即
ち中興府

有樹木、青白如駁馬。北人呼駁爲賀蘭。從首至尾、有像月形。南北約長五百餘里。眞邊城之鉅防。河套志上有廢寺百餘。多元昊故宮遺址。清一統志賀蘭山在河套以西。與甯夏府邊接界。土人名曰阿拉善山。阿拉善額魯特部和碩親王の領地は、この山の西にありて、その駐牧の處を定遠營と云ふ(蒙古游牧記)。嚙西亞の普兒在哇勒思奇は、一八七一年に定遠營の地に至れり。額哩合牙は、明語譯に寧夏とあり。寧夏の城は、元史地理志に「寧夏府路唐屬靈州。宋初廢爲鎮。領蕃部。自唐末有拓拔思恭者、鎮夏州。有銀夏綏宥靜五州之地。宋天禧間、傳至其孫德明、城懷遠鎮爲興州。以居。後升興慶府。又改中興府。元至元二十五年、置寧夏路總管府、領州三」とある處にて、夏の時は國都となり、至元以後は寧夏府路と稱し、甘肅行中書省に屬し、明の世は寧夏衛と稱し、陝西省に屬し、今は又甯夏府となり、甘肅省の東界の要會なり。元史太祖紀四年己巳には中興府、二十二年丁亥には夏王城と云へり。額哩合牙は、蓋中興府の舊き土名にして、土人蒙古人は、後後までもその名を用ひたるならん。明譯に寧夏といたるは、至元以後の名に改めたるなり。馬兒科保羅の紀行に「額兒傀兀勒より東に八日馬行して、額固哩噶牙の州に至る。屬する市邑多く、首府を喀刺昌と云ふ。その民は、駱駝の毛より世界にて最も美しき緞子を夥しく織出す」と云ひ、多遜は、喇失惕に據りて、唐古惕の王失迭兒古の都亦兒該を蒙古人は亦兒喀牙と云ふ」と云へり。保羅の額固哩噶牙も、喇失惕の亦兒喀牙も、蒙古源流に屢見えたる亦兒該も、皆即ち本書の額哩合牙なり。喀刺昌は、即阿拉善、即賀刺山にて、賀蘭山の麓にある故

額哩折兀即
ち西涼府

に、その城をもいか云ひくならん。裕勒は、保羅の額固哩噶牙喇失惕の亦兒喀牙を迭邁刺(即元史)の兀刺海に當てて、喇失惕の亦兒喀牙を都と云へるを誤れり」と、隨て克刺魄囉惕のそれを甯夏に當てたるを非なり」と、「額固哩噶牙は、今の阿拉善親王の地にして、その都喀刺昌は、今の定遠營ならん」と云へるは、甚ト誤なり。又曷思麥里の傳に「會帝親征河西、曷思麥里云云、命常居左右、至也吉里海牙、又討平失的兒威」とある也。吉里海牙は、即額哩合牙にて、保羅の額固哩噶牙に最も音近し。失的兒威は、即喇失惕の失迭兒古にて、威は忽の字などの誤なり。額哩折兀は、明譯に西涼とあり。西涼の城は、元史地理志に「永昌路、唐涼州、宋初爲西涼府、景德中陷入西夏。元初仍爲西涼府。至元十五年、以永昌王諸王只必帖木兒宮殿所在、立永昌路、降西涼府爲州、隸焉」とある處にて、至元以後は永昌路西涼州と稱して、甘肅行中書省に屬し、明は陝西涼州衛となり、今は甘肅涼州府となり、今は甘肅涼州府永昌縣となり、涼州府治武威縣の西北百六十清里に在り。馬兒科保羅の紀行に曰く「甘肅出(即甘州)より出でて東に五日旅すれば、額兒傀兀勒と云ふ王國に至る。それは、唐古惕の大州をなせるあまたの王國の一つなり。」額兒傀兀勒は、即額哩折兀なり。甘州より五日路にて、甯夏までは八日馬行せりと云へば、今の涼州府の位置には、合へり。保塞兒は、永昌にあてて、永昌王の地なるが故に「王國」と云へるならんと云ひたれども、馬兒科の「王國」は、額兒傀兀勒に限りて云ひたるにもあらずれば、「王國」の字は、拘るにも及ぶまじ。額兒傀兀勒は、太祖南征の時の額哩折兀にして、永昌王の住まざりし前よりある處なれば、永昌路治にはあらずして、宋夏元初の西涼府なるべし。

阿刺篩の戰

の言を成吉思合罕に致したれば、成吉思合罕は、膚熱りてあるに宣はく「罷めん、その事を(退く事を)罷むべし」かゝる大言を言はせて、いかんぞ退かれん。死ぬとも、大言に寄りて行かん」と宣ひて、「長生の上帝爾知しめせ」とて、成吉思合罕は、阿刺篩指して到りて、阿沙敢不と戦ひて、阿沙敢不を敗りて、阿刺篩の上に楯籠らせて、阿沙敢不を捕へて、天幕の房ある、駱駝の馱くるある彼の民を灰の如く刮拂ふまで虜へさせたり。雄雄しく猛き男風好き唐兀都惕(唐兀惕の複稱)を殺して、「かくかく唐兀都惕を軍の人拏へたるに依り得たるに依り取れ」と勅ありき。

雪山の駐夏

成吉思合罕は、雪ある「山」の上に駐夏して、阿沙敢不

と共に山に上りたる、抗ひたる、天幕の房ある、駱駝の

馱くるある唐兀都惕を軍を遣りて算へたるに依り盡

くるまで虜へさせたり。(雪あるは、蒙語察速禿の譯なり、明譯に雪山とあるに由り、施世杰は、甘肅甘州府張掖縣の南にある雪山なりと云へり、されども雪山と云ふ山は處處にあり、又察速禿は漢名の雪山を譯したりとも限られざれば、山の所在は確ならず、但本文前後の續きに依りて考ふれば、賀蘭山龍頭山の羣峯の内なるに似たり、太祖紀二十一年正月親征の續に二月取黒水等城夏避暑於渾垂山取甘肅等州とあり、蒙古游牧記に肅州境有二黒水、其一即張掖河、別名黒河、其一黒水、在州西北一百二十里、源出黒水泉、合清水、東流入、討來河、下流與張掖河合と云ひ、その張掖河即黒河は、北流五

黒水城の所在

百清里、額濟納の地に至り、額濟納河と云ひ、末は居延海に入る、額濟納は、元史地理志の亦集乃路馬兒科保羅の額次納城、今の額濟納舊土爾扈特部の牧地にして、西夏にてはそこに威福軍を置きたり、黒水等城は、その威福軍の界内の地なるべし、耶律希亮の傳に「酒匿甘州北黒水東沙陀中」とある、黒水も、甘州の北なり、渾垂山は、西夏書事に「在肅州北」とあれば、秘史の雪山駐夏とは説異なるに似たり、その是非は知らざれども、強ひて牽合せ難し、それより孛斡

元勳の恩賞

兒出木合黎二人に恩賜するに「方に知るまで取れ」と勅ありき。(元史の紀傳に據るに、木合黎は、今より三年前、太祖十八年に薨じた。りこ、に出したるは非なり、もくは木合黎の遺族の誤りならん。)

又成吉思合罕勅あるには「孛斡兒出木合黎二人に恩賞を與ふるに、乞塔惕の民より與へざりき」とて、「乞塔惕の民の主因を汝等二人均しく分け合ひて取れ。彼等の好き子どもを鷹を執らせて隨へて行け。彼等の好き子どもを育ひて、妻どもを襟整へさせよ。乞塔惕の民の阿勒壇罕の信任せる寵臣は、忙豁勒の祖なる父君を失ひたる合喇乞塔惕主因の民にてありしぞ。今我が信任する寵臣は、孛斡兒出木合黎汝等二人なるぞ」と勅ありき。

主因の民

(卷一なる俺巴孩合罕を撃へたる塔塔兒の主因の民は、塔塔兒諸部の中の一つなるに似たり。卷十一なる縉山の戰に合喇乞塔惕主見扯惕主因の勇猛なる軍とあるを見れば、主因は、契丹女真と並べ稱せらるゝ大部族なるが如し。今こゝに也速該を殺せる塔塔兒の民を合喇乞塔惕主因の民と云ひ、又乞塔惕の民の主因とも云へるにつきて考ふるに、この主因の民は、蓋契丹の別部にして、塔塔兒の地に難居してその伴侶となり、塔塔兒亡びて後は、金に事へてその親軍となりたるならん契丹の別部なるが故に、合喇乞塔惕主因の民と云ひ、塔塔兒の地に住みてその伴侶となれる故に、塔塔兒の主因の民と云ひ、金に事へたる故に、乞塔惕の民の主因と云へり。輟耕錄に、蒙古七十二種色目三十一種を挙げたる後に、漢人八種と云ひて、契丹高麗女直竹因歹朮里闊歹竹溫歹竹亦歹渤海を挙げたり。鎮海の傳に征伐したる諸國を挙げたる中に只溫あるにつきて、錢大昕の考異に「輟耕錄の竹溫歹は、疑はくは即只溫ならん」と云ひ、又李文田は「輟耕錄の竹因は即主因の對音なり」と云へり。今考ふるに、輟耕錄の氏族は、蒙古にも色目にも重複せるものあれば、竹因歹竹溫歹も一種の重複したるにて、即元史の只溫又即祕史の主因なるべし。)

成吉思合罕は、察速禿(雪あ)より動きて、兀喇孩の城に下營して、兀喇孩の城より動きて、朶兒篋該の城を破りて在せる時、不見罕は、成吉思合罕に見えに來ぬ。(兀喇孩は、親征錄元

不見罕の來降

兀喇孩即ち
阿喇克城

史太祖二年丁卯の條に斡羅孩城、元史四年己巳の條に兀刺海城とあり、地理志甘肅等處行中書省七路二州の末に兀刺海路ありて、その建置沿革は闕けたれども、原注に「太祖四年、由黑水城北、兀刺海西關口入河西、獲西夏將高令公、克兀刺海城」とあれば、甘肅等州の東にあることだけは推し量らる。喇失惕の額哩喀、又額兒刺喀（額兒篤曼の讀みたる阿魯克奇）は、即ち兀喇孩にして、國都なる亦兒該また亦兒喀牙と異なり、然るに裕勒は、迭邁刺（即ち元史の兀刺海を馬兒科の額固哩噶牙（寧夏）に當てたるは、誤なり、又克刺魄羅惕は、庫ト來時代の亞細亞の地圖に、兀刺孩を寧夏の北なる黄河の大曲の邊に書き入れたれども、何に據りたるにや、蒙古游牧記阿拉善額魯特部の條に、康熙年中兵部督捕理事官拉都琥の奏を引ききて「龍頭山蒙古謂之阿拉克鄂拉、乃甘州城北東大山脈、縣延邊境、山口即邊關、建夏口城、距濫川堡五里、山盡爲甯遠堡、距龍頭山里許、有昌甯湖、界之、又清一統志に、龍首山、在旗西南、與甘州府山丹縣、接界、蒙古名阿喇克鄂拉、縣互廣遠、東大山之脈絡也、距甘州城三十里」とあり、施世杰は、これに據りて「兀刺孩、即阿喇克鄂拉之對音、元太祖由今張掖縣起程、東攻靈州、定須踰此山也、是兀刺孩城、必在今阿喇克鄂拉之中矣」と云ひ、高寶銓は「今山口即邊關、建夏口城、疑兀刺孩城、即在其處」と云へり、阿喇克鄂拉は、即ち阿喇克の山なれば、阿喇克の音は兀喇孩また阿魯克奇にや、似たり、亦兒該は、明譯に靈州とあり、靈州の城は、元史地理志寧夏府路の下に「靈州、唐爲靈州、又爲靈武郡、宋初陷於夏國、改爲翔慶軍」とあり、明の陝西寧夏衛靈州所は、そのや、東北に移り、今は甘肅甯夏府靈州となりたれば、夏の靈州の遺趾は、今の靈州の西南に在り、蒙古源流に圖爾墨格依城とあるは、即ち亦兒該なり、喇失惕の迭兒薛孩は、篋を

朵兒篋該即ち靈州

元史の征夏の師

甘州
肅州
沙州
黄河九渡
應里縣

薛と誤れり、この不見罕は、前に見えたる獻宗德旺に非ず、德旺の弟清平郡王の子末帝親なり、續通鑑綱目丙戌寶慶二年（太祖二十一年）の條に「蒙古主入夏、城邑多降、七月、夏主德旺憂悸而卒、國人立親、元史太祖紀には二十二年丁亥六月、夏主李親降」とあり、太祖紀二十一年夏、避暑渾垂山の續きに曰く「取甘肅等州、秋取西涼府、擄羅河羅等縣、遂踰沙陀、至黄河九渡、取應里等縣、冬十一月、庚申、帝攻靈州、夏遣嵬名令公來援、丙寅、帝渡河、擊夏師、敗之、丁丑、五星聚見於西南、駐蹕鹽州川、二十二年丁亥春、帝留兵攻夏王城、自率師渡河、攻積石州、二月、破臨洮府、三月、破洮河西寧二州、夏四月、帝次龍德、拔德順等州、德順節度使愛申進士馬肩龍死焉、これらの征戰の路順を考ふるに、まづ甘州は、馬兒科保羅の甘肅出、喇失惕の喀米出、元の甘肅行省甘州路、明の陝西甘州衛、今の甘肅甘州府なり、肅州は、馬兒科保羅の速克出、喇失惕の昔出、元の甘肅肅州路、明の陝西肅州衛、今の甘肅肅州なり、この二州は、甘州東にありて、肅州西にあれば、蒙古の軍は、まづ肅州を取りて、次に甘州を取れり、肅州の西に沙州あり、夏國の西端なり、この役に沙州を敗り、肅州を屠りたることは、昔里鈴部の傳に見え、次に甘州の守將は、察罕の父にして、その副將に殺されたること、察罕の傳に見ゆ、西涼府は、前に注せり、西涼の圍みに結合、重山の指揮くたること、重山の傳に見ゆ、擄羅河羅は、夏人の置きたる西涼府の屬縣なるべし、元には無し、沙陀は、沙漠なり、涼州より直に甯夏に赴くには、必ず沙漠を渉る、黄河九渡は、河源附録にある上流の九渡に非ず、應里縣の南にて、河流いくつにも分れたる故に、九渡と云ふ、應里縣は、元史地理志寧夏府路の下に「應理州、與蘭州接境、東阻大河、西據沙山」とあり、河源附録に「至蘭州、過北卜渡、至鳴沙河、過應吉里州、正東行

鹽州
積石州
臨洮府
洮河西寧三州
隆德縣
德順州
南京の圍唐慶の使の誤

至寧夏府南、耶律希亮の傳に「自靈武過應吉里城、至西涼甘州」とある。應吉里も、即應理なり。應理は、夏の時縣なり。元の世に州となり、明は陝西寧夏中衛となり、今は甘肅寧夏府中衛縣となれり。靈州は、即朶兒篋該前に注せり。靈州を下せる時、諸將は子女金帛を貪れる中に、耶律楚材は藥材を收めて、後に士卒の疫を愈やしたること、楚材の碑と傳とに見ゆ。鹽州は、唐以來の州にして、元廢せり。故城は、今の靈州の東南に在り。鹽州川とは、清水河の河邊を云ふ。夏王城は、即中興府、今の甯夏なり。積石州は、金史地理志臨洮路の下にあり。本宋積石軍溪哥城、大定二十二年爲州」と云ひ、河源附錄に、上流より下りて「至貴德州地名必赤里始有州治官府又四日、至積石州、即禹貢積石、五日至河州安鄉關」と云へり。故城は、今の甘肅蘭州府河州の西に在り。これより下太祖の過ぎたる所は、大抵金の地なり。臨洮府は、宋の熙州、金元明の臨洮府、今の甘肅蘭州府狄道州なり。洮河西寧は、二州にあらず。三州なり。皆金の臨洮路にして、今は甘肅の地なり。洮州の故城は、今の鞏昌府洮州廳の西南七十清里に在り。河州は、今蘭州府に屬せり。西寧州は、今西甯府となれり。龍德は、即金の鳳翔路德順州隆德縣、今は甘肅平涼府の屬縣なり。德順州の故城は、平涼府靜甯州の東に在り。積石河州臨洮德順にて按竺邇の功あり。こと、按竺邇の傳に見ゆ。臨洮德順の戰は、金史哀宗紀正大四年三月、大元兵平德順府、節度使愛申、攝府判馬肩龍死之。夏五月、大元兵平臨洮府、總管陀滿胡土門死之」とありて、德順の拔けたるは前にあり、臨洮の破れたるは後にあり。陀滿胡土門愛申馬肩龍の事は、金史忠義傳に詳かなり。太祖紀二十二年の末に「是歲、皇子窩闊台及察罕之師圍金南京、遣唐慶責歲幣于金」とあるは、全く贅文なり。この年南京の圍まれたることは、

集史の記事

不見罕の獻上物

金史本紀にも見えず。窩闊台察罕は、この時太祖に従ひて、遠く離れたること無ければ、太宗紀にも察罕の傳にも更にこの事なし。これは、太宗二年自ら金を伐ち察罕従へるをこゝに誤り記したるか。又唐慶の使せることは、翌年五月にあり。唐慶の傳にも「歲丁亥、賜虎符授龍虎衛上將軍使金」とありて、甲戌に使せることなし。これは、元史の持病なる例の重複なり。喇失惕曰く「蒙古の軍唐古揚に入り、喀米出昔出喀出額哩喀を取り、迭兒薛孩を圍みたる時、合申の君失迭兒古は、五十營の兵を率ゐて援ひに來ぬ。成吉思汗は、軍を移して往き迎へ、黃河の支流の氷の上に戦ひ、矢に虚發なく、合申の兵夥く死し、失迭兒古は都に逃げ歸れり。成吉思汗は、かれの弱れるを見て、その都を過ぎ去りて、他の城を攻め下し、遂に乞台の地に入りき。喀出は、瓜州にして、肅州と沙州との間にあり。瓜州は、今の甘肅安西州治、沙州は、安西州敦煌縣なり。靈州の戰に李觀自出でたるは、元史の嵬名合公と説異なり。又察罕の傳に「進攻靈州、夏人以十萬眾赴援、帝親與戰、大敗之」とあるは、兵數の多きこと集史に似たり。乞台の地に入るは、臨洮路の諸城を取れることを云へるなり。」そこに「不見罕見ゆるに、黃金の佛を首として、金銀の器皿九つ九つ、男兒女兒九つ九つ、驢馬駱駝九つ九つ、種種にて九つ九つを表して見ゆる時、不見罕を門暗く（門をあけて）見えさせたり。（明令門

九を尙ぶ蒙古の俗

外行禮九つ九つは、九九八十一にあらず、九つづゝと云ふことなり。蒙古人は、九たるが、元史にも、遼王耶律留哥の寡婦姚里氏の太祖に謁したる時、人馬金幣みな九つづゝ、賜はれることを載せ、また高麗史金就礪の傳にも、蒙古の元帥哈真より高麗の趙冲金就礪二將に少女九人づゝ、駿馬九匹づゝを遣れることを載せたり。今譯者のこゝに姚里氏之美談を引くことを許してよ。耶律留哥の傳に曰く「庚辰太祖十五年）留哥卒、妻姚里氏入奏、會帝征西域、皇太弟幹惕赤斤承制、以姚里氏佩虎符、權領其眾者七年丙戌太祖二十一年姚里氏攜次子善哥鐵哥永安及從子塔塔兒孫收國奴見帝于河西阿里湫城（平涼府）帝曰「健鷹飛不到之地、爾婦人乃能來耶」賜之酒慰勞甚至、姚里氏奏曰「留哥既沒、官民乏主、其長子薛闊扈從有年、願以次子善哥代之、使歸農、帝曰「薛闊舍爲蒙古人矣、其從朕之征西域也、回回圍太子（拙赤）於合迷城、薛闊引千軍救出之、身中梁、又於蒲華擣思干城、與回回格戰、傷於流矢、以是積功爲拔都魯、不可遣、當令善哥襲其父爵、姚里氏拜且泣曰「薛闊者、留哥前妻所出嫡子也、宜立善哥者、婢子所出若立之、是私己而蔑天倫、婢子竊以爲不可、帝歎其賢、給驛騎四十、從征河西、賜河西俘人九口、馬九匹、白金九錠、幣器皆以九計、許以薛闊襲爵、而留善哥塔塔兒收國奴於朝、惟遣其季子永安從姚里氏東歸、阿里湫は、秘史の額哩折兀、馬兒科保羅の額兒愧兀勅にて、即夏の平涼府なり、一回回圍太子於合迷城は、西征の役の始まりに、蒙古の兵篋兒乞惕の餘眾を逐へるもの、合米赤河の邊にて闊喇自姆の兵と衝突せる戰多遜の史を指せるに似たり、又蒙古人の九を尙び白を尙ぶ風俗は、後世までも變はらずと見えて、蒙古游牧記に崇德三

不見罕の殺され

年、喀爾喀三汗、竝遣使來朝、各貢白馬八、かく見ゆる時、成吉思合罕は、心悪かりき。第三の日に成吉思合罕勅あり、亦魯忽不見罕に失都兒忽の名を賜ひて、亦魯忽不見罕失都兒忽に來られて、そこに成吉思合罕は「亦魯忽を逝なせん（死せんとて、脱命扯兒必に「手に掛けて逝なせよ」と勅ありき。そこに脱命扯兒必は「亦魯忽を手に掛けて事畢へたり」と奉りければ、成吉思合罕勅あるに「唐兀惕の民の處に言を折證せん」と來つるに、路にて阿兒不合の野馬を圍獵したれば、「痛めたる我が膚を痊やせ」とて、我が命體を愛みて、言を陳べたるは、脱命なるぞ。對手の人

脱命の恩賞

失都兒忽

唐兀惕の殲滅

のなめしき言の處に來て、長生の上帝に力を添へられて、手に入れて、怨を報いたるぞ、我等亦魯忽の此の持ち來つる、起てたる行宮は、器皿ごめに脱命取れ」と勅ありき。(亦魯忽は、李睨の國語の名にして、安全の國語の名に同じ、蒙古にも色直ならざるを辱めんが爲に、わざと正直と云ふ名を賜へるなるべし。喇失惕の額兒篤曼の譯せる) 失迭兒古、蒙古源流の錫都爾郭は、皆この賜はれる名を以て記したるなり。親征錄に李安全を失都兒忽と書けるは、安全の國語の名亦魯忽は李睨と同トキを、失都兒忽の名同トと思ひ誤れるならん)

唐兀惕の民を虜へて、亦魯忽不見罕を失都兒忽となして、彼を片附けて、唐兀惕の民の母父を子孫の子孫に至るまで木忽里木思忽里を無くなし、食物を食ふ間に「木忽里木思忽里無」として「死なしめ滅せり」と言ひ居

太祖の昇遐

六盤山

れ」と勅ありき。(木忽里木思忽里無は、子遺無など云ふ意) 唐兀惕の民は、言を言ひて、言に遵はざる故に、唐兀惕の民の處に成吉思合罕は二たび出征して、唐兀惕の民を窮めて來て、猪の年(後堀河天皇安貞元年丁亥、宋の理宗寶慶三年、金の哀宗正大四年、元の太祖二十二年、西紀一二二七年、太祖六十六歳の時)成吉思合罕は、上天に昇り給ひぬ。昇り給へる後、也遂合敦に唐兀惕の民より「分民を多く與へたり」(親征錄は、甚簡略にして、乙酉歸國の年)

是夏避暑、秋復總兵征西夏、丙戌春至西夏、一歲間盡克其城、時上年六十五矣、丁亥滅其國以還と云へるのみなり。元史には、二十二年丁亥四月、德順の戰の次に「五月、遣唐慶等使金、閏月、避暑六盤山、六月、金遣完顏合周、奧屯阿虎來請和、帝謂羣臣曰、朕自去冬五星聚時、已嘗許不殺掠、遽忘下詔耶、今可布告中外、令彼行人亦知朕意、是月、夏主李睨降、帝次清水縣、西江、秋七月壬午、不豫、己丑崩于薩里川、哈老徒之行宮」とあり。六盤山は甘肅平涼府隆德縣の東二十清里、平涼府固原州の西南三十清里に在り。方輿紀要に「曲折險峻、盤旋有六」が故に名づくると云ひ、その上に六盤關ありて、隆德と固原との界をなせり。喇失惕は「主兒只(女直即金)南乞牙思

清水縣

薩里川哈老徒の行宮

集史の記事

〔南朝即宋〕合申〔河西即夏〕三國の界なり」と云へども、三國の界に非ず、金夏二國の界なりき。清水縣は、金の鳳翔路秦州の屬縣、今の甘肅秦州の屬縣にして、隆德縣の南隣なり。西江は、地圖に見えざる小河なり。六盤山を遠くは離れざるべし。金史愛申の傳に「正大四年春大兵西來、擬以德順爲坐夏之所」とあるは、六盤山に暑を避けんとするを云ふ。按竺邇の傳に「駐兵秦川」とあるは、西江に駐まれるを云ふ。薩里川は、卷四以來屢見えたる撒阿里客額兒なり。哈老徒は、今の噶老台にして、内府輿圖に噶老台嶺、噶老台河、噶老台泊あり。行宮のありしは、噶老台泊の邊ならん。行宮は、幹兒朶の譯語にして、行幸さきの宮殿にあらず、行動自在の宮殿なり。集史〔別喇津の譯せる〕に「狗の年の春、昂坤塔郎忽禿克の地に至り、病に罹り、夢を見て、死期近づけるを知れり」とあるを、洪鈞は「果有此夢、必是猪年而非狗年」と云へり。次に「この時諸子の内、側に居たるは、也松格兒〔拙赤合撒兒の子〕のみなりき。幹歌台禿里は、いづくにか居る。遠ざかれるか」と問へば、「只二三里離れたり」と申しき。呼び寄せて、次の朝諸將侍從を退けて、諸子に向ひ「我が命終らんとする時至れり。われ、汝等の爲にこの大業を肇め、東西にても南北にても、はてよりはてまで一年の路程あり。我が遺言は、たゞ汝等敵を禦ぎ、民を保ちて永く祚を享けんには、必ず眾人の心を一つに合はせよとなり。我が死にたる後は、汝等幹歌台を君に戴け。また汝等は、各歸りて事を治むべし。われ、この大名を享けたれば、死ぬとも憾なし。われは、故土に歸らん〔葬られん〕ことを望む。察合台は、側に居ざれども、我が遺言に背きて亂を起すには至るまじ」と云へり。額兒篤曼は、太祖の遺言として、眾人一心の誓に、東箭の談と多頭蛇の談とを引けり。東箭の談は、秘史の阿闐豁阿の教訓に同じ。多頭蛇の談

元史姚天福の傳に古跡を引きて一蛇九尾首動尾隨一蛇二首不能寸進とあり

太祖の崩したる地

は、ある寒き夜、穴を索めたるに、多頭蛇の頭ども、互に争ひて、遂に凍え死に。一頭多尾の蛇は、安らかに穴に隠れき」と云へるなり。集史の續きに「遺言畢りて、諸子を出し遣り、自ら兵を率ゐて南乞牙思〔南朝〕に入りたれば、至る所皆迎へ降れり」とあり。この年、蒙古の遊兵は、金の鳳翔京兆に入り、又南は關外の諸隘を破りて、宋の武州階州に入りたれども、太祖自ら宋の地を踏みたることなし。又續きに「六盤山に至れば、主兒只聞きて、使を遣り、眞珠を山盛にして贈れり」と云へるは、金史元史の議和使完顏合周等にして、この年六月の事なり。また「失迭兒古は、力竭きて、使を以て降服を願ひたれば、成吉思汗は、その請を允し、また貢物を備へ、民戸を遷さんが爲に、一月の猶豫を得て、自ら來朝せんと云へるをも允し、かつ「今われ病あれば、暫くくるな」と告げて、脱命扯兒必を遣りて、失迭兒古を慰撫せり。成吉思汗は、これより病日に重く、今はのきはに大臣に告ぐるに「われ死なば、喪を發せず、敵に知れざらうめ、合申の君のこんを待ちて殺せ」と云ひ、八月十五日に死にたり。諸將は、遺命に遵ひて喪を秘し、合申の君朝謁に來つるを執へ殺し、密に柩を奉つて老營に歸り、然る後に喪を發せり」と云へり。脱命扯兒必の役目は、秘史と稍異なり。又察罕の傳に「還次六盤山、夏主堅守中興、帝遣察罕入城、諭以禍福。眾方議降、會帝崩、諸將擒夏主殺之。復議屠中興、察罕力諫止之。馳入安集遺民」とあるは、秘史とも集史とも事情異なり。察罕を褒め過ぎたるに似たり。太祖の崩したる地は、陳樞の通鑑續編に六盤山とし、集史と察罕の傳とに合へり。蒙古源流に「青吉斯汗、以丁亥年七月十二日歿於圖爾墨格依城、年六十六」とある。七月十二日は、即元史の己丑、圖爾墨格依は、即秘史の朶兒篤該、即靈州なり。靈州として、秦州として、つまり六盤山より

太祖臨終の言

起蓋谷の所在

遠くは離れず、然るを元史に薩里川と書けるは、喪を秘して老營に歸りて後に、
 か發表したりしならん。七月五日壬午、秦州にて病作り、それより僅に七日を経た
 る十二日己丑に蒙古にて崩するは、有られざることなり。元史の本づきたる舊史即
 太祖實錄などは、當時發表したる布告に従ひ、蒙古に崩したりしならず、その日
 附は、發表したる日を用ひず、漠地に崩したる眞の忌日を録したるならん。太祖二
 十二年丁亥の七月十二日己丑は、主里安曆の一二二七年八月廿五日なれば、集史の
 譯文に八月十五日とあるに合はず。佐久間信恭曰く「十五日は、必廿五日の誤寫なら
 ん」太祖紀に曰く「臨崩謂左右曰、金之精兵在潼關、南據連山、北限大河、難以遊破、
 若假道于宋、宋金世讎、必能許我、則下兵唐鄆、直搗大梁、金急、必徵兵潼關、然以數
 萬之眾千里赴援、人馬疲弊、雖至弗能戰、破之必矣」言訖而崩、壽六十六、葬起蓋
 谷。西史に載せたる太祖の遺言は、諸子を訓ふる辭と喪を秘することとのみに、
 て南伐の謀に及ばず、黑韃事略徐霆の疏證に王楙の言を引きて「某向隨成吉思、攻
 西夏、西夏國俗、自其主以下、皆敬事國師、凡有女子、必先以薦國師、而後適人、成吉
 思既滅其國、先禱國師、國師者比丘僧也、其後隨成吉思、攻金國鳳翔府、城破、而成
 吉思死、嗣主兀窟解合哀云「金國守潼關黃河、卒未可破、我思量鳳翔通西川、西
 川投南、必有路可通黃河、後來遂自西川、運運入金房、出汝光、徑造黃河之裏、竟
 滅金國」とあり、兀窟解は即太宗幹歌歹なり、この言に據れば、西南の路より汴京に
 逼るの謀は、太祖より出でずして、太宗より出でたるに似たり、起蓋谷の所在は確
 ならず、黑韃事略に「其墓無塚、以馬踐蹂、使平如平地、若武沒眞之墓、則揮矢以爲垣、
 (原注)闊踰三十里、運騎以爲衛、徐霆の疏證に「寔見武沒眞之墓、在灑溝河之側、山

水環繞、相傳云武沒眞生於此、故死葬於此、未知果否、灑溝河の溝の字、洪鈞引きて
 涑の字と、羅帶祿の藏本には局の字とせり、いづれにても客魯倫河なり、帖木
 眞そこに生れたりと云へるは、傳聞の誤なり、馬兒科保羅の紀行に「あらゆる大汗、太
 祖成吉思のあらゆる子孫は、阿勒泰と云ふ山に運びて葬らる。汗はいづこに死ぬと
 も、死にたる所は百日路隔たるとも、必ず先祖の居るその山の墓所に運ばる」とあ
 り、阿勒泰と云へるは、誤れり、大佐裕勒は、この阿勒泰を、今の昔別哩亞界の大山脈に
 非ず、兀兒噶に近き汗壽刺即汗山ならんと云ひたれども、汗山とて、客魯倫河よ
 り隔たれり、喇失惕曰く「成吉思汗は、不見勒喀勒敦(神の山)即也客庫嚕克(大靈地)また
 大禁地」と云ふ所に葬られき、また曰く「嘗て獵に出でて樹の下にたすみ、その樹
 を愛して「われ死なば、こゝに葬れ」と云へることあり、こゝにより、遂にそこに葬れり、
 その樹は著くかりしが、後にまはりの樹木速に生ひ立ち、茂き林は地を蔽ひて、墓
 のありが分らずになり、葬りを送りたる人にも識ること能はざりき、禿里汗曼
 古汗庫必來汗阿里不喀は、皆こゝに葬られ、他の子孫は別の所に葬らる、墓守は、兀
 児噶千人なり」と云へり、不見勒喀勒敦は、今の肯特山にして、即客魯倫河の源な
 り、元史本紀に據れば、憲宗紀に葬地を脱したる外、寧宗までの諸帝みな葬起蓋谷
 とあり、又明の葉子奇の草木子に曰く「歷代送終之禮、元朝宮裏、用椁木二片、鑿空
 其中、類人形大小、合爲棺、置遺體其中、加糝漆畢、則以黃金爲圈、三圈定、送至其直
 北園寢之地、深埋之、國制不起墳壙、葬畢、以萬馬蹂之、使平、殺駱駝于其上、以千
 騎守之、來歲春草既生、則移帳散去、彌望平衍、人莫知也、欲祭時、則以所殺駱駝之
 母爲導、視其躑躅悲鳴之處、則知葬所矣、駱駝の説は信難けれども、葬地の制を

太祖紀の末段

滅國四十

云へる所は、黑隄事略の以馬踐蹂、喇失惕の茂林蔽地と參考すべし。また蒙古源流に曰く以鞏奉樞、至程納之、漳爾處所、車輪挺然不動、蘇尼特之吉爾根、巴圖爾、鄂嫩の德里哀布勒塔克、克魯倫等地を歴擧ぐて、謂く汗何戀唐古特、反將昔日屬蒙古等乘擲言畢、樞因徐徐轉動、遂至所卜久安之地、因不能請出、金身遂造長陵、共仰庇護、於彼處立白屋八間、在阿勒坦山陰、哈岱山陽之大罽特克地方、建立陵寢、號爲索多博克達、大明青吉斯汗之源流の原文を獨逸文に譯せる施米惕の撒難辭禪には、その久安の地を阿勒泰汗の陰と肯帖依汗の陽との間の也、客兀帖克の地方と譯せり、この汗は、山の義にして、肯帖依汗は、即肯特山なれば、この阿勒泰山は、肯特山より分れ出でて、客魯倫河の源を挾める一峯の名なるべし、馬兒科保羅の阿勒泰も、この山の事を聞き傳へたるにやあらん、諸書を合せ考ふるに、起鞏谷は、客魯倫河の源肯特山の陽に在りて、撒阿里原の幹兒朶より遠くは離れざるべし、今太祖の實錄全く終り、太宗の事に移らんとするに臨み、こゝに太祖紀の末段を引かぬめよ、至元三年冬十月、追諡聖武皇帝、至大二年冬十一月庚辰、加諡法天啓運聖武皇帝、廟號太祖、在位二十二年、帝深沈有大略、用兵如神、故能滅國四十、遂平西夏、其奇勳偉跡甚眾、惜乎當時史官不備、或多失於紀載云、一謂はゆる滅國四十は、非ず、部落をも指せるならん、滅と云へるは、擊ち滅されたるのみならず、擊たれて降りたるもの、自ら服屬したるものをも込めたるならん、まづ蒙古の別部にて滅されたるは、主兒勤合塔斤、撒勒只兀惕、朶兒別惕、泰赤兀惕、札只喇惕の六部なり、蒙古の外に滅され又は降りたるは、塔塔兒四部、篋兒乞惕三部、客喇亦惕部、乃蠻二部、乃蠻の古

出魯克罕の據れる合喇乞塔惕、豁哩禿馬惕、撒兒塔兀勒、即闊喇自姆沙の領地、康鄰即康克里、乞卜察兀惕、即乞魄察克、巴只吉惕、即巴施客兒篤、阿速惕、即阿蘭、撒速惕、即撒克新、薛兒客速惕、即徹兒客思、李刺兒、即不勒噶兒の二十部に、して、前の六部と合せて二十六部なり、自ら服屬したるものは、亦乞喇思翁吉喇惕、豁囉刺思、幹亦喇惕、汪古惕、委兀惕、合兒魯兀惕、七部の外に、不哩牙惕、巴兒渾、即巴兒古惕、兀兒速惕、合卜合納思、乞兒吉速惕、失必兒、客思的音、即客思的米、帖良古惕、即帖連郭惕、脫幹列思、即禿刺思なる九部の林の民あり、前の二十六部と合せて四十二部となる、林の民は、この外にも、康合思禿巴思、巴亦惕禿合思、塔思などありて、いづれも服屬せり、されども林の民は、皆小き部落にして、不哩牙惕、巴兒古惕、乞兒吉速惕などの外は、一部として數ふるに足らざるに似たり、この外に、阿勒馬里克の君、幹咱兒は、秘史には見ざれども、これも服屬せる部落の内なるべし、欣都思惕、幹嚕思惕の國にも、蒙古の兵入りたれども、荒したるのみなり、金の地は、已に十分の七八を取りたれども、滅せる數には入らざらん、つまり元史の四十と云へる數は、大概を示せる辭なるべし、明の史臣は、奇勳偉跡の紀載に漏れたるを惜みたれども、幸に蒙文秘史の世に存して、本紀に數十倍する實錄詳傳を知るを得たれば、史家はこゝに満足することを得べし、

太宗の即位

巴禿

鼠の年（我が安貞二年戊子、宋の理宗紹定元年、金の正大）、察阿歹、巴禿を首とせる右手の諸王（巴禿は、元史、太宗定宗憲宗本紀にみな諸王拔都、忙哥撒兒の傳に宗王八都罕とあり、世系表

多遜の述べたる推戴の禮

に拔都大王を朮赤太子の長子とすれども、多遜の系圖に據れば、拙赤の第二子にして、斡兒答の弟なり。太宗紀八年の處に斡魯朵拔都とあるは、即斡兒答巴秃なり。拙赤は太祖より先に死に、斡惕赤斤那顔、也古、也孫格を首とせる。左手の諸王、(太祖の弟四人の封地は、皆東方に在り、也古) 拙雷を首とせる内地の諸王、公主駙馬萬戶千戶の官人等眾となりて、客魯噠の闊迭兀阿喇勒に咸く聚りて、成吉思合罕の名ざし給へるその勅に依り、斡歌歹合罕を罕に戴けり。(闊迭兀阿喇勒は、即卷四の闊魯額阿喇勒、客魯噠河の中洲なり。太宗紀に曲雕阿蘭之地、また庫鐵烏阿刺里、憲宗紀に闊帖兀阿蘭之地、明宗紀に闊魯傑阿刺倫とある、皆この地なり。多遜曰く「成吉思汗の葬りの後、皇子諸王は、各その領地に散り去り、二年の間、彼等の中に主宰するもの有らざりき。季子なる拙雷は、蒙古の俗に従ひ、父の遺産を保ち、特に蒙古本部と客喇亦惕の地とを領して、國事を攝り居たりしが、一二二九年の春、大罕を選ばんが爲に、庫哩勒台即總會を呼び集めたり。三日饗宴したる後、集會の事務に取懸れり。察合台は、成吉思汗の生き残れる最長子にして、蒙古の相續法に従へば、この語誤れり。下の阿不勒噶資の言を見よ。相續すべき人なり」と、

親征録の書法

父の遺産を受くる斡赤斤

多數の發言は、拙雷を推さんとせり。然れども、斡歌台を名ざしたる成吉思汗の遺言は、力ありき。四十日の猶豫の後、斡歌台の辭退は、引かせられて、兄察合台と叔父兀出肯とは、斡歌台を高位に導き、拙雷は、蓋を捧げ、残りの人は、天幕の内外にて、帽を脱ぎ、支那の古禮に遵ひ、九たび額突き、合罕の號を呼びて、祝聲を擧げたり。その時、斡歌台は、天幕より出でて、日に向ひ、三たび嚴かに拜み、諸人皆それに倣ひ、その日は、宴會にて、畢れり。諸王の誓の辭は、「我等は、ながみことの子孫に、草の上に投げて、他の皇族の王を、皇位に置かざらんことを誓ふ」と云へり。この牛狗に喫はれざるは、譬は、本書の前卷にあるとは、意味全く違へり。かれは、不才なるに譬へ、これは、威靈あるに譬へたるが如し。親征録に曰く「太祖聖武皇帝昇遐之後、太宗皇帝即大位以前、太上皇帝爲太子、戊子(西紀一二二八年)避暑於斡兒罕、金主遣使來朝、太宗皇帝與太上皇共議、擲力蠻復征西域、秋、太宗皇帝自虎八會於先太祖皇帝之大宮。己丑(西紀一二二九年)八月二十四日、諸王駙馬百官大會、怯綠連河曲雕阿蘭、共冊太宗皇帝登極。太上皇帝とは、睿宗拙雷を云ふ。拙雷は、憲宗世祖の皇考なるが故に、か云へり。錢大昕曰く「紀太宗事、而加太上之稱、於其弟、所謂名不正而言不順者矣。阿不勒噶資の書に「蒙古の俗、子どもは、皆外に居て、幼子は、父の遺産を受く、故に、斡赤斤の號は、幼子のみ稱し、その義は、寵の主なり」と云へり。蓋、游牧の民は、一帳の内に、羣兒と同く居ること能はず。故に、大兒は、次第に出でて、外に牧し、畱まる者は、幼子のみなり。金史世紀に「生女直之俗、生子、年長即異居」とあるも、即その事にして、北狄の俗、皆然り。太祖の四皇子を分封するに至り、拙赤最

も遠く、察合台は次に遠く、幹歌歹はや、近く、拖雷のみ内に居るは、羣兒分牧の舊俗を大トかけに實行したるなり、故に蒙古源流には「幼子圖類守産」と云ひ、西史に「父の遺産を保つ」と云へるなり、洪鈞の太祖本紀譯證に、雞の年合申を征する時帝在途、開窩闊台之子庫延古由克歸、二孫求賞賚、帝曰「所有之物已盡歸拖雷、彼係家主、其後拖雷汗以衣物分餽之」と譯して、自注に「拖雷以幼子從父、儼如家主、其後帝崩、遂監國、親征錄謂、太上皇帝時爲太子、皆即斯義、未可斥其誣妄」と云へり、然れども家産を承くると罕の位を襲ぐとは同トからず、蒙古の俗、國に大事あれば、部眾集り議して定む、これを庫哩勒台と云ふ、汗を選ぶにも師を興すにも皆然り、家産は季子に歸すれども、罕の位は庫哩勒台の議にて定まる故に、長子相續の制も無く、父の後には必ず子繼ぐとも限られず、太祖遺言して幹歌歹を立てんと欲したれども、敢て儲位を定めず、皇太子と名づけず、庫哩勒台の議決を経て位始めて定まれり、定宗憲宗の登極みな然り、世祖漢地に居り、漢臣の勸めに従ひ自立するに及びて、この制始めて變はれり、然らば察合台は本より相續人に非ず、拖雷も太子に非ず、幹歌歹も儲君に非ず、筆執るもの蒙古の俗に暗きが故に、記載誤り易し、金主遣使來朝は、金史哀宗紀に據れば、知開封府事完顏麻斤出に、この年正月蒙古に往き弔慰することを命せられ、十二月以奉使不職、免死除名」とあり、擲力蠻は、秘史の擲兒馬罕なり、復西域を征すること、秘史の下の文に見ゆ、定宗紀に「二年八月、命野里知吉帶率擲思蠻部兵征西」とある、擲思蠻は、擲兒蠻の誤なり、虎八は、元史に霍博之地とあり、その地は確ならねども、耶律希亮の傳に、中統二年夏葉密里城に抵り、その冬火字の地に至り、三年忽兒兒の地に至り、還りて葉密里城に至るとある、火字

完顏麻斤出

霍博の地

睿宗拖雷の監國

の地は、即霍博にして、忽兒兒の地は、速不台の傳に、略也迷里霍只部」とある、霍只なれば、霍博、火字即虎八の地は、忽兒兒即霍只の地と共に、額米勒城の邊に在りて、太宗の分地の内なるべし、太祖の大宮は、即闕迭兀阿喇勒の大幹兒朶なり、丁亥の秋、太宗の葬禮畢りて、太宗は諸王と共に各その分地に還り、戊子の秋、拖雷の招集に由り總會に會せんが爲に至れり、招集は戊子の秋なれども、登極は己丑の秋なるを、秘史は誤りて鼠の年に書けり、又元史太祖紀の末に「戊子年、是歲皇子拖雷監國、太宗紀の初に「太宗英文皇帝諱窩闊台、太祖第三子、母曰光獻皇后弘吉剌氏、太祖伐金定西域、攻城略地之功居多、太祖崩、自霍博之地來會喪、會喪は誤れり、拖雷の招集に由り會したるなり、睿宗の傳に「方太祖崩時、太宗置霍博之地、國事無所屬、拖雷實身任之」と云へるも非なり、太祖崩する時は、太宗も軍に従ひて左右に居り、葬禮畢りて後、その分地なる霍博の地に還り、拖雷の監國は、蓋遺命に依りたるにて、太宗の偶居らざるが爲に監國したるに非ず、その監國は初より定まれるが故に、太宗は一先その分地に還りたるなり、又太宗紀に「元年己丑夏、至忽魯班雪不只之地、皇弟拖雷來見、秋八月己未、諸王百官大會于怯綠連河曲、雕阿蘭之地、以太祖遺詔、即皇帝位于庫鐵烏阿刺里、始立朝儀、皇族尊屬皆拜、頒大札撒、原注に「華言大法令也」とあり、この事は、耶律楚材の傳に委しく、己丑秋、太宗將即位、宗親咸會、議猶未決、時睿宗爲太宗親弟、故楚材言於睿宗曰「此宗社大計、宜早定、睿宗曰「事猶未集、別擇日可乎」、楚材曰「過是無吉日矣、遂定策立儀制、乃告親王察合台曰「王雖兄位、則臣也、禮當拜、王拜、則莫敢不拜、王深然之、及即位、王率皇族及臣僚拜帳下、既退、王撫楚材曰「真社稷臣也」、國朝尊屬有拜禮、自此始」と

金の弔慰の使

番士國民の交付

巴黑塔惕の再征

あり又太宗紀金遣阿忽帶來歸太祖之贈帝曰汝主久不降使先帝老于兵間吾豈能忘也贈何爲哉却之遂議伐金阿忽帶是天興元年太宗四年に講和使となれる諫議大夫後に御史大夫(裴滿阿虎帶なり)金史に據ればこの年蒙古に使したるは阿虎帶に非ずして完顏奴申なり(哀宗紀に正大五年十二月壬子完顏訥申改待講學士充國信使奴申の傳に正大五年九月改待講學士以御史大夫奉使大元至龍駒河朝見太宗皇帝十二月還明年太宗元年六月遷吏部尙書復往八年春還)とあり奴申は講和の使にして弔慰の使にあらざれば太祖の(察阿歹兄は幹歌歹合罕を弟を罕に戴きて成吉思合罕額赤格の金の命守り居たる宿衛箭筒士八千の侍衛[即]我が皇考の身に親く行き居たる内臣彼の萬の番士を察阿歹兄拖雷二人は幹歌歹合罕に交せり内地の國民をもその道理に依り交せり。

幹歌歹合罕は己を罕に戴かゝめて内裏に行く萬

西方十一部の再征

の番士を内地の國民を己の物に爲さゝめ畢へて、まづ察阿歹兄の處に謀りて成吉思合罕額赤格の爲掛け置きたる民なる巴黑塔惕の民の合里伯莎勒壇の處に出征したる綽兒馬罕豁兒赤(前卷の擲兒)の後援に、幹豁秃兒蒙格秃二人を出征せさせたり。(幹豁秃兒は外に見えず蒙格秃は即親征録に太宗と拖雷と共議擲力蠻復征西域とあるはこの事を云へるなり)また先に速別額台巴阿秃兒を、康鄰乞卜察兀惕巴只吉惕幹魯速惕阿速惕薛速惕(前卷の)馬札兒(前卷の)客失米兒薛兒格速惕(前卷の)不刺兒(前卷にも後兒とありこの原文に不合兒とあれども)客喇勒(前卷誤り)の民の處に到るまで、阿的勒(前卷の)札牙黑なる水ある河を渡り、篋

篋客禿の城

客禿（後文に蔑格揚の城、憲宗本紀昔里鈴部の傳に阿速の蔑怯思城、土士哈の傳に麥法斯拔都兒の傳に麥各思城とあり、そのありかは確ならず、阿ト勒弗答は、亦奔賽篤を引きて「阿蘭の主要なる寨は、世界の堅城の一なり」と云ひ、馬速的も、この寨を「阿蘭の國と喀ト克高喀速山」との間にて大河の畔にあり」と云ひたれども、寨の名を云はず、ト喇惕施乃迭兒曰く「この城は、蓋帖喇克河の上游にて喀自別克山に近き名高き苔哩額勒の峽にありて、抹哈篋惕教徒の地理家の巴必阿勒蘭（阿蘭の門、古史の玻兒塔高）喀昔亞ならん」と云へり。）綿客兒綿客亦別（前卷の乞瓦綿客兒綿客）を首とせ

る城どもの處に出征したる（出征せしめたるに）速別額台巴阿禿兒

は、それらの民に艱まされて、速別額台の後援に巴禿、不

不哩

哩（多遜の世系表に、察合台の長子木阿禿干の子とあれども、普刺諾合兒關尼は、「察阿歹の子不哩」と云へり、元史憲宗紀元年即位の條に不哩と書きて、察合台の子なる也、速忙可と並べ擧げたり、下文なる長子出征の語に據るに、察阿歹の長子なること明なり、不哩の兄木阿禿干は、太祖の西征に従ひ、巴米安城攻の時に戦死したれば、不哩は今生存せる）古余克（太宗の長子貴由、蒙古源流庫裕克、多遜も同じ、太宗諸子の長兄となれり）紀八年の處には、古與と書けり、太宗崩つて後合罕に立てられ、元史に本紀あり、定宗簡平皇帝、諱貴由、太宗長子也、母曰六皇后乃馬真氏、以丙寅年生帝とあれば、太宗八年丙申の歲、歐囉巴征伐に出陣したるは、三

定宗古余克

憲宗蒙格

十一歳の（蒙格を）蒙格（拖雷の長子にして、定宗崩つて後合罕の子、蒙格、元史本紀に「憲宗時なり、蒙格を）蒙格（罕となれり、蒙古源流、拖雷額駙の子、蒙格、桓肅皇帝、諱蒙哥、睿宗拖雷之長子也、母曰莊獻太后、法烈氏、諱唆魯禾帖尼、歲戊辰十二月三日、生帝時有黃忽答部知天象者言帝後必大貴、故以蒙哥爲名とありて、原注に「蒙哥、華言長生也」と云へれば、蒙哥のモンゴと讀むべきことは、甚確なり、普刺諾合兒關尼のメングと云ひ、喇失惕以下西人の蒙古史に、マングとあるは、皆音訛れり、蒙格は、この出征の時二十）首としてあまたの諸王を出征せさせたり。

長子出征の定め

（この文、やゝ事實に違へり、速別額台の者別と共に、乞ト察克幹魯思諸國を征して苦戦したるは事實なれども、その苦戦を救はんが爲に巴禿等諸王の出征したるに非ず、速別額台は諸國を撃ち破りて還りたれども、その地いまだ平定せざり、故に、太宗は更にその地を悉く征服せんが爲に、巴禿等諸王を遣し、速別額台を參謀として、再征を企てたるなり）この出征したる諸の王等に巴禿長となれと勅ありき、内地より出でたるものには古余克長となれと勅ありき、この出征する部眾を統ぶる諸王は、その子どもも大子に出征せさせよ、部眾を

統べざる諸王、萬戶千戸百戸十戸(即牌)の官人等あまたの人、誰なりとも、その子どもより兄を出征せさせよ。公主駙馬も、同じ理由によりその子どもより兄を出征せさせよと勅ありて、又斡歌歹合罕宣はく「この亦子どもを出征せさせざる理由は、察阿歹兄より起りぞ。察阿歹兄言ひて來ぬるに」速別額台の後援に子どもより兄不哩を出征せしめたり。子どもも兄出征すれば、軍盛なり。出づる軍多くなれば、顔色高く勢よく行くなり。彼方の敵人は、あまたの國あり、その鋒は剛く、彼等の民怒れば己が器械に死に、彼等の民は器械鋭

西征の諸王
十一人

利なりと云はれたり」と云ひて來ぬ。斡歌歹合罕宣はく「その言につき、我等の考に」も、察阿歹兄の著實なる力に依り、子どもを兄を出さんとて、處處に宣布して巴秃不哩古余克蒙格を首とせる諸王を出征せしむる理由かくあり」と宣へり。(この西征の諸王は、多遜の史に、巴秃等施乃迭兒曰く「塔哩黑只杭庫沙亦札米兀惕帖伐哩黑に據るに(原注、多遜第二第六九頁以下)、斡歌台汗の世に集められたる第二(太宗七年)の大會にて、阿昔不勒噶兒乞魄察克嚕西亞の諸國を征服せんが爲に大軍を興さんことを議決したり、この諸國は皆成吉思汗の長子拙赤の子巴秃の領地に接せり。斡歌台は、この征伐に巴秃を助けんことを、次の諸王、即斡歌台の子ども庫余克喀丹、拖雷の子ども曼古不者克、察合台の子ども不哩拜答兒、斡歌台の弟庫勒堪、巴秃の兄弟斡兒答唐古惕失班に命たり、勇武なる速不台巴哈都兒も、この出征に加はり、一二三六年(太宗八年)二月進軍始まれり。喀丹は元史世系表に太宗の第六子合丹大王、速不台の傳に諸王哈丹とあり、不者克は、世系表に睿宗の第八子撥綽大王、牙忽都の傳に睿宗の庶子撥綽とあり、不者克の名は、本書下の文にも見ゆ。庫勒堪また古勒干は、世系表に太祖の第六

子闊列堅太子、太宗紀に果魯干、輟耕錄に果里干、缺劉堅、通鑑續編に郭列干など書けり。古勒干の母を、ト喇惕施乃迭兒は喇失惕を引きて、金帝の女古克主(即岐國公主なりとし、別喇津は、忽蘭合屯なりとて、金帝の女昆主合屯には子なりと云へり。古勒干は、嚙西亞にて戦死せり。斡兒答は、巴禿の兄なり。太宗紀に斡魯朵とあり、世系表には漏れたり。唐古惕失班は、皆巴禿の弟なり。失班は、速不台の傳に諸王昔班とあり、世系表には無し。拜答兒唐古惕の名は、元史に見えず。

金國征伐の議

又斡歌歹合罕は、察阿歹兄の處に謀りて遣るには「成吉思合罕額赤格の見成」の大位に坐れり。いかなる才能に依りてか坐れると言はれたり。我、察阿歹兄可とせば、我等の皇考は、乞塔惕の民の阿勒壇罕を遣掛け(事を)置きたり。今我乞塔惕の民の處に出馬せん」と謀りて遣れば、察阿歹兄可とて何の妨か有らん。老營の裏は好き人に委ねて出馬せよ。我は、こゝより軍

太宗の親征

を出して遣らん」と云ひて遣りき。大斡兒朶思(斡兒朶思の複稱)の裏は、斡勒答合兒豁兒赤に委ねて、

兔の年(我が後堀河天皇寛喜三年辛卯、宋の紹定四年、金の正大八年、元の紀に據るに、太宗の親征は、この年の前年、太宗二年庚寅より始)斡歌歹合罕

は、乞塔惕の民の處に出馬して、者別を先鋒に遣りぬ。かくて乞塔惕の軍を敗りて、爛木の積れる如く殺して、察卜赤牙勒を越えて、處處に彼等の郡城どもを攻めさせに軍を行かゝめて、斡歌歹合罕は失喇迭克(龍虎)に下馬(駐)せり。(者別は、太祖の時、西征より還りて開もなく歿したるに、その幽霊り、三道の侵掠、龍虎臺の駐蹕は、皆太祖南征の時の事なれども、その事甚名高く、て、人口に膾炙したる故に、太宗の南征にもふと誤りて書き加へたるならん。この

金元兩紀の摘録

南征の役は、元史太宗紀睿宗の傳金史哀宗紀、その外金元兩史の將相の諸傳に甚委くければ、今金元兩紀の文を節録して、太宗の武功の概略を示し、本書の簡陋遺脱を補はん。元史太宗紀二年庚寅秋七月、帝自將南伐、皇弟拖雷皇姪蒙哥率師從、拔天成等堡、遂渡河攻鳳翔。金史哀宗紀正大七年冬十月、平章政事完顏合達、樞密副使移刺蒲阿、同行尚書省事于闐、以備潼關。元史十一月、師攻潼關、藍關不克。十二月、拔天勝寨及韓城、蒲城。金史正大八年春正月、大元兵圍鳳翔府、遣樞密院判官白華等、諭闐鄉行省進兵、合達蒲阿以未見機會不行。復遣白華、諭合達蒲阿、出關以解鳳翔之圍、又不行。元史三年辛卯春二月、克鳳翔、攻洛陽、河中諸城、下之。この文誤れり。鳳翔の落ちたるは、四月に在り、河中の下れるは、十二月に在り、洛陽の下れるは、又その遙に後にあり、皆この年二月の事にあらず。金史夏四月、大元兵平鳳翔府、兩行省棄京兆、遷居民於河南、畱完顏慶山奴守之。元史五月、避暑于十九泉、命拖雷出師寶鷄、遣擲不罕使宋假道、宋殺之。この擲不罕の事につき異説あり、前卷の第四四七頁に見えたり。復遣李國昌使宋需糧、秋八月、幸雲中。金史九月、大元兵駐河中府、慶山奴棄京兆東還、召合達蒲阿赴汴、議引兵趨河中、懼不敢行、還陝州、出師至冷水谷而歸。大元兵攻河中府、合達蒲阿遣元帥王敢率兵萬人救之。元史冬十月乙酉、帝圍河中。金史十一月丁未、大元進兵、峽峯關、由金州而樞密院議以逸待勞、未可與戰。上諭之云云、乃詔諸將屯軍襄鄆。金州より進めるは、睿宗拖雷なり。この奇兵の事は、睿宗の傳に詳かなり。元史十二月己未、拔河中。金史十二月、河中府破、權簽樞密院事、草火訛可死之。元帥板子訛可、提敗卒三千走闐鄉、詔赦將佐以下、杖訛可二百以死。合達蒲阿率諸軍入鄧州、元帥左監軍楊

沃衍、忠孝軍總領完顏陳和尚、恆山公武仙、皆引兵來會、出屯順陽。戊辰、大元兵渡漢江而北、丙子、畢渡合達蒲阿將兵禦于禹山之前、大元兵分道趨汴京、京師戒嚴。是夜二鼓、合達蒲阿引軍還鄧州、大元兵躡其後、盡獲其輜重。天興元年春正月、大元兵道唐州、元帥完顏兩婁室與戰、襄城之汝墳、敗績。兩婁室走汴京、癸未、合達蒲阿引軍自鄧州赴汴京、丙戌、大元兵既定河中、由河清縣白坡渡河。元史四年壬辰春正月戊子、帝由白坡渡河。丙戌は正月五日、戊子は七日なり。五日に渡り始めて、七日に渡り終へたるにや。元史庚寅、拖雷渡漢江、遣使來報、即詔諸軍進發。拖雷の漢江を渡れるは、去年十二月中旬なれども、正月九日庚寅に至り、太宗の所にその報告達したるなり。元史甲午、次鄭州、金防城提控馬伯堅降、授伯堅金符使守之。金史甲午、修京城樓櫓及守禦備。大元兵薄鄭州、與白坡兵合、屯軍元帥馬伯堅以城降、防禦使烏林答咬住死之。乙未、大元游騎至汴城。元史丙申大雪、丁酉又雪、次新鄭。是日、拖雷及金師戰于鈞州之三峯、大敗之。獲金將蒲阿、戊戌、帝至三峯。壬寅、攻鈞州、克之。獲金將合達、遂下商號嵩汝陝洛許鄭陳亳穎壽睢永等州。金史丁酉大雪、大元兵及兩省軍戰鈞州之三峯山、兩省軍大潰。合達陳和尚楊沃衍走鈞州、城破皆死之。蒲阿就執、尋亦死。武仙走密縣、自是兵不復振。辛丑、潼關守將李平、以關降大元。庚戌、許州軍變、以城降大元。二月甲寅、大元兵徇臨潼、攝縣令張若愚死之。戊午、次盧氏、關陝行省總帥兩軍及秦藍帥府軍、棄潼關而東、與之遇。天又大雪、未戰而潰。行省徒單兀典總帥納合、合圍敗死。完顏重喜降、斬于馬前。大元兵下睢州。乙丑、大元兵攻歸德。三月丁亥、大元軍平中京、畱守撤合、投水死。平中京は誤れり。中京は、即洛陽にして、元史下せる諸州の名を列記したる中に洛の字あるも

山川の神の祟り

非なり、撤合強伸の傳に據るに、この時洛陽は圍まれたるのみにて、下らざりき。殊に強伸の苦戦して守りおほせたる忠勇の働きは、名高き談なりくをや、元史三月、命速不台等圍南京、金主遣其弟曹王訛可入質、帝還、雷速不台守河南、夏四月、出居庸、避暑官山、曹王訛可は、哀宗の弟に非ず、哀宗の弟荆王守純の子なり、金史「大元遣使自鄭州來諭降、庚子、封荆王子訛可為曹王、議以為質、壬寅、尙書左丞李蹊、送曹王出質、諫議大夫裴滿阿虎帶、太府監國世榮、為講和使、戶部侍郎楊德權、參知政事、分軍防守四城、大元兵攻汴城、上出承天門、撫西面將士、癸卯、上復出撫東面將士、親傳戰傷者藥、夏四月丁巳、遣戶部侍郎楊仁奉金帛詣大元兵乞和、戊午、又以珍異往謝許和、乙丑、百官初起居于隆德殿前、丁卯、汴京解嚴、步軍始出封丘門采薪蔬、己巳、建威都尉完顏兀論、同大元使沒忒入城、庚午、見使臣於隆德殿、六月乙亥、左丞李蹊送曹王與其子全俱還、」そこに「韓歌歹合罕は、病に取附かれて、口舌の用を失ふほど艱まされたるを師巫の占者に占はせられたれば、乞塔惕の民の地水の主王だち（地主の神の神だち、即ち山川の羣神）は、人民住具を掠められ、城ども郡どもを壊られて、嚴しく崇れるなり、人民住具金銀馬羣糧食を身替

拖雷の身替り

に與へんとて禳へば、釋さずして愈嚴しく崇れり。親族の人より「身替せば可からんか」とて禳へば、「釋したり。」合罕目を開きて、水を索めて飲みて、「いかに爲れる」と問はれて、師巫奏さく「乞塔惕の民の地水の主王だちは、地水を壞られ、人民住具を掠められて、嚴しく崇れるなり。別に何にても身替に與へんとて禳へば、愈嚴しく漸みたり。親族の人より「身替せば可からんか」と云へば、釋したり。今聖旨知しめせ」と奏せば、勅ありて「御前に諸王より誰かある」と宣へば、拖雷の王御前に居て申さく「福ある成吉思合罕我等の父は、上に兄だち下に

弟^{オト}だちあるに、合罕^{カガン}兄^{イロセ}を爾^{ナガレト}を駟馬^{センバ}の如く選^{セラ}びて、羯羊^{カヤウ}の如く揣^{ハカ}りて、大^{オホ}き位^{イクラキ}に爾^ナが身^ミを名^ナ指^サして、多^{オホ}き國民^{クニミ}を爾^ナが上^{ウヘ}に擔^{ニナ}はせて與^{アタ}へたるぞ。我^{ワレ}をこそは、合罕^{カガン}兄^{イロセ}の御前^{イゴコ}に居^キて、忘^{ワス}れたるを心^{ココロ}附^{ツク}けて、睡^{スミ}りたるを喚^{ヨビ}覺^{ササ}して行^ユけと仰^{オホ}せられたりき。今^{イマ}合罕^{カガン}兄^{イロセ}を爾^ナを失^{ウシ}はば、我^{ワレ}は、誰^{タレ}の忘^{ワス}れたるを心^{ココロ}附^{ツク}け、誰^{タレ}の睡^{スミ}りたるを喚^{ヨビ}覺^{ササ}さん。實^{マコト}に亦^{オト}合罕^{カガン}兄^{イロセ}吉^ヨからずならば、多^{オホ}き忙^{モン}豁^{ゴル}勒^ルの國民^{クニミ}は孤兒^{シナレゴ}とならん。乞^キ塔^タ惕^トの民^ミは喜^{ヨロコ}ばん。合罕^{カガン}兄^{イロセ}の代^{カハ}りに我^{ワレ}爲^ナらん。秃魯^{トル}(名^ナ魚^{イサ})の脊^セを我^{ワレ}割^サきたり。乞^キ列^レ篋^ケ(名^ナ魚^{イサ})の脊^セを我^{ワレ}斷^タちたり。面^{オモテ}を我^{ワレ}打^ウてり。外^{ソト}面^モを我^{ワレ}刺^サせり。譯は節約して有^{アル}的^{テツ}

亦列

亦刺黑

合答

合惕忽

兀馬兒塔黑散

穩塔喇黑散

乞下憐渾

幹樂

幹控亦喇坤

秃勒巴勃

輕古勒

罪業^{ツレハスベテ}都是我^{ナリ}造來^{ツク}來^{レル}。顔^{カホ}美^{ウツク}しく脊^セ長^{ナガ}く我^{ワレ}もあるぞ。譯我^{ワレ}又^{マタ}

生得^{ウマレツキ}好^{カホ}可以^{ツカヘ}事^{ヘツル}神^{カミ}。尙書の金^{カネ}縻^ヒに、武^ブ王^ク疾^{ヤク}ありて、周^{シュウ}公^{コウ}身^ミを以^モて代^{ダイ}らんこと

へるも、この師^シ巫^ウ呪^ノへ詛^ソへ」と云^イひて、師^シ巫^ウ詛^ソへば、詛^ソへる水^{ミヅ}

を拖^ト雷^{ライ}の王^{クニミ}飲^ノめり。暫^{シバ}く坐^マりて言^イく「醉^{スイ}ひたり、我^{ワレ}我^{ワレ}が醉^{スイ}

を覺^サせる内^{ウチ}に(我が醉^{スイ}のま)孤兒^{シナレゴ}ども幼兒^{コナナゴ}ども弟^{オト}ども寡^{ヤチ}な

る婦^{メノ}別^ベ嚙^ク迭^テ幹^{カン}因^{イン}に(譯語を)至^イるまで養^{ヤシ}ふことを合^カ罕^{ガン}兄^{イロセ}

知^シめせ。その言^{コト}を言^イひ畢^ヒへ「我^{ワレ}醉^{スイ}ひたり」と云^イひて、出^イ

でて去^クりて、吉^ヨからず爲^ナれる理^リ由^ユかくあり。(元史太宗紀に據

たるは、太宗四年九月なり。睿宗の傳に、三峯山釣州許州の戰の後に、遂^ス從^ツ太宗^{タイスウ}收^{シュウ}定^{テイ}河南諸郡四月由半渡入真定過中都出北口住夏于官山五月太宗不豫六月疾甚拖雷禱于天地請以身代之又取巫覡祓除豐滌之水飲焉居數日太宗疾愈拖雷從之北還至阿刺合的思之地遇疾而薨壽四十有〇喇失惕の史に四十歳と云

集史なる身替りの禱り

へるに據れば、この闕字は、必ず一の字なるべし。妃怯烈氏、子十一人、長憲宗、次四
則世祖也。憲宗立、追諡曰英武皇帝。廟號睿宗。二年、合祭昊天、后土、以太祖睿宗配
享。世祖至元二年、改諡景襄皇帝。祭志云、憲宗之二年、秋八月八日、始以冕服
拜天於日月山。其十二日、合祭昊天、后土、始大合樂、作牌位、以太祖睿宗配享。祭
志云、武宗至大二年十月、以將加諡太祖睿宗、擇日請太祖睿宗尊諡于天、改製金
表、神主、題寫尊諡、廟號。十二月乙卯、親享太廟、奉玉冊、玉寶、加上太祖聖武皇帝尊
諡。曰法天啓運、加上睿宗景襄皇帝曰仁聖。拖雷の身替りの事は、喇失惕の史に
も記せり。只禱りの辭は、秘史と稍異なり。拖里は、幹歌台の床に近づき、師巫の聖水
を盛れる木の器を捧げて、神に白さく「常世の大神よ、もし爾は人の罪に隨ひて
罰なふならば、我は幹歌台よりも多く罰なはるべきことを爾は知り給はん。我は、軍
にて多くの民を殺せり。我は、多くの女どもを驅り立てたり。我は、多くの父
ども母どもに涙を流させたり。もし爾は爾の羣僕の中よりその美好の爲に召
く上げんとならば、我は又幹歌台よりも立派なるを主張せん。幹歌台の代りに我
を取りて、彼の病を我に移し給へ」と祈りたれば、幹歌台は疾愈えて、拖里は久くか
ぬとあり。

金國の平定

かくて阿勒壇罕を窮めて、薛兀薛(明譯、小厮)と云ふ名を
與へて、彼の金銀金あり紋ある織物財阿刺沙思(明譯、准馬)

探馬臣

薛兀薛思(小者)を收めて、先手の探馬臣を置きて、南京中
都の處處に城の裏に苔嚕合臣を置きて、平けく回
て、合喇豁嚕木に下馬せり。(探馬臣は、探馬赤とも云ふ。苔嚕合臣を苔嚕
合赤とも云ふが如し。元史兵志一に「若夫

探馬赤軍の
五部の將

軍士、則初有蒙古軍、探馬赤軍、蒙古軍皆國人、探馬赤軍則諸部族也。兵志二、鎮戍の
條に世祖之時、海宇混一、然後命宗王將兵鎮邊徼襟喉之地、河洛山東、據天下腹
心、則以蒙古探馬赤軍、列大府以屯之」とあれば、探馬赤軍は、藩地に鎮戍する諸部族
の兵にして、探馬臣の官は、その將帥なり。闊闕不花の傳に「歲庚寅、太祖命太師木
華黎伐金、分探馬赤爲五部、各置將一人、闊闕不花爲五部前鋒都元帥、云云。歲丙申、
太宗命五部將分鎮中原、闊闕不花鎮益都、濟南、按察兒鎮平陽、太原、李羅鎮眞定、肖
乃台鎮大名、怯烈台鎮東平。庚寅は、戊寅(太祖十二年)の誤なり。木華黎の傳に「丁丑
(太祖十二年)八月、詔封太師國王、云云。分弘吉刺亦乞烈思兀魯兀忙兀等十軍、及吾也
而契丹蕃漢等軍、竝屬麾下」とある契丹蕃漢等軍は、即探馬赤軍にて、親征錄集史
は、皆この事を戊寅の年(即西紀一二一八年)の事とせり。丙申(太宗八年)、命五部將
分鎮中原は、即本書探馬臣を置くの事なり。この五部將の名は、兵志一世祖中統
三年三月の詔に「眞定、彰德、邢州、洛磁、東平、大名、平陽、太原、衛輝、懷孟等路各處、有舊
屬、按札兒、孛羅、笑乃、解、闊闕、不花、不里合、拔都兒等官所管探馬赤軍人、乙卯歲(憲宗五年)
籍爲民戶、云云。石高山の傳に「昔太祖皇帝所集按察兒、孛羅、窟里台、孛羅、海、拔都、闊闕

金元兩紀の
摘録の續き

不花五部探馬赤軍、金亡之後、散居牧地、每多有入民籍者、とありて、名互に異なり、按察兒は即按札兒にて、元史に傳あり、一歲己卯(太祖十四年)兵北還、以按札兒統所部兵屯平陽、以備金、歲甲午(太宗六年)金亡、詔封功臣、賜平陽戶六百有餘、とあり、李羅は木華黎の子、李魯なるべし、肖乃台は即笑乃解にて、元史肖乃台の傳に、木華黎に從ひ金を伐ち、大名東平を定め、太宗賜東平戶三百、俾食其賦、以老病卒于東平、とあり、錢大昕の諸史拾遺に曰く、怯烈台、即窟里台、不里合拔都兒、即李羅海、拔都或有肖乃台、而無不里合、或有窟里台、而無肖乃台、似當以兵志爲正、蓋肖乃台、本禿伯怯烈氏、故又有怯烈台之稱、或稱肖乃台、或稱怯烈台、其實即一人耳、史家疑李羅海與李羅爲重出、故闕不花傳、誤分怯烈台、以當五人之數、今依——太宗の金を平げ兵志作不里合、則犁然有別矣、不里合拔都兒は、元史に傳なし、

太宗紀四年壬辰(秋七月)遣唐慶使金諭降、金殺之、金史哀宗紀天興元年七月甲申、飛虎軍士申福蔡元擅殺北使唐慶等三十餘人于館、詔貫其罪、和議遂絕、乙未宿州帥取僧奴稱國安用降、遣近侍直長因世英等持詔封安用爲堯王、行京東等路、尙書省事、賜姓完顏、改名用安、丙午、參知政事完顏思烈恆山、公武仙、率諸將兵、自汝州入援、以合喜爲樞密使、將兵一萬應之、元史八月、金參政完顏思烈恆山、公武仙救南京、諸軍與戰、敗之、金史八月辛亥、完顏思烈遇大元兵于京水、遂潰、武仙退保雷山、思烈走御寨、合喜棄輜重奔入、甲寅、免合喜爲庶人、元史九月、拖雷薨、帝還龍庭、冬十一月、獵于納蘭赤刺溫之野、十二月、如太祖行宮、金史十二月甲申、以事勢危急、詔議親出、乙酉、再議於大慶殿、除拜扈從及留守京城官、庚子、上發南京、二年正月丙午、朔、濟河、辛亥、平章政事白撒引兵攻衛州、不克、乙卯、聞大元兵自河南

渡河、至衛之西南、遂退師、丁巳、戰于白公廟、白撒敗績、棄軍東遁、己未、上以白撒謀夜棄六軍、渡河走歸德、壬戌、召白撒數其罪、下之獄、七日死獄中、元史五年癸巳春正月庚申、金主奔歸德、戊辰、金西面元帥崔立、殺留守完顏奴申、完顏習捏阿不、以南京降、金史戊辰、京城西面元帥崔立、舉兵爲亂、殺參知政事完顏奴申、樞密副使完顏斜捨阿不、遂送款大元軍前、癸酉、大元將碎不綽進兵汴京、元史夏四月、速不台進至青城、崔立以金太后王氏后徒單氏及荆王從恪、梁王守純等至軍中、速不台遣送行在、遂入南京、金史夏四月癸巳、崔立以梁王從恪、荆王守純及諸宗室男女五百餘人、至青城、皆及於難、甲午、兩宮北遷、一任大椿曰、按金史哀宗紀及劉祁歸潛志、荆王梁王皆遇害于青城、其北遷者、止兩宮耳、此紀(元史太宗紀)所載、似二王亦與兩宮同送行在矣、又金史作梁王從恪、荆王守純、此稱荆王從恪、梁王守純、或傳寫之誤、金史六月壬午、中京破、留守強伸死之、元史本紀は、この事を書き漏せり、元史六月、金主奔蔡塔察兒、率師圍之、金史六月辛卯、上發歸德、己亥、入蔡州、九月甲戌、大元使王檄諭宋還、宋以軍護其行、乙酉、大元召宋兵、攻唐州、破之、九月癸卯、朔、遣內族阿虎帶使宋借糧、宋不許、辛亥、大元兵築長壘圍蔡城、元史冬十一月、宋遣荆鄂都統孟珙、以兵糧來助、金史十一月、宋遣其將江海孟珙、帥兵萬人、獻糧三十萬石、助大元兵攻蔡、元史十二月、諸軍與宋兵合攻蔡、金史十二月丁丑、大元兵決練江、宋兵決柴潭、入汝水、己卯、大元兵破外城、己丑、墮西城、元史六年甲午春正月、金主傳位于宗室子承麟、遂自經而焚、城拔、獲承麟、殺之、宋兵取金主餘骨、以歸、金史三年正月戊申、夜、上集百官、傳位于東面元帥承麟、己酉、承麟即皇帝位、百官稱賀禮畢、亟出捍敵、而南面已立宋幟、俄頃、四面呼聲震天地、南面守者棄

合喇豁魯木
即ち和林的
建置沿革

建都の年の
誤り

門大軍入、與城中軍巷戰、城中軍不能禦、帝自縊于幽蘭軒、末帝退保子城、聞帝崩、率羣臣入哭、諡曰哀宗、哭奠未畢、城潰、諸禁近舉火焚之、奉御綠山收哀宗骨、瘞之汝水上、末帝爲亂兵所害、金亡、その月、金の息州の行省抹撚兀典は、宋に降らんとして、蒙古の兵に追殺され、二月、完顔用安は、徐州を取られて自殺し、五月、武仙は、澤州に奔りて、成兵に殺され、六月、崔立は、部下に殺され、明年十一月、合喇豁魯木は、哈喇和林的の總帥汪世顯は、蒙古に降り、金の餘黨全く盡きたり。漢人の口には、**哈喇和林**と云ひ、元史地理志に、哈刺和林河あり、常には略きて和林城、和林河と云へり、親征録に、乙未、太宗七年、建和林城、宮殿、丙申、八年、入慶和林城宮、元史太宗紀に、七年乙未、春、城和林、作萬安宮、八年丙申、春、正月、諸王各治具來會、宴萬安宮、落成、耶律楚材の湛然居士集に、和林城、建、行宮、上梁の文あり、乙未、年、三月、祭姪女文の後に載せたり、又地理志に、その建置沿革を述べて、和寧路、始名和林、以西有哈刺和林河、因以名城、太祖十五年、定河北諸郡、建都於此、初立元昌路、後改轉運和林使司、前後五朝都焉、世祖中統元年、遷都大興、和林置宣慰司、都元帥府、後分都元帥府於金山之南、和林止、設宣慰司、至元二十七年、立和林等處都元帥府、大德十一年、立和林等處行中書省、罷和林宣慰司、都元帥府、置和林總管府、皇慶元年、改嶺北等處行中書省、改和林路總管府爲和寧路總管府とあり、百官志六に、國初、太祖定都于哈刺和林河之西、因名其城曰和林と云へるは、東を西と誤れり、又和林の建都を太祖十五年とくたるも誤れり、沈垚の西遊記、金山以東釋に曰く、按十五年、太祖在西域、春三月、克蒲華城、夏五月、克尋思干城、駕未中回、安得有都城之建、又十五年歲次、庚辰、正長春真人由燕京往德興之歲、西遊記云、師

聞行宮漸西、春秋已高、欲待駕回朝謁、則自前年征西域後、駕實未嘗中回也、且太祖所居之見於紀者、六年春、帝居怯綠連河、十一年春、居廬胸河行宮、十九年由西域班師、二十年春、正月、還行宮、二十二年秋、七月、崩于薩里川、哈老徒之行宮、本紀中不見有和林之名、安得謂和林爲太祖所建、太宗元年秋、八月、諸王百官大會于怯綠連河、曲雕阿蘭之地、以太祖遺詔、即皇帝位、亦不言和林、二年春、帝與拖雷獵于斡兒寒河、夏、避暑于塔密兒河、則始在和林左右、嗣是六年春、會諸王宴射于斡兒寒河、而七年春、遂城和林、作萬安宮、和林建都、實始太宗、非由太祖矣、然れども地理志の誤は、偶然の事に非ず、元の世より已に太祖建都の説ありて、明宗紀に、天曆二年、明宗潔察罕の地に駐まれる時、四月乙巳、監察御史の上言に、嶺北行省、控制一方、廣輪萬里、實爲太祖肇基之地、國家根本、繫焉、方面之寄、豈可輕任云云とあり、また許有壬の至正集に見えたる勅賜興元閣碑の文には、太祖十五年、奠都の事を明に記したれば、地理志は蓋それに依りて誤れるなり、その文に曰く、太祖聖武皇帝之十五年、歲在庚辰、定都和林、太宗皇帝始建宮闕、梵宇基而未屋、憲宗繼述、歲丙辰、作大淨屠、覆以傑閣、閣五級、高三百尺、其下四面爲屋、各七間、環列諸佛、具如經旨、至正壬午、皇上敕法怡府同知今武備卿普達失理、暨嶺北行中書省右丞今宣政院使月魯帖木兒、專督重修、周塔塗金、閣中邊頂踵若城、平糝、聖靡不堅麗、賜名曰興元之閣、和林の位置につきては、歐陽玄の高昌侯氏家傳に、和林有三水焉、一曰城南山、東北流、曰斡耳汗、一經城西北流、曰和林河、一發西北、東流、曰忽魯班達彌爾、三水距城北三十里、合流、曰契鞏傑河、斡耳汗河は、即太宗紀の斡兒寒河にして、今の鄂兒坤河なり、和林河は、地理志の哈刺和林河にして、水道提綱の朱爾馬台河、

和林の位置
を示せる侯
氏家傳

鄂兒坤河を渡れる二人の紀行

蒙古遊牧記の濟爾瑪台河なり提綱に曰く「朱爾瑪台河源出額黑鐵木兒山南麓東北流曲曲二百餘里瀦爲池曰察罕鄂模廣數十里又東北流百里有布勒哈爾台河南自達爾湖喀喇巴哈孫地之池水東北流來會又東北入鄂爾坤河一察罕鄂模の鄂模は滿洲語の池に於て蒙古語にては察罕納兀兒と云ふ即白き湖水なり忽魯班達爾は三つの塔米兒に於て即太宗紀の塔密兒河なりそれを三塔米兒とも云へるは蓋三大源の合流せるか三道に分流せる所あるかに因れるならん僕氏家傳の文に據れば和林的地は塔米兒河の南に當り鄂兒坤河と札兒曼台河との間に挿まりて今の賽音諾顏部附牧額魯特旗の北境にありなり三三水距城北三十里合流とあるは鄂兒坤河の札兒曼台河を并せ又北に流れて塔米兒河を并するを云ふ沈垚曰く三三水會合の地計去和林城約有三百里而僕氏家傳謂三十里傳寫誤耳一僕輩傑河は今の色楞格河なり鄂兒坤河は塔米兒河を并せて後も鄂兒坤と云ひて色楞格とは云はず高寶銓曰く三三水合流當指塔米爾會於鄂爾坤而言而曰僕輩傑者鄂爾坤下合色楞格河互受通稱矣又西遊記に長春は太祖十六年五月陸局河(客嚕倫河)を離れてより西に行くこと十日に於て漸見大山峭拔從此以西漸有山阜人烟頗眾云云又四程西北渡河乃平野其旁山川皆秀麗水草且豐美東西有故城基趾若新街衢巷陌可辨制作類中州歲月無碑刻可考或云契丹所建既而地中得古瓦上有契丹字蓋遼亡士馬不降者西行所建城邑也一張德輝の塞北紀行に云く自黑山之陽西南行九驛復臨一河北語云渾獨刺漢言免兒也遵河而西行一驛有契丹所築故城城方三里背山面水自是水北流矣自故城西北行三驛過畢兒紇都乃工匠積養之地又經一驛過大澤泊周廣約六七十

兀格依諾兒

水極激徹北語謂吾僕竭腦兒自治之南而西分道入和林城相去約百餘里泊之正西有小故城亦契丹所築也絳城四望地勢平曠可百里外皆有山山之陰多松林瀕水則青楊叢柳而已中即和林川也居人多事耕稼悉引水灌之開亦有蔬圃絳川之西北行一驛過馬頭山居人云上有大馬首故名之自馬頭山之陰轉而復西南行過忽蘭赤斤乃奉部曲民匠種藝之所有水曰場米河注之東北又經一驛過石墩云云自墩之西南行三驛過一河曰唐古其水亦東北流水之西有峻嶺嶺之石皆鐵如也嶺陰多松林其陽帳殿在焉乃避暑之所也忽蘭赤斤の自注に「山名以其形似紅耳也」とあり渾獨刺河は即渾れる秃刺河場米河は即塔米兒河なり秃刺を免兒と譯したるの當否は知らねども蒙古語に免を秃來と云ふ沈垚曰く過免兒河而西又行一驛然後至契丹故城則城當在喀魯哈河之西土謝圖汗本旗之東北又曰「真人所渡之河當是鄂勒昆河也云山川秀麗故城地中得古瓦有契丹字則已在和林側近而不言和林者是時實未建都故無和林之目也」又曰く「西遊記言東西有故城東故城即紀行過河而西行一驛之契丹故城西故城即紀行腦兒正西之小故城蓋東西之言所兼頗廣秀麗之云實兼指今鄂勒昆河東西兩岸矣」紀行の吾僕竭腦兒は喇篤羅甫の蒙古考古圖の第八十二幅鄂兒歡科克申鄂兒歡地圖の兀格依諾兒なりこの湖水は鄂兒歡河の東三英里に在りその水西に出で南より流れる科克申鄂兒歡河を并せて哈羅河となり西に流れて鄂兒歡河に入るその入る處は塔米兒河の鄂兒歡河に入る處より一英里餘南即上流に在り沈垚は「吾僕竭腦兒即今察罕池池西南百餘里實元和林城所在矣」と云ひて張穆高寶銓は皆それに從ひたれどもその考は誤れり吾僕竭と察罕と音の似

察罕諾兒

ざるのみならず、察罕池の西南に和林ありとすれば、和林は札兒曼台河即和林河の西に在ることとなりて、僕氏家傳の「和林河經城西北流」の文に合はず、察罕池の事は、太宗紀に「九年春、獵于揭揭察哈之澤、夏四月、作迦堅茶寒殿、二十一年春、十三年春二月にも、獵于揭揭察哈之澤、憲宗紀三年四年の春、帝獵于怯蹇又罕之地、明宗紀天曆二年三月戊午朔、次潔堅察罕之地」などありて、地理志和寧路の原注に「迦堅茶寒殿、在和林北七十餘里」と見えたり、錢大昕の考異に「揭揭察哈即迦堅茶寒也、譯音無定字」と云ひ、怯蹇又罕も、潔堅察罕も、皆同音の異譯なれば、沈壺は「殿以澤得名、殿在和林城北七十餘里、澤亦當相近、察罕池之即揭揭察哈澤、無可疑矣」と云へり、蓋今の察罕は、揭揭察罕の上略ならん、然らば、和林城は、察罕池の南に在りけんこと、地理志に由りて證すべし、猶精しく云へば、察罕池の上流なる和林河の東にありくこと、僕氏家傳に由りて明なれば、むろ察罕池の東南に在りくなり、唐古河の西に峻嶺ありて「嶺陰多松林」と云へるは、西游記の「至長松嶺後宿、松檜森森、干雲蔽日、多生山陰、澗道開、山陽極少」とあるに善く似たれば、張德輝の見たる峻嶺は、即長松嶺なるが如し、されども、其陽帳殿在焉、乃避夏之所也」とあるは、長春の到りく、乃滿國の窩里朶とは異なり、沈壺曰く「紀行、繇和林川往避夏處、但行五驛、而記自六月十三日宿長松嶺、至二十八日、方泊窩里朶之東、凡行十五六日、是時窩里朶亦是駐夏處、而遠近不同者、蓋張參議于定宗丁未年、應世祖潛邸之招、所往者、定宗駐夏之地、真人當太祖時、所往者、太祖皇后駐夏之地、故不同矣、二更に西人の記載を考ふるに、和林の名を喇失惕は合喇闊嚕木と云ひ、祕史の合喇豁嚕木と甚近し、嚕卜嚕克馬兒科保羅は、合喇闊嚕と云へり、喇失惕は合喇闊嚕

峻嶺の陽なる帳殿

合喇闊嚕木の山

和林の景況

遊幸の地

失喇幹兒朶

木は、山の名にして、その山より城の名を取れり」と云ひ、元史巴而朶阿而忒的斤の傳に和林山とあるも、哈刺和林山の上略にして、即合喇豁嚕木の山なり、合喇豁嚕木は、黒き徑の義、即樹木茂りて路闊きことにて、我國のくらやみ坂などに似たる語なれば、山の名は本にして、それより河の名となり、遂に都の名となれるならん、訶倭兒思の蒙古史に舊史の説を引きて、「幹歌台の新き宮殿は、支那風の雕刻繪畫を以て精しく飾られ、周圍に園ありて、門四つあり、合罕と皇族と宮女と公眾との出入を分てり、皇宮の外に大臣の宅あり、又その外に大なる市街あり、合罕は、それを幹兒都巴里克幹兒朶の城」と名づけたれども、普通には喀喇科嚕木と呼べり、一二三五年（太宗七年）その周圍に半リーグほどの壁を廻せり、皇室の需用と給與との爲に、帝國の諸處より貨車五百輛づゝ、毎日そこに到着せり、三十七の驛亭の傳馬は、その城を支那に結び附けたり、幹歌台は、喀喇科嚕木にたゞ春の一月だけ住み、餘の二月は一日路隔たれる客兒惕察干に住めり、そこには珀兒沙の工匠ども、支那人の築ける喀喇科嚕木の宮殿に劣らざる宮殿を築きたりき、夏は幹兒篋克禿阿に到り、金欄にて縁取りたる白き毛氈より成れる支那風の假屋に住めり、この天幕は、千人を容れらるゝほど大きくて、昔喇幹兒都（即失喇幹兒朶、黃なる行宮）と名づけられたり、秋は科衣揭の湖の畔に一月を送れり、冬は大に獵する季節にて、幹歌台は翁奇に居り、そこに周二リーグの所を土と概との圍ひにて取圍み、その中に獸を追入るゝ様にせり、客兒惕察干の宮殿は、即迦堅茶寒殿にして、察罕諾兒の邊に設けたる離宮なりき、幹兒篋克禿阿の避暑は、憲宗紀にも「四年夏、辛月兒滅怯之地、二五年夏、帝幸月兒滅怯土、二七年夏六月、謁太祖行宮、還幸月兒滅怯土」などあり、

闊闕諾兒

又六年春、帝會諸王百官于欲兒陌哥都之地、設宴六十餘日、賜金帛有差とある欲兒陌哥都も、欲兒滅法土の訛ならん、その年夏四月、駐蹕于苔密兒、五月、幸昔刺兀魯朶とある昔刺兀魯朶は、即失喇斡兒朶にして、天幕の名は、その天幕の毎年設けらるゝ所の名とも爲れるなり、郝和尚拔都の傳に「甲辰、朝定宗於宿斡都之行宮」とある宿斡都も、失喇斡兒朶の訛ならん、張德輝の紀せる、唐古河の西なる峻嶺の陽に在りて避暑の帳殿は、即欲兒滅法土の黃帳なるべし、科衣揭の湖は、揭揭察哈澤の揭揭にも似たれども、その澤の事は、前に客兒惕察干とあれば、これは、憲宗紀四年の所に「是歲、會諸王于類類腦兒之西、乃祭天于日月山」とある類類腦兒の訛なるべし、類類腦兒即闊闕納兀兒は、青き湖の義にして、察罕納兀兒即白湖と同トク、處處に同ト名の湖あり、不兒罕嶽の南麓にも青湖あり、甘肅の西境の外にある青海も即青湖なれども、皆これとは異なり、王禕の日月山祀天頌に「日月山、國語云阿刺溫山、在和林之北」と云へれば、この青湖も和林の北に在るべし、又憲宗紀に「七年秋、駐蹕于軍腦兒、醜馬乳祭天」とある軍腦兒の軍は、闊闕と音異なれども、同トク祭天の所なるを見れば、類類腦兒と同トクかとも思はる、三年の所にも「秋、幸軍腦兒」とありて、軍腦兒の行幸はいつも秋なれば、合斡兒の「秋は科衣揭の湖の畔に」と云へるにも合へり、又冬の獵場なる翁奇は、憲宗紀に「三年冬十二月、帝駐蹕汪吉地」とある地なり、定宗紀に「元年秋七月、即皇帝位于汪吉宿滅禿里之地」とあるは、汪吉の宿滅禿里の地なるべし、耶律鐔の雙溪醉隱集に「三月到汪結河有感」の詩あり、清一統志に湖漠圖を引きて「和林南有汪吉河」と云へり、汪結河汪吉河は、即今の翁金河にして、蒙古游牧記に「翁金亦作翁吉」と云ひ、平定準噶爾方略には翁吉地方

翁吉の獵場

普刺諾喀兒
關尼の傳聞

嚕卜嚕克の
觀察

馬兒科保羅
の傳聞

ともあり、然らば多遜の翁奇、元史の汪吉は、今の翁金河の濱、ひろろ翁金河の上流の山地なるべし、歐囉巴人にて和林の事を始めて記したるは、普刺諾喀兒關尼なり、この旅僧は、囉馬教主因諾肯惕第四の命を奉じて、一二四六年定宗元年、西曆七月二十二日、蒙古の昔喇斡兒都に達し、そこに開かれたる定宗即位の大會に參列し、紀行を著して、王會の盛況を述べたり、喀兒關尼は、和林の地をば踏まざれども、その地の事をも傳聞に依りて記せり、大會の開かれたる昔喇斡兒都は、欲兒滅法土の黃帳とすれば、定宗紀に汪吉宿滅禿里とあるに合はず、喀兒關尼は、目に睹たる事を述べて誤なかるべければ、定宗紀の地名は誤れるにや、又はこの時失喇斡兒朶即黃帳を汪吉の地に設けて、即汪吉の地をも失喇斡兒朶と云へるにや、猶考ふべし、嚕卜嚕克は、佛囉思王路易第九の命を奉じて、一二五三年憲宗三年の末に和林に至れり、その紀行に云く「合喇闊噪の都は、聖迭尼思の町ほど好くはあらず、その宮殿に較ぶれば、聖迭尼思の寺は十倍好し、そこに大街二つあり、一つには撒喇先人住み、その中に市場あり、一つには支那人住み、それらは皆工匠なり、二街の外に朝貴の大なる邸宅あり、又諸宗の佛堂十二、抹哈篋惕教の寺二つ、町のはてに基督教の寺一つあり、町は土の壁にて取圍まれ、門四つあり、東の門にては黍雜穀を賣れども、供給豊ならず、西の門にては羊山羊、南の門にては牛車、北の門にては馬を賣る、城壁の傍に大なる離宮あり、瓶の壁にて取捲かれ、内に大殿あり、一年に二たびそこに酒宴を催さる、又倉廩の如き長き建物幾棟もありて、合罕の財貨と食物の貯へとを藏めたり、馬兒科保羅も、傳聞せることを記して、合喇闊噪は、周圍三英里ほどの城なり、そこに石少き故に、堅固なる土の壁にて取捲かる城の傍に大なる出

和林位置の問題

城あり、その中に美なる宮殿ありて、そこに太守住めり」と云へり。出城と云へるは、嚙ト嚙克の離宮なるべし。太守は、元史地理志の和林等處都元帥なり。馬兒科の蒙古に到れるは、元の世祖の大都に都を遷せる後なれば、その頃は合罕の離宮を都元帥の官舎に用ひたるならん。嚙ト嚙克の後四百五十餘年の間、この名高き都の遺址ある地方を歐羅巴の旅人にて通りたるもの一人も無かりしが、一七二三年（康熙五十二年）の頃、耶蘇亦惕派の傳道師等、始めて鄂兒坤河の盆地を訪へり。その後耶蘇亦惕派の學僧詰必勒は、元史天文志の四海測驗に「和林、北極出地四十五度、夏至晷景長三尺二寸四分、晝六十四刻、夜三十六刻」とあるに由りて、和林の位置を推測したりしに、阿別勒喇喇喇は、その測算を誤れりとし、一八二五年（道光五年）喀喇科嚙木城の探究」と云へる面白き論文を著し、支那の舊籍に依りて、この古城の位置を考定せんと試みたり。これより和林の位置は、歐羅巴の東洋學者の間にてやかましく問題となれり。一八七三年（同治十二年、明治六年）庫倫に駐れる嚙西亞の領事帕迭囉は、實地の探檢に由り、この問題を解決せんと思ひ、張德輝の紀行を道るべし。まづ兀格依諾兒に至り、諾兒の東南とあれども、東の字は衍なり。三四十英里、鄂兒坤河の西四五英里の處にて古城の址を見出せり。その地を蒙古人は喀喇巴勒嘎孫（黒き城）また喀喇合喇木（黒き郭）と呼べり。城壁は、四角にて、土と甃とより成り、邊の長さは五百歩ほどづつ、高さは今九尺ほどあり、東の端（東南の隅）には高さ塔の址あり。方形の内側には南北の邊に平行せる低き壁の址あり。蒙古人は、何の趾とも確には知らず、只刺麻一人進み出でて、「こゝは、脱歡帖木兒汗の城なり」と云へり。この喀喇巴勒嘎孫は、清一統圖に達拉爾和哈拉巴爾噶遜とあり、耶蘇亦惕派の

帕迭囉の發見せる喀喇巴勒嘎孫

玻自捏也甫の發見せる額兒迭尼租

傳道師等は、北緯四十七度三十二分二十四秒と測定したりし所なり。水道提綱に達爾湖喀喇巴哈孫とあるも、その地なり。帕迭囉は、そこを去りて西に進み、抹鄰脫羅果依山兀關赤希山を過ぎて、塔米兒河を渡れり。抹鄰脫羅果依は、馬の頭にして、張德輝の馬頭山なり。兀關赤希は、赤き耳にして、即忽蘭赤斤山、其形似紅耳とある山なり。前後の地名皆善く紀行の文に合へるに由り、帕迭囉は、その古城を和林の遺址と認定し、その旅行發見の記をその年の「嚙西亞の地學協會の錄事」に載せ、又その記を弗篤禪科夫人の英文に譯して、大佐裕勒の旁注したるもの、一八七四年（明治七年）の「地學馬噶津」の一三七頁以下に見えたり。然るに教授玻自捏也甫は、蒙古の編年史額兒迭初額哩客と云ふ書を得て、その中に「喀喇科嚙木の城は、幹歌台汗の命にて一たび築かれ、都と定められ、又蒙古人の支那より逐出されたる後、脱歡帖木兒（憲宗）は、再そこに蒙古の朝廷を定めたりしが、一五八五年（明の神宗萬曆十三年）額兒迭尼租の大寺は、その故址に建てられたり」と明に記載せるを見て、一八七七年（明治十年）遂に蒙古探檢の路に上り、額兒迭尼租の地に至り、寺を繞れる周一英里ほどある方形の土壁は、即古の喀喇科嚙木の城壁の遺址ならんと認定せり。こゝに於て和林問題は、二たびむづかしくなれり。玻自捏也甫は、その後一八八三年（明治十六年）額兒迭初額哩客を嚙西亞文に譯出せり。額兒迭尼租の地は、土謝圖汗の本旗の界内にて、汗庭の西南に當り、鄂兒坤河の東一英里餘、北緯四十七度十三分餘の處に在り。耶蘇亦惕派の傳道師等は、夙くその地の經緯度を測定し、清一統圖には額兒迭尼招また西庫倫と記入せり。蒙古遊牧記額兒迭尼招の注に「廟在西十三度、北極出地四十六度、西爾哈阿濟爾罕山之西麓、蒙古謂佛寺曰招、蓋大刺麻寺之在鄂爾

海客兒の寫
く取れる三
石碑

坤河側者。又方觀承の松漢草從軍雜紀の詩の注に「厄爾得尼招在喀喇喀王策令部內。厄爾得尼寶也。招乃招提省文。地產金銀。故稱寶寺。寺前有元至正年梵書碑。文猶可辨」とあり。芬蘭の人海客兒は、一八九〇年明治二十三年八月、幹兒歡河の盆地に至り、古碑三基を見出し、委しく寫真に取りて還れり。その一は突厥の闕特勤の碑、その二は突厥の默棘連可汗の碑にして、二つともに兀格依諾兒の南、額兒迭尼租の北、喀喇巴勒嘎孫の東北、鄂兒歡河の東なる科克申鄂兒歡河の右岸、才荅木の地にて、才荅木湖の西南に當れる所にありて、二碑の相去ること八町ばかりなり。その三は回紇の毗伽可汗の碑にして、喀喇巴勒嘎孫の地にあり。海客兒は、遂にそれらの碑銘に説明を加へ、「鄂兒歡の碑銘」と云へる書を出版せり。その頃歐羅巴の東洋學者は、蒙古の古碑舊跡を研究する興味を生じ、殊に闕特勤の碑は、表面の漢文裏面兩側面の突厥文、共に殆完好なるが故に、その譯解を試みたる人甚多し。されども西洋の學者は、漢文の解釋に拙くして、誤謬も少からざれば、白鳥博士は、更に突厥闕特勤碑銘考を著して、史學雜誌第八編第十一號に載せ、又その考を獨逸文に書きて、彼の地の學者なかに頒てり。この闕特勤の碑は、昔より名高き碑なり。耶律鐸の雙溪醉隱集に、凱樂歌の詞曲九首の中に取和林的詩ありて、その自注に「和林城、苾伽可汗之故地也。聖朝太宗皇帝城此。起萬安宮。城西北七十里。有苾伽可汗宮城遺址。城東北七十里。有唐明皇開元壬申御製御書闕特勤碑。案唐史突厥傳、闕特勤骨咄祿可汗之子、苾伽可汗之弟也。名闕可汗之子弟謂之特勤。開元十九年、闕特勤卒。詔金吾將軍張去逸、都官郎中呂向、齋璽書使北弔祭并爲立碑。上自爲文。別立祠廟。刻石爲像。其像迄今存焉。其碑額及碑文、特勤皆是殷勤之勤字。唐新

喇篤羅甫の
新舊和林の
認定

舊史、凡書特勤、皆作衝勒之勒字、誤也。諸突厥部之遺俗、猶呼其可汗之子弟爲特勤。特謹字也。則與碑文符矣。碑云「特勤苾伽可汗之令弟也。可汗猶朕之子也」。唐新舊史、竝作毗伽可汗。勤苾二字、當以碑文爲正」とあり。その祠廟石像は、已に存せざれども、闕特勤の墓にも默棘連可汗の墓にも、碑の外に立形坐形の石人石婦など今猶有り。この文の中に、苾伽可汗の字四所にあり、初の二つは回紇の毗伽可汗、後の二つは突厥の毗伽可汗なり。混すべからず。突厥にも回紇にも毗伽可汗あり。ことは、唐書の突厥回紇の傳に明なり。回紇の毗伽可汗は、唐書に見えたる骨咄祿毗伽闕可汗のみならず、海客兒の寫せる回紇の毗伽可汗の碑文に據れば、回紇の可汗は大抵世世毗伽と稱したるが如し。この文の初に「和林城、苾伽可汗之故地也」と云ひながら、次に「城西北七十里、有苾伽可汗宮城遺址」と云ひ、和林城と回紇の故城と同一所に非ざるが如し。これは、和林の位置を定むるに最注意すべき事なり。一八九一年(明治二十四年)、嚕西亞の翰林學士喇篤羅甫は、大規模なる蒙古地方の探検を企て、匈奴突厥回紇蒙古四朝の古碑舊跡を搜索検討して、蒙古考古圖を作れり。その書は、殘碑荒墳廢墟遺物などを影寫せるもの七十五幅、それらの所在と地形とを示せる地圖七幅、凡て八十二幅に、序論目錄解說數十枚と蒙古探訪地圖二幅とを添へて、一八九三年(明治二十六年)全部世に出で、闇黒なる漠北の古史に大なる光明を與へたり。その探究に據れば、鄂兒歡河の盆地に喀喇科嚕木と云ひく所あり。第一は、回紇の喀喇科嚕木にして、鄂兒歡河の左岸即西岸に在り。回紇の苾伽可汗の宮城の遺址にして、今の喀喇巴勒嘎孫なり。今殘れる土壁は、回紇の遺物に非ず。蒙古人の支那より逐出されたる後、回紇の廢墟に築きたる城壁の遺址なり。第二

は蒙古の喀喇科魯木にして、鄂兒歡河の右岸即東岸、喀喇巴勒嘎孫の東南に在り、即元の和林城にして、今の額兒迭尼租なり。蓋太宗の和林地方に都を定むる時、和林の近傍にて地を擇び、新に宮城を作りて、幹兒朶巴里克と名づけたるを、和林は五百餘年の舊都にして、合喇哈魯木の名は殆都と云ふに同トク聞ゆるが故に、蒙古人は、幹兒朶巴里克を合喇哈魯木と呼びて、遂に同名の地二所あることとなれるならん。元史昔都兒の傳に「黑城、哈刺火林之地」とあり。黑城は、蒙古語合喇巴勒嘎孫を譯したるなれば、この名は已に元の時より有りたり。黑城即合喇巴勒嘎孫は、舊城廢墟の義なれば、その名を哈刺和林の上に冠したるは、新しくハ刺和林に別たんが爲なり。僕氏家傳は、回紇の國相の後裔の事を述べたるものなれば、その和林は、回紇の和林即喀喇巴勒嘎孫を指せること論なし。張德輝は、塔米兒河の西北なる世祖の潛邸の地に赴きて、和林の都には立寄らずと見ゆれば、「自泊之南而西分道入和林城、相去約百餘里」とある和林城も、回紇の和林なるべし。耶律鑄は、元の和林の地に成長したれば、その和林と云へるは、皆元の和林にして、記載最精確なり。その「和林城、苾伽可汗之故地也」と云へるは、元の和林は回紇の和林の近郊なるが故にして、苾伽可汗の故宮とは異なり。その「城西北七十里、有苾伽可汗宮城遺址」と云へるは、方位も距離も善く合へり。「城東北七十里、有闕特勤碑」と云へるは、距離も近すぎて、方位も稍違へり。喇篤羅甫の鄂兒歡地圖に據れば、東北に非ずして、殆正北なり。又雙溪醉隱集に、騎吹曲の辭なる白霞の詩の注に「白霞在和林西」後の凱歌の詞なる煌舍の詩の注に「煌舍地名在和林之西南」伯哩行の詩の注に「伯哩、山名也。遜多伯哩者、即此。遜多亦是山名、皆在和林之西南。煌舍亦在其南。丁丑

雙溪醉隱集

冬弄邊者軍敗之地也。などあるは、今のいづこなるか知らず。戊辰己酉北中大風の詩、富貴城西畔の注に「和林東北斜連柯河有古城、唐賈耽地志所謂仙娥河富貴城者是也。仙娥河、今聲轉爲錫蘭河」とある斜連柯河は、今の色楞格河なり。寬甸有感の詩の序に「和林城有遼碑、號和林北河外一舍地爲寬甸、廣輪可數十百里、列聖春夏遊幸所也」とある寬甸は、怯堅察罕の地の雅名なるべし。和林北河は、和林河の下流のことか、和林城の北には、近き所に河なし。達蘭河の詩の注に「河名也。在和林北百餘里」とあるも、確ならず。金蓮花甸の詩の注に「和林西百餘里、有金蓮花甸、金河界其中、東匯爲龍渦、陰岳千尺、松石竊疊、俯視龍渦環繞平野、是僕平時往來漁獵遊息之地也」と云ひ、又金蓮川の詩もあり、紅叱撥の詩の注に「余避暑所、川野無非金蓮、金蓮川由是得名」ともあり。金河は、鄂兒坤河の雅名ならん。和林の西百餘里は、正しくは西南にして、鄂兒坤河の上流の地なるべし。大獵の詩に「禁地圍場、自和林南越沙地、皆浚以塹、上羅以網、名札什、實古之虎落也。比歲大獵、特詔先殄滅虎狼」とあるは、多遜の翁奇の圍場と作り方は異なる様なれども、必同ト處ならん。この外和林又は和林の近傍の事に涉れる詩甚多く、蒙古の古史を考ふる人の参考すべき書なり。また太宗紀六年甲午の條「是春、會諸王宴射于幹兒寒河」の下に「夏五月、帝在達蘭達葩之地、大會諸王百僚、諭條令云云」又「秋、帝在八里里、答闌答八思之地、議自將伐宋云云」とありて、明年春は和林城の建築に取掛れり。親征錄にも、甲午の年五月、於答闌答八思始建行宮、大會諸王百官、宣布憲章」とあり。唐兀の察罕の傳に「太宗即位、從略河南、北還清水、答闌答八之地、賜馬三百珠衣、金帶鞍勒」とあるも、太宗の答闌答八思に駐まれる時の事にして、清水は、八里里を

譯したる名ならん。又定宗紀にも「太宗崩、皇后臨朝、會諸王百官於蒼蘭苔八思之地、遂議立帝」とあり。八里里また清水は附きても附かでも同ト處にて、和林の近傍なるべし。雙溪集の詩に「達蘭河あれば、蒼蘭苔巴思（即蒼蘭峙）は、蒼蘭河に沿へる小山にてもあらん。そのありかも確ならざれども、後の考古探訪家の爲に言ひ置くなり。」

綽兒馬罕の
巴黑塔惕征
服

綽兒馬罕、豁兒赤は、巴黑塔惕の民を降らせき。（多遜の史に據れば、

「出兒馬昆は、珀兒沙征伐の命を受け、三萬の兵を率ゐて、一二三〇年（太宗二年）闊喇散に至れり。速勒壇者刺列丁は、太祖凱旋の後、印度より客兒蠻を経て、亦思帕杭に入り、亦喇克闊喇散馬贊迭囉を徇へ、合里發の領地を侵し、阿在兒拜展を取り、古兒只の軍を敗り、一二二六年（太祖二十一年）三月、その都提甫里思を取り、その十月、阿ト合實部を襲ひて回り、翌年八月二十七日、蒙古の軍と亦思帕杭の近傍に戦ひて大敗せしが、蒙古の死傷も甚多くして速に退けり。後勒甫は、この軍を指揮したるは、闊喇散の總督成帖木兒なりと云へり。又蒙古の速に退けるは、太祖の凶報達したるが爲なりと云へれども、いかゞあらん。者刺列丁は、二たび古兒只に逼り、高喀速山南北の諸部聯合の兵を取り、合里發、木思壇、昔兒と和を講じ、珀兒沙汗の封冊を受けたり。一二二九年（太宗元年）の末に、者刺列丁は、客刺惕を圍み、翌年四月遂に落したれども、蒼馬思庫思嚙姆、阿列波、抹速勒、篋鎖塔米亞聯合の兵に擊破られて帖ト里自に回りたる時、出兒馬昆の軍至れり。一二三一年（太宗三年）阿兒囉、阿在兒拜展、諸州に叛かれ、者刺列丁

巴黑塔惕の
歲貢

は、蒙古を禦ぐこと能はず、逃れて庫兒篤の山中に入り、土人に殺されたり。蒙古人は、篋鎖塔米亞、額兒必勒、客刺惕の地を蹂躪するに、敢て抗するものなし。翌年、阿在兒拜展に入り、帖ト里自を降し、歲貢の額を定め、一二三五—一二三六の二年（太宗七年—八年）の間、復、額兒必勒に入り、阿兒囉の甘札を取り、古兒只の諸城を侵し、一二三七年（太宗九年）亦喇克阿喇必に入り、巴固答惕の兵に敗られ、翌年、再亦喇克阿喇必に入り、七千の敵を皆殺にせり。諸將兵を分けて、古兒只に屬する諸部落、阿勒巴尼亞、大阿兒篋尼亞の諸城を取り、一二三九年（太宗十一年）裏海、黑海の間、全境皆定まり、翌年、出兒馬昆卒し、副帥拜住その任を繼ぎたり。出兒馬昆、即、綽兒馬罕は、一たびは、巴固答惕の軍を擊破りたれども、その國を平げたるに非ず。その國の亡びたるは、旭烈兀西征の時にして、憲宗八年の事なり。秘史に、綽兒馬罕は、巴黑塔惕の民を降せりと云へるは、珀兒沙又は西亞細亞の諸部を平げたるを指せるなり。その地、好く物好くと云はれたり。

と知りて、（常徳の西使記に曰く「報達國、富庶爲西域冠、宮殿皆沈檀、烏木、壁と知りて、（白黒玉、産大珠、曰太歲、彈、蘭石、瑟瑟、金剛鑽之類、帶有值千金者、人物頗秀於諸國））斡歌歹合罕勅あるには、綽兒馬罕、豁兒赤を
すぐそこに探馬に坐ゑて、（探馬は、探馬臣の語原にして、探馬にすう

は「就合、綽兒馬罕等爲探馬赤官、置鎮其地」と譯せり。等の字は、衍なり。原文にはなし。蓋探馬は、鎮戍の義にして、探馬臣は、鎮戍の官、探馬赤軍は、鎮戍の兵なり。元史兵

志に「探馬赤軍則諸部族也」とあるは、鎮戍の兵に諸部族を用ひたるが故に、（か）云へるなり。趙翼の二十二史劄記に「探馬赤軍名謂兵之矯捷者」とあるは、恐らくは探馬の原義）**黄なる金、黄ばめる金ある納忽惕**（納忽惕は器物か、明にあらじ）**金欄、總金欄、眞珠、東珠、頸長く脚高き脱必察兀惕**（西使記に見えたる脱必察の複稱なり、明譯に「西馬毎」とある毎の字は、複稱の語尾兀惕を譯せるなり、ト咧惕施乃迭兒曰く「この書方は、西亞細亞にて今も大に貴ばる、謂はゆる秃兒科曼馬の種類にあてはまれり、第十五世紀の委古兒支那字引に、脱必察は大西馬と譯せられたり、沙兀の秃兒奇語の語彙に「脱魄察克」頸長き秃兒科曼馬とあり）**古喀額劣兀惕、答兀昔、乞你都惕**（二つともに明本旁譯に駝名と峯駝の二種の突兒克）**駄くる合赤都惕、老撒速惕**（明本合赤都惕の旁語ならんか考ふべし）**駄くる合赤都惕、老撒速惕**（明本合赤都惕の旁語ならんか考ふべし）**年ごとに送らゝめておこせ居れ」と宣へり。速別額台、巴阿秃兒の後援に出征したる巴秃不里古余克、蒙格を首とせるあまたの諸王は、康**

西方十一部の平定

鄰を乞卜察兀惕を巴只吉惕を收めて、額只勒（前卷の亦的勒的）**札牙黑なる水ある河を渡り、篋格惕**（上文の篋客惕）**の城を破りて、幹嚕速惕を殺して、盡くるまで掠めたり**（幹嚕速惕の嚕も魯と書け）**阿速惕、薛速惕**（前卷の撤速惕）**孛刺兒**（上文の不刺兒）**蠻客兒、蠻乞瓦**（前卷の乞瓦綿客兒綿、上）**を首とせる城どもの民を虜へて、降らゝめて、惟阿速惕等城百姓、虜得虜了、歸附得歸附了、答嚕合臣探馬臣を置きて回れり**（巴秃の西征は、本書の記事は一語もなく、元史太宗紀には「七年乙未春遣諸王拔都及皇子貴由皇姪蒙哥征西域」九年丁酉春蒙哥征欽察部破之擒其酋八赤蠻三十一人己亥冬十一月蒙哥率師圍阿速蔑怯思城閏三月拔之」十二年庚子春皇子貴由克西域未下諸部遣使奏捷冬十二月詔貴由班師」とあるのみにして、その外定宗憲宗本紀速不台昔里幹部等の傳に零細の叙事あるに過ぎざるに、主吠尼喇失惕の舊史合篋兒の金帳史倭勒甫の蒙古史喀喇姆津の嚕西亞史などに由りて、今はその事蹟委しく明かにな

太宗紀の西域征伐

西史の巴秃西征の摘録

りたれば、こゝにト喇惕施乃迭兒に據りてその事蹟の概略を補ひ述べん。抹哈篋惕教徒の記述に依れば(多遜第二第六、一九頁以下)蒙古の軍は、一二三六年の全夏の間進みて、秋には不勒噶兒の國の近傍、佛勒噶河の畔なる拙赤の子どもの斡兒朶に達せり。その冬、蒙古の諸王は、阿昔不勒噶兒の國を撃たしめて速不台を遣りき。速不台は、不勒噶兒の都に進みて攻め落し、その民を屠り又は奴隸として引き去れり。その時會長二人自ら來て諸王に降り、赦されしが、その後叛きて、速不台は再平げに遣られたり。嚕西亞の史喇喇姆津第三第二七〇頁には、巴提(即巴秃)は、一二三六年度の冬、佛勒噶河に近く、不勒噶兒の都より遠からざる處に駐冬し、その都は、一二三七年の秋に破壊せられたりとあり。喇失惕に依るに(多遜二、六二三、蒙古の諸王は、軍議の後、その軍を擡げて、圍獵の時の如く廣がりて進まん)と決したり。蒙古は、海(裏海)に近く左軍を率ひ、乞魄察克の豪酋の一人なる巴出曼と阿薛の民に屬する喀察兒斡果刺とを擒にせり。巴出曼は、久しく追兵を避けて、盜賊逃民の軍を聚め、常に蒙古の軍を苦めて、時時掠奪を行ひたりき。その住所を屢變へて阿提勒河の畔の林に身を匿せる故に、それを捕ふること難かりき。蒙古は、小船二百艘を作らしめて、一艘に百人づゝ載せ、弟不者克と二人、各船隊の半を以て兩岸の林を搜したり。ある處にて蒙古人は、新に棄てたる陣營の遺物を見出し、一人の老婦は、巴出曼の島に入りたることを告げたり。その處に舟一艘も無かりし故に、巴出曼を追ふこと能はざる拵も、俄に強風起りて水を吹き去れり。蒙古の軍は、河を徒涉りて、巴出曼を不意に捕へ、その取を溺らし又は殺せり。巴出曼は、蒙古の手に殺されんことを願ひたれども、蒙古は、不者克に命じて斬らしめたり。阿薛の會長の

元史に見え
たる八赤蠻

嚕西亞史の
記載

一人なる喀察兒斡果刺も斬られたり。蒙古の諸王は、一二三七年の夏をその國にて過し、その年に巴秃斡兒答巴兒孩、喀丹不哩庫勒勒は、字克沙不兒塔思を攻めき。巴兒孩は、喇失惕に依るに巴秃の弟なり。普刺諾喀兒關尼は、別兒喀と云ひ、元史憲宗紀には西方諸王別兒哥とあり。字克沙は、蓋抹克沙にして、今佛勒噶河の中流の西に住める部族にその名あり。嚕卜噶克は、額提里亞河の邊なる抹克薛勒と云ふ民のことと言へり。不兒塔思は、馬速的亦思塔黑哩の巴兒塔思、別兒塔思にて、第十世紀には、阿帖勒河の畔、合咱兒の鄰近に住めり。巴出曼擒殺の事は、憲宗紀に「嘗攻欽察部、其酋八赤蠻逃于海島、帝聞、亟進師至其地、適大風刮海水去、其淺可渡、帝喜曰「此天開道與我也、遂進屠其眾、擒八赤蠻、命之跪、八赤蠻曰「我爲一國主、豈苟求生、且身非駝、何以跪爲、乃命囚之、八赤蠻謂守者曰「我之竄入于海、與魚何異、然終見擒、天也、今水廻期且至、軍宜早還、帝聞之、即班師、而水已至、後軍有浮渡者」とあり。速不台の傳には「乙未、太宗七年、太宗命諸王拔都西征八赤蠻、且曰「八赤蠻有膽氣、速不台亦有膽勇、可以勝之、遂命爲先鋒、與八赤蠻戰、繼又令統大軍、遂虜八赤蠻妻子於寬田吉思海、八赤蠻聞、速不台至、大懼、逃入海中」とありて、擒殺と云はす。蓋八赤蠻を先に破りたるは速不台にて、後に擒にたるは憲宗ならん。昔里鈴部の傳に「乙未、定宗憲宗皆以親王、與速不台帶征西域、明年啓行、鈴部亦在行中、又明年至寬田吉思海」とあるは、年序正に合へり。喀喇姆津の嚕西亞史(三、二七二以下)に依れば、不勒噶兒の都を破壊せる後、塔塔兒人(即蒙古人)は、一二三七年の末に、嚕西亞の境に入り、普噶思克別勒果囉惕等の城を取りて、哩牙贊に至り、十二月二十一日に攻め落して、その民を屠り、その君裕哩は家族と共に殺されたり。喇失惕の史に「一二三八年の秋、

庫裕克曼古庫勒勒不哩は、顔の城を圍みて三日にて取れり」とある顔は、哩牙贊を云へるならん。裕哩の弟囉曼の守れる科羅姆納の城も、哩牙贊と同ト禍に罹れり。喇失惕の史に「亦客の城を攻むる時、庫勒勒傷つけられて死せり。遂にその城を破りて、嚕西亞の君長の一人なる兀兒曼を殺せり」とあり。亦客の城は、幹喀河の畔にある科羅姆納を云ひ、兀兒曼は、囉曼を云へるならん。兀刺的米兒の大公裕哩第二の子兀刺的米兒は、抹思克哇を守り居たりしが、蒙古に破られ、擒となれり。主吠尼の史に抹闊思の城攻の事あるを、多遜は抹思科に當てたり。又喇失惕の史に「木思喀甫の城は、五日攻められて落ち、額米兒兀來提木兒殺されたり」とあるは、兀刺的米兒の擒となれるを誤れるなり。大公裕哩は、その子兀薛佛囉惕木思提思刺甫を留めて兀刺的米兒を守らしめ、兵を率ゐて昔提河(抹羅鳴河の支河)の濱に陣して、その弟奇額甫の牙囉思刺甫、珀喇思刺甫、勒の思委阿脫思刺甫の約束せる援兵を待てり。一二三八年二月二日、蒙古人は、兀刺的米兒を圍み、八日に城破れ、住民は屠られ、大公の一家は皆死せり。喇失惕の史に「大裕兒奇の城を取るに八日かゝれり」とあるは、大公裕哩の都なる兀刺的米兒を云へるならん。その後蒙古の軍は、數隊に分れて、諸方に動き、城を破り邑を荒して、殺掠を肆にせり。大公裕哩は、猶昔提河の濱に居て、三月四日に攻められ、その兵の多數と共に殺されたり。巴提の軍は、諾物果囉惕に向ひしが、二百嚕里計の處に到りし時、遽に回りに科在勒思克に向へり。その城の民勇にして善く、禦ぎ七週にて始めて降り、巴提は、その民を屠りて、その城を卯巴里克(惡き城)と名づけたり。この後蒙古人は、玻羅物次(即奇魄察克)の國に還り、大公裕哩の弟奇額甫の君牙囉思刺甫は、兀刺的米兒に往き、大公の位を襲ぎ、徹兒尼果甫の

元史なる幹羅思征伐

昔里鈴部の傳に鈴部從諸王拔都征兀魯思至也里管城大戰七日拔之とあり替は贊の誤なり

篋客思城の攻め取り

南嚕西亞の征服

米海勒は、奇額甫の君となれり。憲宗紀に「復與諸王拔都、征幹羅思部、至也烈贊城、躬自搏戰破之」とあるは、哩牙贊の戰を云へるなり。速不台の傳に「辛丑、太宗命諸王拔都等討兀魯思部主也烈班、爲其所敗、圍禿里思哥城、不克、拔都奏遣速不台督戰、速不台選哈必赤軍怯憐口等五十人赴之、一戰獲也烈班、進攻禿里思哥城、三日克之、盡取兀魯思所部而還」とあり。也烈班は、嚕西亞諸侯の宗主なる裕哩大公を云へるに似たり。洪鈞曰く「俄史謂錫第河之戰、蒙古軍亦受創、或係先敗後勝」禿里思哥は、科在勒思克の訛なるべし。但此等の戰は、喇失惕に依れば一二三七年即太宗十年、喀喇姆津に依れば一二三八年即太宗十一年の事なるを、傳に辛丑(太宗十三年)と云へるは、誤れり。喇失惕に依れば、一二三八年の秋、□□喀丹は、昔兒喀思を征し、その冬會長禿勒(か)を殺せり。失班不者克不哩は、臣察克の一部なる篋哩姆の國を侵せり。巴兒孩は、奇魄察克を敗り、篋哩惕の會長を擒にせり。その冬、□□は、蓋曼古ならん。不哩喀丹と共に曼噶思の(米客思とも讀まる)城を攻めて、六週の圍の後に取れり。一二三九年の春、庫克歹は、提木兒喀哈里亞(鐵門)を抜き、近傍の諸國を取れり。曼噶思また米客思の攻撃の事は、元史に屢見えたり。太宗紀に「十一年己亥冬十一月、蒙哥率師圍阿速篋怯思城、閏三月拔之」とあるは、春を冬とせり。昔里鈴部の傳に「己亥冬十一月、至阿速篋怯思城、負固久不下。明年春正月、鈴部率敢死士十人、躡雲梯先登、俘十一人、大呼曰、城破矣。眾蟻附而上、遂拔之」とあるは、甚委し。但落城の時序は、集史より一年後れたり。土土哈の傳に「父班都察從征麥怯斯有功、拔都兒の傳に、兄馬塔兒沙從憲宗征麥各思城、爲前鋒將、身中二矢、奮戰拔其城」などあり。嚕西亞の史に依れば(喀喇姆津四六頁以下)、巴提は、玻羅物次を平げたる後、再嚕西亞を

古余克蒙格の凱旋

女真高麗の征定

使し、大公の國を嚇し、俄に南に轉じて、伯喇思刺甫勒を破り、微兒尼果甫を破り、奇額甫に使を遣り、降服を勸めたるに、その使殺されたり、蒙古人近づける時、米海勒は洪噶哩に逃れ、驍將篤米惕哩守禦の任に當り、蒙古の大軍は、四方より圍み攻めて、遂に奇額甫の大城を抜き、篤米惕哩を擒にせり、巴提は、篤米惕哩を殺さずして、伴へり、篤米惕哩は、巴提に勸めて、富饒なる洪噶哩に攻め入らうめて、嚕西亞の蹂躪を緩めたりと云はる、喇失惕に依れば、諸王庫裕克曼古は、斡歌台汗より、歸朝の命を受け、一三三九年の秋に軍を去り、巴禿の王は、その兄弟等と、諸王喀丹不哩不者克と共に、嚕西亞人と喀喇喀勒帕克(黒帽)人とを征伐し、九日にて、民格兒勒の大城を、その後兀刺的米兒の諸城を攻め取れり、到る處に地を荒く、城を破れる後、軍を合せて兀刺的米兒の子兀徹思刺甫の城を攻めて三日に取れりとあり、別喇津は、喀篋捏惕の君亦匪思刺甫兀刺的米囉委赤を云へりと考へたり、民格兒勒の大城は、即本書の蠻客兒蠻乞瓦に、即奇額甫の城なり、本書に「答魯合臣探馬臣を置きて回れり」とあるは、全軍回れるに非ず、喇失惕の庫裕克曼古即古余克蒙格等の回れるを云へるなり、然れども元史太宗紀に「二十二年庚子春、皇子貴由克西域未下諸部、遣使奏捷、冬十二月、詔貴由班師」とあれば、二王の回りたるは、奇額甫を平げたる後に、十二月に蒙古に歸着したるならん、この後巴禿速不台等は、二二四〇年(太宗十二年)の末、別軍を遣り、波蘭に入らうめ、二二四一年(太宗十三年)全軍洪噶哩に入りたる大侵略あれども、本書の記事の外なるが故に略けり、先に主

兒扯惕莎郎合思の處に出征したる札刺亦兒台豁兒赤の

莎郎合思の名稱

元史高麗史の摘録

後援に、也速迭兒豁兒赤を出征せさせたり、探馬に居れ」と勅ありき。(この主兒扯惕は、女真の僭王蒲鮮萬奴の國を云ふ、莎郎合思は、賽因不花、字德中、肅良合台人」とある肅良合は、即莎郎合、台は「の」の義にして、即高麗の人と云ふに同じ、后妃傳に「順帝完者忽都皇后奇氏、高麗人」とありて、その冊文に「咨爾肅良合氏」とあり、錢大昕曰く「元人稱高麗爲肅良合、肅良合氏者、高麗氏也、猶河西人稱唐兀氏、舉其部、不舉其族、或謂改奇氏曰肅良合者、蓋未通于國語、普刺諾喀兒關尼の鎖闌格思と云ひ、嚕卜嚕克の鎖闌噶と云ひ、中世抹哈篋惕教徒の記録に速郎喀と云へるは、皆高麗を指せるなり、然るに喇失惕は、蒙古の十二行省を記して、出兒扯(即女直)と鎖郎喀とを第二行省とし、高麗を第三行省とし、高麗の外に鎖郎喀ありて別の行省をなせるが如く書きたることにつきては、白鳥博士嘗て(歴史地理第八卷第五號)「新羅の國號に就て」と云へる論文に「その誤を辨せり、擲米惕の蒙古字引には「鎖龍豁思は、北高麗人又は索倫人」とあり、高麗の上に北の字を加へたるは、喇失惕の文に泥みて斟酌したるに非ずや、又今の索倫人は、契丹の遺種にして、黒龍江省の地に住み、韓人とは關係なきものなるを、その音の近きに由りて附會したるに似たり、果勒思屯思奇の蒙古字引には「鎖樂果思鎖樂果惕は、高麗高麗人」とありて、北の字を加へず、蒙古と女真高麗との關係は、元史の紀傳と高麗史の世家列傳とに見ゆれば、今二書の文を節約して、その大要をこゝに述べん、元太祖七年壬申、契丹耶律雷哥聚眾于隆安、自爲都元帥、太祖命按陳那衍行軍

至遼，雷哥降之。既而帝召按陳還，而以可特哥副雷哥屯其地。八年癸酉，春，以遼東未定，推雷哥為遼王。耶律雷哥傳：改元元統。太祖紀：九年甲戌，金遣使青狗，誘雷哥以重祿，使降不從。青狗度其勢不可，反臣之。宣宗怒，雷哥傳：以招討蒲鮮萬奴為咸平路宣撫，親征錄，領眾四十餘萬，攻之。雷哥逆戰于歸仁縣北河上，金兵大潰，萬奴收散卒，奔東京。雷哥盡有遼東州郡，遂都咸平，號為中京。十年乙亥，雷哥破東京，可特哥娶萬奴之妻李儂娥。雷哥不直之，有隙。既而其屬耶厮不等，勸雷哥稱帝。雷哥不從，潛與其子薛閣奔蒙古。雷哥傳：十月，萬奴據遼東，稱天王，國號大真，改元天泰。太祖紀：十一月，雷哥入覲，太祖諭以三千人為質，遣蒙古三百人往取之。雷哥亦遣大夫乞奴安撫秃哥與俱，且命詰可特哥，曰：爾妻萬奴之妻，悖法尤甚，使拘繫以來，可特哥懼，與耶厮不等，以其眾叛，殺所遣三百人，惟三人逃歸。十一年丙子，高麗高宗安孝王三年，乞奴金山青狗統古與等，推耶厮不稱帝于澄州，國號遼，改元天威。以雷哥兄獨刺為平章，置百官。方閱月，其元帥青狗叛歸于金，耶厮不為其下所殺，僭號僅七十餘日。眾推其丞相乞奴監國，與其行元帥鴉兒分兵，民為左右翼，屯開保州關。金開州守將完顏眾家奴引兵攻敗之。雷哥引蒙古軍數千適至，得兄獨刺并妻姚里氏，戶二千。鴉兒引敗軍東走。雷哥追擊之。雷哥傳：鴉兒高麗史作鴉兒。高麗史：金就大舉伐之。金山等席卷而東，與金兵三萬戰于開州館。金兵不克，退守大夫營。高麗史：金就殲傳：閏七月，金東京總管府移牒高麗，告蒲鮮萬奴契丹餘黨之亂。八月，金山金始鴉兒乞奴等，引兵數萬，渡鴨綠江，侵高麗寧朔定戎之境。高麗史：高宗世家：數萬元。史高麗傳作九萬餘。金山自稱國王，改元天德。雷哥還度遼河，招撫懿州。

廣寧，移居臨潢府。雷哥傳：是時木華黎平錦州，誅張致，拔蘇復海三州，斬完顏眾家奴萬奴等，率眾十餘萬，遁入海島。木華黎傳：十月，萬奴降蒙古，以其子帖哥入侍。既而復叛，僭稱東夏。太祖紀：東夏高麗史作東真。十一月，契丹賊履冰渡大同江，遂入西海道。十二月，屠黃州。十二年丁丑四月，萬奴兵破大夫營，又有女真黃旗子軍叛。金九月，自婆速府渡鴨綠江，屯古義州城。十月，高麗將趙冲擊逐之。高麗史：契丹乞奴為金山所殺，統古與復殺金山而自立，喊舍又殺之，亦自立。雷哥傳：喊舍高麗史作噶捨。太祖紀：高麗傳作六哥。十三年戊寅九月，契丹賊保江東城。高麗史：太祖命哈真札刺率師追討。太祖紀：哈真札刺高麗傳作哈只吉刺刺。遼王雷哥將契丹兵。雷哥傳：與東真國元帥完顏子淵兵二萬皆屬之。高麗史：兵凡十萬。雷哥傳：冬，入高麗，破和孟順德四城。高麗史：麟州都領洪大宣迎降。洪福源傳：十二月，蒙古使至高麗，營求糧，徵兵。高麗輸米一千石。十四年己卯正月，蒙古東真與高麗將趙冲金就殲合兵，平契丹賊。噶捨自縊死。哈真等還。高麗史：割刺與趙冲約為兄弟，冲請歲輸貢賦。割刺曰：爾國道遠，難於往來，每歲可遣使十人，取之。高麗傳：取之，原文作入貢。然太宗四年十一月，高麗王上皇帝狀，引蒙古元帥語曰：道路甚梗，爾國必難於來往。每年我國遣使佐，不過十人，可費持以去。然則是往取而非來貢也。高宗遣尹公就、崔逸以結和牒文，送割刺行營，割刺遣使報之。太祖又遣蒲里岱也持詔往諭之。高麗傳：是歲，太祖西征，皇弟斡赤斤居守蒙古祕史。九月，斡赤斤及元帥合臣。即哈真副元帥割刺等各以書遣使十人，往索方物。自是蒙古使者每歲至高麗，或歲再至焉。高麗傳：十五年庚辰，雷哥卒，妻姚里氏權領其眾。雷哥傳：十七年壬午十月，蒙古使者古歟等至高麗，察其納款之實。十九年甲辰二月，着古歟復使高麗。

十二月又使焉盜殺之于途自是連七歲絕信使矣高麗傳二十一年丙戌雷哥長子薛閣歸臨漢襲父爵(雷哥傳)時金平章葛不哥行省於遼東與蒲鮮萬奴相依太宗元年己丑命撒里答火兒赤與吾也而薛閣王榮祖等征遼東(吾也而王珣傳)薛閣據雷哥傳拔蓋州宣城石城等十餘城葛不哥走死(王珣傳)薛閣行收其父遺民移鎮廣寧府行廣寧路都元帥事(雷哥傳)三年辛卯八月以高麗殺使者命撒禮塔率師東征(太宗紀)吾也而薛閣王榮祖移刺買奴等從之(吾也而雷哥王珣移刺捏兒傳)圍咸新鎮屠鐵州(高麗史)西京郎將洪福源(大宜子)迎降于軍獻所率編民千五百戶導撒禮塔攻州郡未附者(洪福源高麗傳)九月過西京入黃鳳州陷宜郭州(高麗史)取城凡四十餘(太宗紀)使阿兒禿與福源抵王京招諭高宗遣弟懷安公王便請和(高麗傳)十一月庚戌蒙古兵屠平州辛亥元帥蒲桃迪巨唐古等領兵至京郊王遣御史閔曠驍師十二月壬子朔蒙古軍分屯京城門外閔曠復驍之癸丑撒禮塔遣使入闕付文牒諭降丙辰遣淮安公(即懷安公)使以土物遺撒禮塔甲戌撒禮塔復送牒徵索甚鉅庚辰王獻國贖遣使上表辨疏(高麗史)撒禮塔遂承制置京府及州縣達魯花赤七十二人以鎮之(太宗紀)洪福源傳四年壬辰正月撒禮塔班師(高麗史)太宗遣使以璽書諭王(高麗傳)高麗史云都旦等二十四人來(三月)王遣中郎將池義深錄事洪巨源金謙等齎國贖牒文送撒禮塔屯所(高麗傳)四月遣上將軍趙叔昌侍御史薛慎如蒙古上表稱臣獻方物(高麗史)五月太宗復下詔諭之高麗傳高麗史云七月蒙古使九人來以將征萬奴徵兵(太宗四年十一月)高麗陳情表六月高麗權臣崔瑀脅王遷都以避蒙古之亂七月王發開京入江華島遣使于諸道徙民山城海島(高麗史)八月太宗復遣撒禮塔領兵討之高麗傳高麗

麗傳云六月噶(高宗)盡殺朝廷所置達魯花赤七十二人以叛然高麗史所載唯有七月王遣內侍尹復昌往北界諸城奪達魯花赤弓矢却被達魯花赤射殺及八月朔西京巡撫使閔曠使將校等謀殺達魯花赤不成(二事)而無盡殺七十二人之事觀所載九月答蒙古官人書十一月答蒙古沙打官人書上皇帝陳情表又狀答撒禮塔書十二月寄蒙古大官人書又答大官人書皆極辨疏竄海島闕朝覲數事出不得已而無一語及盡殺朝官之事高麗傳載太宗五年詔數高麗五罪亦唯擄舉鎮事而不及是事然則是事之為妄傳無可疑矣十月王遣將軍金寶鼎郎中趙瑞章上表陳情(高麗傳)十二月撒禮塔攻處仁城有一僧射殺之王嘉其功授官(高麗史)別將鐵哥以軍還令洪福源領已降之人雷屯西京(高麗傳)西京據高麗史五年癸巳二月詔諸王議伐蒲鮮萬奴遂命皇子貴由諸王按赤帶國王塔思將左翼軍討之(太宗紀)塔思據木華黎傳兀良合台(速不台子)札忽兒臣(李禿孫)屬貴由移刺買奴(捏兒子)屬按赤台石抹查刺也先子石抹李迭兒屬塔思王榮祖不知所屬皆從征(速不台李禿移刺捏兒王珣石抹也先石抹李迭兒諸傳)四月詔諭高麗王悔過來朝且數其五罪(高麗傳)蒙古軍至遼東圍南京(即東京)城堅如立鐵九月石抹查刺奮禦先登取軍乘之而進遂克之擒萬奴遼東平(石抹也先石抹阿辛傳)西京人畢賢甫與洪福源等謀殺高麗宣諭使鄭毅十月崔瑀遣家兵三千與北界兵馬使閔曠攻西京獲賢甫斬之福源逃擒其父大純(即大宜)弟百壽悉徙餘民於海島西京遂為丘墟(高麗史)福源以所招集北界之眾歸蒙古處於遼陽瀋陽之間(洪福源傳)六年甲午春蒙古兵引還(高麗史)五月帝以福源為管領歸附高麗軍民長官仍令招本國未附人民(洪福源傳)七年乙未命唐古拔都兒與福源領兵征高麗拔

撒兒台を誤
れる札刺亦
兒台

十餘城(高麗傳)侵掠連年不已(高麗史)十年戊戌薛閣卒子收國奴襲爵易名石刺亦從征高麗有功(雷哥傳)五月高麗人趙玄習李元祐等率二千人降蒙古命居東京受福源節制十二月高宗遣將軍金寶鼎御史宋彥琦等奉表朝蒙古(高麗傳)十一年己亥四月蒙古兵還高麗史五月詔徵王入朝王以母喪辭六月乃遣使奉表入朝十月諭王徵其親朝十二月王遣使入貢十二年庚子三月又入貢五月復詔諭之十二月入貢(高麗傳)十三年辛丑四月以族子永寧公綽爲己子入蒙古充秃魯花(高麗史)秃魯花は、蒙語質子なり定宗憲宗の世歲貢入らずして四たび征伐せられしが憲宗九年に世子憐(元宗順孝王)を質子としてより永く元の東藩となりき秘史の札刺亦兒台豁兒赤は、撒兒台豁兒赤の誤寫又は誤譯ならん撒兒台は、親征録に撒兒塔火兒赤太宗紀高麗傳高麗史に撒禮塔洪福源の傳に撒里塔吾也而の傳に撒里塔火兒赤王珣の傳に撒里台などあり元史には兒の音を里と書けること多ければこれも正しくは耶律雷哥の傳に見えたる如く撒兒台なるべくして親征録吾也而の傳なる火兒赤は、即豁兒赤なり也速迭兒豁兒赤は何人なるか東征の役に與れる諸將の誰なるか考へ得ず蒙古の朝には也速迭兒と云へる人甚多く康里の也速得兒は元史に傳ありその外康里の艾兒拔都の子也速答兒珊竹帶の紐璘の子也速答兒札刺兒の阿刺罕の子也速迭兒阿速の玉哇失の兄也速歹兒氏族志には兀良合の速不台の從孫也速得兒達達兒の忙兀台の叔父也速歹兒などあれどもいづれも時代稍後れてこの也速迭兒豁兒赤とは思はれず耶律薛閣吾也而唐古などの別名)には非ずや

不哩古余克
を訴ふる巴
秃の使

巴秃は、乞卜察黑惕(即乞卜)の征伐の上より、斡歌歹合罕に使より奏して遣るには「長生の上帝の力にて、合罕叔父の福にて、篋格惕の城を破りて、斡魯速惕の民を虜へて、十一國の民を正に入らゝめて、金の縻繩を退け扯きて、別る、筵會に筵會せんと云ひ合ひて、大なる天幕を起して筵會する時、我はこゝに居る諸王の兄君(蒙語阿合罕、首長)となれるとなりて、一二盞の喝盞を先に飲みたりとて、我に不哩古余克二人怒りて、筵會に筵會せず、上馬せられたり。上馬して、不哩言く「巴秃と齊等になりて居るに、先にいかんぞ飲みたりし。髯ある嫗ども

と齊等ヒトシナイになりては、踵ウシヒラにて壓オスして、足掌アシノヒラにて踏フまん」と云ひき。古余克コノク言イハく「彼等カレラ箭筒ヤナグヒあるオウナ 嫗オウナどもを、その胸前ムナサキを柴打シイウたん、我等ワレラは彼等カレラを」と云ひき。額勒只吉歹エルクジギダイの子哈兒コハル合孫カスン言イハく「木の尾ウシを接ツがん、彼等カレラを（明カレンウナジ）他後頭カノヒトツノ接與ツガン他箇木カノヒトツノ尾子ウシ）」と云ひき。我等ワレラこそは、別コトなる肝キモある敵テキの民タチの處トコロに出馬シユツせさせられて、善ヨクくか宜ヨクしくかなりになれる（明カレンウナジ）爲タメニ俺毎ワレラ征トク了コト這異種イシユノ的シテ百姓ヒヤクシヤウ恐事オソコト有アル合宜カニヤル不合宜カニハ處トコロ」と云ひて居るに、不哩フリ古余克コノク二人フタリにかく云イハはれて、相談オウゼンなく散サンぜられたり。今合罕イマカガン叔父オジヤの聖旨オホシコト知シめせ」と奏ウラして遣ヤりき。

古余克等を太宗の怒り

巴秃バトの此コノの言コトに、合罕カガン甚イカく怒イカりて、古余克コノクを見えさせずして宣イリキはく「この下郎ゲラウは、誰タレの言コトに従シひてか、兄人アニヒトを口一杯クチイッパイに言イへる。獨ヒトツの卵腐タマゴれ（明スツルコトハ）捨ナシ了你ナシ如棄ナシ一鳥卵イツツノ」（阿合古温）即兄人スナハチアニヒトの胸前ムナサキに逆サカひたりき。先驅サキガケに放ヤりて、その十トウの指ユビの爪ツメ磨ハラ盡ツクるまで、山ヤマの如ゴトき城シロどもに爬登ハヒンボらうめん。探サシ馬ウマに放ヤりて、その五イツの指ユビの爪ツメ剝ハぐるまで、築キツける堅カタき城シロどもに爬登ハヒンボらうめん。汝ナシに歹アシき下郎ゲラウ哈兒合孫ハルカスンは、誰タレに學マナびてか我等ワレラの親ミウナを口一杯クチイッパイに大言ダイゴン言イひたりし。古余克コノク哈兒合孫ハルカスン二人フタリを共トモに遣ヤらん。哈兒合孫ハルカスンをば斬キらうむべきなりき。偏頗ヘンパたりと云イハはん、汝等ナシ（明フイモトベクレモコロス）殺コロシ若殺ニシ

忙該阿勒赤
歹等の奏議

了呵人必說我偏心。不哩をこそはと云へば、巴禿に
 言ひ、察阿歹兄に言ひて遣れ。察阿歹兄知れ(明 不哩是察
 阿歹兄の子、教巴禿對察阿歹兄處說將去)と宣へり。
 諸王より忙該(即憲宗 蒙格)官人等より阿勒赤歹(亦魯該の親族に
 長となれる人、卷九に見えたり)晃豁兒台(下文に依れば札撒兀
 の官に居る人なり)掌吉を(功臣の第五十
 四なる 苟吉か)首とせる官人等建議して奏さく「成吉思合罕爾が父
 の聖旨に、野の事は、野にてのみ裁くなりき。家の事
 は、家の内にてのみ裁くなりき。(野の事家の事は、圖外圖)合罕
 恩賜せば、合罕は古余克に怒りておはせり。(おはす)野の
 事なり。(なれ)巴禿に委ねて遣らば宜うからんか」と奏せ

古余克等を
太宗の叱り

ば、この言を合罕は可と怒息みて、古余克を見えさ
 せて、教訓にて言に聲立てて、「出征して往く間に、譬
 ある人の臂を刺さざりき(明 將軍人都打徧)と云はれ
 たり、汝軍の人の顔色を挫きて行けり(明 挫了威氣)
 と云はれたり、汝、幹嚕速惕の民を、かゝる汝の勢怒
 に怕れて降られたりとなして居るか、汝、幹嚕速惕の民
 を獨にて降したるが如く思ひて、猛き心を持ちて、兄
 人に逆ひ來ぬ、汝、成吉思合罕我等の父の聖旨にあり。
 「眾は懼れしむ、深は死なしむ(明 人多則人懼、水深則人
 死)と云へることあらざりしか。獨にて爲果せたるが

如く「思ひ」速別額台不者克（睿宗拖雷の子、憲宗蒙格の弟、世系表の撥綽大王）二人の陰に
 行きて、多き眾にて力を合せて、斡魯速惕乞卜察兀惕を
 降して、一二の斡魯速惕乞卜察兀惕を得て、殺斃の蹄を
 も得置かざるに、丈夫振りて、一たび家より出でて、何も
 獨にて爲果せたるが如く、言聲を惹きて來ぬ汝（來ぬは、原
文に「來て」とあれども「て」は「ぬ」の你自己粘斃的蹄子不曾置得
誤ならん粘斃以下の句を明譯には忙該阿勒赤歹晃豁兒台
 掌吉等に、亢りたる心を前の伴となりて止めて、沸き
 たる鍋を寛き柄杓（水を）て靜まらせられたるぞ。
 これは野の事なれば、「巴秃を」て裁かゝめん」と云へ

巴秃古余克の不和

り。古余克哈兒合孫二人を巴秃知れ」と宣ひて遣りぬ。不
 哩をば察阿歹兄知れと宣へり。（古余克二たび西に往きたる後、いかに處分せられたるかは、秘史に載せられざれども、大汗の長子の事なれば、巴秃も任せられては、むごくは取扱はざりしならんかくて秘史の成りし）太宗十二年の翌年（二四二年）の十一月、太宗崩す、その翌年の春、西征の諸軍は、洪噶哩亞を引上げて東に進み、高喀速山の北なる地方に數月留まり、乞魄察克の殘黨と戦へり。喇失惕の史に據れば、途にて一夏一冬を過したる後、諸王は、二四三年、朶唎格捏合屯稱制の二年癸卯に各その領地に歸れりとありて、その諸王の内には、庫余克も加はれり。されども巴秃と古余克との不和は、解けざりしと見えて、古余克の母なる攝政合屯、大會を開きて合罕を擇び立てんとしたる時、巴秃は、合屯の意、古余克を立てんことを欲すと聞き、馬の足弱れりと稱して出發を延引せり。この時巴秃は、諸王の中にて威望ある人なりし故に、朶唎格捏合屯は、巴秃を待ちて大會を延ばし居たれども、巴秃竟に至らざるに由り、二四六年（合屯稱制の五年丙午）の春、巴秃なくに大會を開きて、古余克を合罕に戴けり。二四八年（古余克合罕の三年戊申）の春、古余克疾ありて、潛邸の時より領に居たる額米兒の地方に赴きたるに、拖雷の寡婦莎兒合黑塔尼は、西巡の目的は巴秃を襲ふにあらんと疑ひて、使を遣りて巴秃に注意を與へたれば、巴秃はみづから朝謁せんと思ひ、阿刺克塔克山に至れる時、偶古余克合罕は途にて崩たり。この巴秃古余克の不和の事は、喇失惕の史に由りて傳はれるのみにて、元史本紀に

巴秃不哩の不和

は無く、不哩の事は元史憲宗紀元年即位の條に「諸王也速忙可不里火者等後期不至、遣不憐吉解率兵備之」とあり、也速忙可は、世系表なる察合台太子の子也速蒙哥王、火者は、世系表なる定宗の子忽察大王なり、喇失惕に據れば、失喇門(定宗の姪失烈門又昔列門)闊札幹古勒(即忽察)納古(忽察の弟腦忽)三王の謀反せる時、不哩も謀に與りたれば、一二五二年(憲宗二年)に巴秃の處に送られ、巴秃の命にて斬られき、かくて巴秃は、不哩が嘗て爛醉の狀にて吐ける惡口に對し復讐を爲せり(多遜二、二六九)この事につきて、嚙卜嚙克は又次の如く言へり、この旅僧は、一二五四年(憲宗四年)に突兒其思壇を通りて還りし時、我また不哩の獨逸奴隸どもの居りし塔刺思の町にて問ひき、不哩の事につき、兄弟(教會の同僚)安篤列亞思語れり、安篤列亞思に、又我は、會議所にて撒兒塔黑と巴秃との事を問ひき、彼等の主人なる不哩の、ある折に殺されたりし事の外は、何事をも知ること能はざりき、不哩己れは好き牧場を有たざりしかば、ある日酔ひて居りし時、その臣屬に語りて、我は、巴秃の如く、成吉思汗の子孫ならずや(原注、不哩は、巴秃の姪又は從弟なりき)いかで巴秃の如くも、額提里河の岸に徘徊して、そこに遊牧すべからざらんや」と云ひき、それらの言は、巴秃に告げられき、その時巴秃は、みづから不哩の臣屬に書を贈りて、その主人を縛りて送ることを命づけければ、その事を臣屬は爲しけり、その時巴秃は、かゝる言を言ひしかと不哩に問ひ、不哩はみづから承服せり、然れども不哩は、その時酔ひて居りしから、醉人を寛恕する習ひなるから」として分疏せり、然るに巴秃は、「いかなぞ汝は、酔へる時に敢て我が名を呼びし」と答へて、その頭を斬らめけり」)

親衛の制の申傍

又幹歌歹合罕勅ありて、「成吉思合罕我が父の處に行き(おこ)たる宿衛箭筒士侍衛なる眾の番士の行を新にせん」と諭し給ふ聖旨を傳へけらく、「合罕額赤格の聖旨に依り前にいかにか行ひたりし。今その(儘の)法に依り行へ」として、勅あるには「箭筒士侍衛は、前の法に依り、晝その道道を行ひて、日あるに宿衛に譲りて、外に宿れ」と勅ありき。夜は我等の處に宿衛宿れ。門の處に家の周に宿衛立て。幹兒朶の後に前に宿衛巡れ。日落ちたる後、夜行く人を宿衛拏へて宿れ。眾散りたる後、宿れる宿衛より外に、内裏を指して入る人をば、拏へ

宿衛の勤方

宿衛の威嚴

たる宿衛は、その頭を割る、程斫りて去けよ。夜急の
 話ある人來なば、宿衛に話して、帳房の北より宿衛と
 一處に立ちて話合へ。斡兒朶の房に入り出づるをば、
 晃豁兒台失喇罕等の札撒兀は、宿衛と共に治めよ。(札撒兀は官の
名にて、札撒を掌る官なり。札撒は、法の蒙語にて、元史太宗紀元年即位の條に、頒大
札撒」とありて、原注に「華言大法令也」と云へり。されどもこの札撒兀は國の大法官
に非ず、只殿中の取締役にて、その名はこゝに始めて出でたれども、その職務は、卷
十に見えたる朶歹扯兒必の殿中を監視せると同類なるべし。札撒兀は、今の蒙
古語に札薩克と云ひ、内蒙古四）額勒只吉歹は、信任ある人なるに、
十九旗の旗長の官となれり。）
 夕に宿衛の上を行くとなり、宿衛に拏へられきと云ふ
 聖旨に違ひ爲さず、宿衛は信任あるものなるぞ」と勅あ
 りて、「宿衛の數を勿問ひそ。宿衛の坐の上を勿行き

宿衛の掌る
雜務

そ。宿衛の閒を勿行きそ。宿衛の上を行く、閒を行く人
 を宿衛は拏へよ。宿衛の數を問ふ人の、その日の乗れ
 る驢馬、鞍あり轡あるを、被たる衣服ごめに宿衛は取
 れ。宿衛の坐の上に誰も勿坐りそ。宿衛は、纛鼓朶囉鎗
 器皿を調へよ。飲物食物を稠き肉を宿衛支度せよ」と勅
 ありき。「斡兒朶の房車を宿衛調へよ。我等の身軍に出
 ずば、我等より外に、別に宿衛は軍に勿出でそ。我等
 鷹使ひ圍獵する時、その半を斡兒朶の房車の處に斟
 酌ひて置きて、我等と共に半の宿衛は行け。(その半は、宿衛
三八六頁にも、こゝと同ト意味の文ありて、「車の處に半を斟酌ひて置け」と譯す
べき所を「半」の上に「獲物の」を補ひたるは誤解なりき。「斟酌ひ」と譯すべきを、一分

けと譯した)宿衛より營盤官(語蒙)嫩秃兀臣(又嫩秃黑赤元史兵志三に「玉你伯牙の奴秃赤なる火你赤」とある奴秃赤は、嫩秃黑赤の訛なり)行きて幹兒朶の房を下せ。門に倚りて宿衛の門者立て。馭の宿衛を合答安千戸知れ」と勅あり

千宿衛の長合答安宿衛四班の長八人合答安不刺合答兒

阿馬勒察納兒

合歹豁哩合察兒

き。(合答安は、八十八功臣の第六十三なり。今太祖の朝の也客捏兀囉に代れり)又宿衛の班班の官人を任して、「合答安不刺合答兒二人は、一班となりて議り合ひて、番直に入りて、幹兒朶の右左の邊に分れ居て整へよ。阿馬勒察納兒二人は、議り合ひて一班となりて、番直に入りて、幹兒朶の右左の邊に分れ居て整へよ。合歹豁哩合察兒二人は、議り合ひて一班となりて、番直に入りて、幹兒朶の右左の邊に分れ居て整へよ。」

牙勒巴黑合喇兀答兒

へよ。牙勒巴黑合喇兀答兒二人は、議り合ひて一班となりて、番直に入りて、幹兒朶の「右」左の邊に分れ居て整へよ。(太祖即位の處には、箭筒士の四班の長四人と八千の侍衛の長八人とは、一の名を擧げたれども、宿衛は總長也客捏兀囉のみを擧げて四班の長をば擧げざりしが、これは合答安不刺合答兒(即前の不刺合答兒)の班、阿馬勒察納兒の班、この二班は、幹兒朶の左の邊に營盤して番直に入れ。合歹豁哩合察兒二人の班、牙勒巴黑合喇兀答兒二人の班、この二班は、幹兒朶の右の邊に營盤して番直に入れ」と宣へり。(太祖即位の處には、諸の營盤を定めて「宿衛」この四班の宿衛を合答安知れ。又「宿衛は、我が身に貼きて、幹兒朶の周に立ちて、門を壓へて臥せ。宿衛より幹兒朶に

箭筒士四班の長也孫脫額不乞歹豁兒忽蒼黑刺巴勒合

侍衛の四班の宿老八人

阿勒赤歹晃豁兒塔孩

帖木迭兒者古

某甲某乙

入りて、二人の人酒局を執れ」と勅ありき。又「箭筒士を也孫脫額不乞歹豁兒忽蒼黑刺巴勒合は、四の班班となり箭筒帯びたるを、侍衛の四の班班の處に、列る箭筒士を整へて入れ」と勅ありき。(箭筒士の四班の長は、太祖即位の時に同じ。額孫脫額は即額孫帖額不乞歹は即不吉歹刺)

巴勒合は即刺ト刺合なり。又侍衛の番直の宿老を前に知りたりもこの親族より任して、前に知りたる阿勒赤歹晃豁兒塔孩二人は、議り合ひて、一班の侍衛を整へて入れ。(前段の初に官人阿)

勒赤歹晃豁兒台と並へ擧げたれば、この晃豁兒塔孩は、即晃豁兒台と同ト人ならん。帖木迭兒者古二人は、議り合ひて、一班の侍衛を整へて入れ。(この間に脱文あらん。二班の宿老足らず。今試に補はば、)

「某甲某乙は、議り合ひて、一班の侍衛を整へて入れ。某丙

某丙忙忽台

は、忙忽台に輔けさせ知りて、一班の侍衛を整へて入

れ。(太祖即位の時は、八千の侍衛の長八人ありて、その八人の内より不合阿勒赤歹朶朶朶朶忽忽四人は、四班の宿老となりしが、今は一千ことの長は無くて、四班の宿老は、一班に二人づゝ八人あることとなれり。この八人は、前に知りたり者者の親族なるに、阿勒赤歹のみは前に知りたり。儘なれば、殊に斷れり。晃豁兒塔孩以下七人は、不合朶朶朶朶忽忽等の親族なるべけれども、その關係少くも分)又

百官の長額勒只吉歹

合罕勅あるには、眾の官人どもは、額勒只吉歹を長と

缺勤の罰

て、額勒只吉歹の言に依り行へ」と宣ひて、又勅あるには「番直ある人、番直に入る時、脱さば、前の聖旨の理に依

り、三の筈を與へよ。その番直ある人、又再番直を脱さば、七の筈を與へよ。又その人、病理由なく、番直の宿老に相談なく、三たび番直を脱さば、我等の處に行く(勤む)

勅の言ひ聽かせ

宿老番士の同等

ことを難くとりたるなり。三十七の答を與へて、遠き地に眼の陰に遣らん。又番直の宿老は、番直する番士を點檢せずして、番士番直を脱さば、番直の宿老を罰はん。又番直の宿老は、第三第三に(三日目)番直に入る時、代り合ふ時、この勅を番士に聽かせよ。勅を聽きてあるに、番士番直を脱さば、勅の理に依り罰はん。この勅を番士に聽かせずば、番直の宿老罪あるとなれ。又番直の宿老は、同等に入りたる我が番士を、我等に相談なく、長とせられたりとのみ云ひて勿責めそ。法度を動さば、我等に告げよ。死なすめらるゝ理あるならば、我等は

千戸より上にある番士

斬らむるぞ。懲さるゝ理あるならば、我等は訓ふるぞ。長とせられたりとして、我等に告げず、自手足を致さば、拳の報に拳を、答の報に答を回さんと宣へり。又外に居る千戸の官人より我が番士は上に在るぞ。外に居る百戸十戸の官人より我が番士の家人は上に在るぞ。外に居る千戸ども、我が番士に殴ち合はば、千戸の人を罰はん」と勅ありき。(これらの勅は、殆皆卷九卷十に跨れる太祖に宣諭せられたれば、これも太宗即位の初の事ならん。然らば元史太宗紀元年即位の處に「頒大札撒華言大法令也」とあるは、これらの勅を云へるなり。大法令と云へは、國法民法の類かと思ひたり。かくの如き「幹歌歹皇帝將成吉思時守衛的并眾散班每各各職掌照依舊制再宣諭了

太宗六年の
札撒

一遍イツベンと書きたれども、さるにては、宿衛箭筒士侍衛の官人等の名も分らぬこと
 午の處に法令の如きもの十一章を載せたり。夷狄の法律、實に面白ければ、こゝに
 引き出して、参考に供せん。まづ夏五月、帝在達蘭達葩之地、大會諸王百僚、諭條令
 曰と書き出して、第一に「凡當會不赴而私宴者、斬」第二に「諸出入宮禁、各有從者、
 男女止以十人為朋、出入毋得相雜」第三に「軍中、凡十人置甲長、聽其指揮、專擅
 者、論罪」第四に「其甲長以事來宮中、即置權攝一人」第五に「甲外、一人二人、不得
 擅自往來、違者罪之」第六に「諸公事、非當言而言者、拳其耳、再犯、笞三犯、杖四犯、
 論死」第七に「諸千戶、越萬戶前行者、隨以木鏃射之、百戶甲長、諸軍有犯、其罪同、
 不遵此法者、斥罷」第八に「今後來會諸軍、甲內數不足、於近翼抽捕足之」第九に
 「諸人或居室、或在軍、毋敢喧呼」第十に「凡來會、用善馬五十匹、為一羈、守者五人、
 飼羸馬三人、守之烈思三人、但盜馬一、二者、即論死、諸人馬不應絆於乞烈思內者、
 輒沒與畜虎豹人」第十一に「諸婦人製質孫燕服、不如法者及妒者、乘以勝牛、徇部中論罪、即聚財為更娶」とあり。

羊の賦

又斡歌歹合罕宣カガシはく「成吉思合罕額赤格の艱難して
 立て給へる國民を勿苦めそ。彼等の足を土に、彼等の
 手を地に置かせて樂ません。皇考の成就シヤウジユ「せる位ウチ」に坐スラ

牝馬の賦

りて、民を苦めず、湯ユ暑連シュレン、本義は湯にして、湯より肉汁となり、肉湯
 羊ヤウに湯羊と此等の國民より羊羣の一の二歳の羊を年
 年に奉れ。百の羊より一の羊を出して、その間の貧
 く乏トホきトホに與へよ。明一。百姓羊羣裏、可毎年只出一箇
 二歲羯羊做湯羊。每一百羊内、可只出一箇羊接濟本部
 落之窮乏者。元史太宗紀元年即位の續に「勅蒙古民有馬百者、輸牝馬一、牛
 百者、輸牝牛一、羊百者、輸粉羊一、為永制」とあるは、この事
 の異聞又兄弟（諸の皇族）あまたの男驕馬番士聚らば、彼等
 の飲物を毎に民よりいかでか征らるべき。處處の千戸
 千戸より騾馬どもを出して擠り、乳擠に牧せしめ、營盤
 官を常に替へ出して、乳馬飼となれ。明一。諸王駙馬等

倉庫の設け

聚會時、每每於百姓處科斂、不便當、可教千戶、每年出
 騾馬并牧擠的人、其人馬以時常川交替、蒙古語に兀納忽赤
にて、元史兵志三に「闊闊の地の兀奴忽赤なる忙兀解」とあるも、それなり。然るを元史語解は、この兀奴忽赤を狐捕りなる兀捏格赤と間違へ、元史の本文を烏訥格齊と改めたるは、いつもな又兄弟聚らば、給與賞賜を與へん。織物
 貨幣、箭筒、弓、甲、武器、どもを倉どもに入れて、財どもを
 守らせん。處處より財守、穀守を擇びて守らせよ。(財ども財守の蒙古語は、
 巴喇合惕、巴喇合臣、巴喇合惕の單稱は、巴喇干なり。原本には、巴喇合惕は、巴喇合臣と書きて、巴喇合惕の旁譯は、庫每、巴喇合臣は、管
城的とあれども、譯文には倉庫等掌守の人とありて、城守と云はざれば、二つの刺は、喇の誤なることうつなし。巴喇干は、擲米惕の蒙古字引に、巴兒干と書きて、家具と譯せり。巴喇合臣は、巴喇合赤とも云ふ。元史世祖紀、至元十七年九月の處に「守庫軍盜庫鈔、八刺合赤分其贓、縱盜遁去、詔誅之」とあり。元史語解は、八刺合赤を、巴喇合赤と改めて「管理什物人也」と注した。ヒトツ、シヤウシノ、キン、バク、キカイハ、サワ、ドモ、シヤウシノ、
 一、賞賜的金帛器械、倉庫等掌守的

營盤の分與

徹勒地方の井掘り

人、可教各處起人來看守、太宗紀元年即位の續に「始置倉廩」又國
 の民に營盤の水を分けて與へん。營盤に營盤せよめ
 ん。千戶千戶より營盤官を擇びて出さば可からん。(明一、
 百姓行分與他地方、做營盤住、其分派之人、可於各千戶
 內選人教做、水草を逐ふ遊牧の民には、水は甚大切にして、水あれ又徹
 勒の地、(卷七に見えたる桑昆の逃げ)には、獸より外は住まざ
 りき。民に寛げんと、察乃、(卷九に見えたる主兒扯歹の族に)委兀兒
 台二人の營盤官を頭として、井どもを掘らせて、登せ
 よ。(明一、川勒地面、先因無水、止有野獸、無人住、如今要
 散開百姓住坐、可教察乃畏兀兒台兩箇去踏驗、中做營

站の設け

盤的地方、教穿井者。又我等の使走るに、國民に倚ら
 ずめて走らせたり。走る使の行程遅れたり。國の民に
 も苦ませたり。今我等全く定むるには、處處の千戸千戸
 より札木臣(驛の事務を掌る人)兀刺阿臣(驛馬を掌る人)を出して、坐ども坐
 どもに(站を坐る置く)站(驛)を置きて、使を要事なく國民に
 倚らせず、站に依り走らせば可からん。(明一使臣往來、沿
 百姓處經過事也。遲了。百姓也生受。如今可教各千戸每
 出人馬、立定站赤。不是緊要事務、須要乘坐站馬、不許
 沿百姓處經過。札木臣は、站赤とも云ふ。その制は、元史に委し、後に云ふべ
し。兀刺阿臣は、兀刺阿赤とも云ふ。元史兵志二に「典車馬者
曰兀刺赤」とあり。語解は烏拉齊と改めて、「司驛站人也」と注せり。又親征錄に「助貧
乏置倉戍、棚驛站」とあるは、この新制の第一第三第六の三章を略記したるなり。

察阿歹の協贊

元史太宗紀は、親征錄に本づきて、「始置倉廩」
 立驛傳」と記して、又その「助貧乏」を略けり。これらの事どもを察乃
 孛勒合答兒(即前の不勒合答兒)二人考へて、我等に建議したれば、可
 からんかと思ひて(思はるが)、察阿歹兄知れ。この言はるゝ事
 ども宜しければ、可とせば、察阿歹兄より爲せ」と宣ひ
 て遣りたれば、察阿歹兄は、問ひて遣りたるこれらの事
 どもを都てを可として、「かく便爲せ」と云ひて來ぬ。又
 察阿歹兄言ひて來ぬるに「我は、こゝより札木惕(站の複稱)を
 迎へ接合せん。又こゝより巴禿の處に使を遣らん。巴禿
 も、迎へて札木惕を接合せよ」と云ひて、又言ひて來ぬる
 には「都てより札木惕を置かする事は善きよりも善し

内外大同

と提説せり」と云ひて來ぬ。

それより幹歌歹合罕宣はく(以下の一段は、末なる「驛舎の驢馬どき處なるを、太宗の言として記せり。蓋史臣は、これらも云云の外は、皆叙事の文に書くべき處なるを、太宗の口より聞きて筆記したるなるべし。)「察阿歹兄巴秃を首とせる右手の諸王兄たち弟たち眾、幹惕赤斤那顔也古を首とせる左手の兄たち弟たち眾の諸王、内地の公主たち驢馬たち、萬戸千戸百戸十戸の官人たち眾にて可とけり。可とするは、「海の合罕(四海の主)の湯羊に年「年」に羊羣の一の一歳の驢羊を出さば、何かあらん。百の羊より一の一歳の「羊」を出して、貧しく乏しきに與ふるは、好くあり。站を置かゝめて、札木臣兀刺阿臣を出

驛舎の長阿喇淺脱忽察兒

さば、多き國民に安からゝめ、使にも行くに便善けん」と云へば、眾にて只可とけり。この(原文に、客延「とて」とあれど、に假に「この」合罕の勅を察阿歹兄に謀りて、察阿歹兄に改めたり。)可とせられて、眾の國民より、處處の千戸千戸より、合罕の勅に依り年年に湯羊を羊羣より一の一歳の驢羊を、百の羊より一の一歳の羊を出さゝめたり。騾馬どもを出さゝめて、乳馬飼を坐ふたり。乳馬飼財守穀守を出さゝめたり。札木臣兀刺阿臣を出さゝめて、坐坐とももの地(站を坐る置)を斟酌はせて、站を置かゝむるに、阿喇淺脱忽察兒(太祖西征の役に見えたる脱忽)二人に整へさせて、站

站赤の制

一坐ヒトトコロに二十ニジュウの兀刺阿臣ウラアチンと做ナたり。坐ザごとニ二十ニジュウづ、の兀刺阿臣ウラアチンと做ナたり。驛舍エキシヤの騙馬セシバども、汁シユの羊ヒツジども(肉を作スるべし)、擠シボる騾馬ロウバども、車クルマに駕ツくる牛ウシども、車クルマどもは、こゝより我等ワレガより限カギりたる限カギより、短ミジカき繩ナハ(なり)缺カかさば、項ウデに依ヨりて切キり(項を)罪ツミあるとなさん。匙ナジほどの輻ハ(なり)缺カかさば、鼻ハナを切キり罪ツミあるとなさん(この站の事は、蒙韃合巴兒)と勅キョトありき。

備録に「凡見馬則換易并一行人從悉可換馬謂之乘鋪馬亦古乘傳之意」とあり。太宗紀元年には、たゞ「立驛傳」の三字あるのみなれども、兵志四站赤の篇にはその事を委しく記せり。まづその序に曰く「元制、站赤者、驛傳之譯名也。蓋以通達邊情、布宣號令、古人所謂「置郵而傳命」、未有重於此者焉。凡站陸則以馬、以牛、或以驢、或以車、而水則以舟。其給驛傳璽書、謂之鋪馬、聖旨、遇軍務之急、則又以金字圓符爲信、銀字者次之。內則掌之天府、外則國人之爲長官者主之。其官有驛令、有提領、又置脫禾孫於關會之地、以司辨詰、皆總之於通政院及中書兵部、而站戶闕乏逃亡、則又以時食補、且加賑卹焉。於是四方往來之使、止則有館舍、頓則有供

四つの功

帳、饑渴則有飲食、而梯航畢達、海宇會同、元之天下、視前代、所以爲極盛也。今故著其驛政之大者、然後紀各省水陸、凡若干站、而遼東狗站亦因以附見云」と云ひて、次に「太宗元年十一月、勅諸牛鋪馬站、每一百戶、置漢車一十具、各站俱置米倉、站戶每年一牌、內納米一石、令百戶一人掌之。北使臣每日支肉一斤、麵一斤、米一升、酒一瓶。四年五月、諭隨路官員并站赤人等、使臣無牌面文字、始給馬之驛官及元差官皆罪之、有文字牌面而不給驛馬者、亦論罪。若係軍情急速、及送納顏色絲線酒食米粟段匹鷹隼、但係御用諸物、雖無牌面文字、亦驗數應付車牛」とあり。以下は、世祖成宗仁宗泰定四朝の站に關する沿革法令と各省の站赤船車人畜の數とを載せたり。

韓歌オゴ歹ガイ合罕カガ宣ケンはく「皇考スラオヤの大位タカイクラに坐カて、皇考スラオヤの後ノチに勤イシみたることは、我が札忽惕アヤク(明旁譯明旁譯金人每金人每)の民タチの處トコロに出征シユツセイして、札忽惕アヤクの民タチを平ヒラげたり。我ワレ、次に我ワレが事業シヤウは、我等ワレガの使路シヤクに快ハヤく走ハシり又用モチふる品物シナモノを搬ハコばするに、站アヤムどもを置オかせたり。又次マタの事業シヤウは、水ミヅなき地チに井ナどもを掘カら

四つの過ち
酒の飲み過ぎ

せて、出さくめて、國の民を水草に有附かゝめたり。又處處の城どもの民の處に斥候探馬臣を置きて、國の民の足を土に手を地に置かせて住ませたり。我皇考に後に四の事業を添へたるぞ。又皇考の大位にも居られて、あまたの國民を我が上に擔ひて往かれて、便葡萄酒の酒に我が勝たれたるは、過となれり。一の我が過とこればなれるぞ。(耶律楚材の傳に「帝素嗜酒、日與大臣酣飲。腐物、鐵尙如此、況五臟乎。」帝悟、語近臣曰「汝曹愛君愛國之心、豈有如吾圖撒合里者、耶。」賞以金帛、勅近臣、日進酒三鍾而止。」とあるに據れば、太宗のみづから過を知れるは、楚材の諫に因れるなり。然れども又傳の後文に「楚材嘗與諸王宴、醉臥車中、帝臨平野、見之、直至其營、登車、手撼之。楚材熟睡未醒、方怒其擾己、忽開目視、始知帝至、驚起謝。帝曰「有酒獨醉、不與朕同樂耶。」笑而去。楚材不及冠帶、馳詣行宮。帝爲置酒、極歡而罷。」とあるを見れば、楚材もなかなかの酒好きにして、太宗の

女の取上げ

節飲も厲行せられざるに似たり。かくて太宗紀十三年辛丑(本書の成りし翌年)に十一月丁亥大獵、庚寅還至鉞鐵錄、胡蘭山、奧都刺合蠻進酒、帝歡飲極夜、乃罷。辛卯、運明帝崩于行殿、壽五十有六とあり、さよなかまで酒飲み、翌朝崩つたるは、必卒中にて斃れたるならん。然らば太宗は、酒の害を悟りながら、終に節すること能はずして、少く命を縮め、太祖より十歳短く、本書の次の過は、故なく女の人の言に入りて、幹惕赤斤叔父の部眾の女どもを取り來させたるは、非違となれるぞ。國民の主合罕なるに、故なく非違の事業に我が趁れるは、一の過とこればなれるぞ。(太宗紀に「九年丁酉六月、左翼諸部、詭言括民女、帝怒、因括以賜麾下」とあり、詭言を怒らば括せずして、詭言の詭なることを明にすべき筈なるに、怒に因りて括すと云へるは、怪むべし。今秘史なる太宗の讒悔に據れば、婦人の言に従ひてこの事を爲せるにて、謂はゆる詭言は、詭言に非ずして預言なりき。幹惕赤斤の領地は、左翼の大部を占め居たる故に、左翼諸部に謀ぎたるなり。多遜の史には、幹亦喇惕人は、その女どもを合罕は他の部落に嫁がせんとすと云ふ噂を聞き、直に縁附けき。幹歌台この事を聞き、その部落の七歳以上の女ども、その年に嫁ぎたる女ども、凡て四千人を一行に並べて、その中に

朶豁兒忽の殺され

て最美くきものを己と官人等との分として摘み出し、その次は娼家に送り、残りみなは兵士どもに掴み取りせしめけり。この事を彼等の父夫兄弟の前にてせしに、一人もぶつぶつ言はざりきと云ふとあり。これも同事の異聞なるべけれど、左翼の諸部を北方の斡亦喇惕部とし、女を取るを他の部落に嫁がするとし、人数もあまりに多く、淫暴もあまりに甚くければ、疑はくは傳への誤りにて、話の大きくなり過ぎたるならん。又耶律楚材の傳に「侍臣脫歡奏簡天下室女、詔下楚材尼之不行、帝怒、楚材進曰「向擇美女二十八人、足備使令、今復選拔、臣恐擾民、欲覆奏耳」帝良久曰「可罷之」とあり。この事は、傳に八年丙申天下の賦税を定むるの續にて、工匠の糜費を考覈する次に載せられたるも、類似の事を丙申の法令の後に連ね挙げたるにて、その實は、九年丁酉左翼の女を括したる後の事なるべし。謂はゆる美女二十八人は、斡惕赤斤の領地より取れるものなるべし。然らば、又朶豁兒忽を括するの非なることを悟れるも、楚材の諫に因れるに似たり。又朶豁兒忽を害したるは、一の過。いかに過てると云へば、我が皇考の正主の前に働ける朶豁兒忽を害したるは、過てる非違。今我が前に誰かか働きてくれん。我が皇考の、馭の前に道理を慎める人を察せず、圖り合ひたる

獸の圍ひ

を己を過とせり、我（太宗紀に「二年夏、朶豁魯及金兵戰、敗績、命速不台、勸忽罪を得る一因となり、ならん、然れども太宗の何を惡み何を怨みて殺したるかは知るべからず。」）又天地より命ありて生れたる獸を兄弟の處に往かんとて貪りて、圍の牆を築かせて止めて居たるに、兄弟より怨言を聽きたり、我過と「これ」もなれり（この事は、他の書に見えず。この圍禁地圍場と云へる多遜の翁奇の圍ひとは、目的異にして、それよりは規模大きく、例へば東方は拖雷の諸子の領地の界、西方は察阿歹の領地の界などに牆を築きたるが）皇考に後に四の事業を添へたるぞ、我四の事業は、過となりけるぞ」と宣へり（古人曰く「人誰無過、能知過爲貴」太宗自らその四功を知り、又自らその四過を知りて、功を匿さず、過を諱まず。その自知の明あるは、古來の帝王に類希なる事なり。過を改むるの效は、未至らざる所あるに似たれども、悍然として過を飾りその非を知らざるものに賢れること遠し。清の高宗は、十たび武功を立てたりとして、自ら十全の記を作りて、一過一失をも言はざるは、太宗に慙ぶること無か

太宗の逸事

らんや、又太宗紀の末に「帝有寬弘之量、忠恕之心、量時度力、舉無過事、華夏富庶、羊馬成羣、旅不賣糧、時稱治平」とあるは、元の史臣の作れる太宗實錄の頌讚の語をそのまゝに寫したるにて、「舉無過事」の諛詞は、太宗の自ら承くるを屑とせざる事なるべし。詞倭兒思の蒙古史に曰く「斡歌台は、寬仁大度の君なりき、常に曰く「人人は、この世の旅客なれば、人の記憶にその名を永からくむるは善し、三貨幣は、死を止むること能はず、然して我等は彼の世より還られざる故に、我等の財を我等の民の心に置くべきなり、喀喇科嚕木を築ける頃、ある日庫に入りて、貨幣の満ちたるを見て、この貨幣は、我に何の用かあらん、之を守るは、困みなり」と云ひて、銀貨を要むるものは誰にても来て取れと命づけり、商人どもを勵まして來させんと、の主意にて、買物の價を高く拂ひ、又給與に用ひんが爲に、ある商人より貨物を残らず買ひたりき、大氣(惠施)の出來心にて、巴固答惕より來つる乞食に銀貨千巴里施を與へ、それを運ぶに馬を與へ、長旅に護衛を附けて還したることありき、その老人路にて死にたれば、その貨幣をその女に送らしめき(多遜二、九〇)。ある日獵せる時、貧しき人水瓜三つを斡歌台に與へたるに、貨幣をもたざりしかば、合屯蒙噶に、「元史后妃表の正宮、字刺合眞皇后か)その耳に懸れる大眞珠二つを與へよ」と云ひき、蒙噶答へて「彼は、眞珠の價を知らず、明日拂ふ方善からん」と云へば、合罕は「貧しき人は、明日まで待たるゝものか」と云ひて、眞珠をすぐに與へさせけり、それを直ちに安く賣りければ、買へる人眞珠の來歴を知らず、合罕に獻上し、合罕はそれを蒙噶に返しき、發兒思の使、眞珠二瓶を獻りし時、斡歌台は、その一函を出し、夜會の客どもに進物として杯に入れて出さしめき、成吉思の法にては、

春夏に流水に浴する者は死刑に當てられき、ある日兄札噶台と獵より回る時、貧しき木速勒蠻の浴するを見て、札噶台は直ちに斬らせんとしければ、斡歌台は、竊に銀貨を流れに投げ入れて、木速勒蠻に教へて「貧しきものにて、貨幣を流れに落したれば、御赦下され」と言譯せしめけり(多遜二、九三)。木速勒蠻を惡める人、斡歌台の處に來て、木速勒蠻を絶やすべきことを申さんが爲に、成吉思より遣されたりし事を云ひき、斡歌台は「ばば考へて」成吉思汗は、譯人を用ひしか」と問へば「否」と云ひき、「然して汝は、蒙古語を知れるか」「たゞ秃兒克語を知れり」と云ひき、「然らば汝はうそつきなり、成吉思汗は蒙古語のみを知れるから」と云ひて、その人を死に處けけり(多遜二、九四)。ある日支那の見せ物師ども、斡歌台の前にて彼の名高き影繪を見せて、その繪の一つに、馬の尾にて頸を曳かれ行く白髯の老人あるを、支那人は、誇りに指さして、蒙古の騎兵に木速勒蠻のさいなまるゝ圖なりと云ひき、斡歌台は、彼等に罷めさせて、支那製珀兒沙製の貴き品物を庫より出して、支那製の劣れることを示し、且曰く「富める木速勒蠻の多くは、支那奴隸を多くもてども、支那人に木速勒蠻の奴隸をもてるものなし、成吉思の法にて、木速勒蠻の命は四十巴里施の價あれども、支那人のは驢と價同トきことを汝等知らん、然らば汝等は、何ぞ敢て木速勒蠻を辱むる」斡歌台は、相撲を甚好み、珀兒沙より名高き力士どもを呼び寄せたる中にも、鬪勅は殊に賞せられき、合罕は、美女を妻として與へしに、鬪勅はそれと寝ねざりき、何故と問はれて「朝廷にてかゝる大名を得たれば、力を保ちて、合罕の寵を失はざらんことを願ふ」と答へければ、合罕は「我は、汝の種族を増さんことを願ふ、將來の爲に汝の力を分つべし」と云ひき(多遜二、九六)。斡歌台の正妻は、

巴禿の西征に對する歐囉巴人の批評

禿喇奇納に於て、庫由克庫壇庫出喀喇札兒喀失の五子を生みけり、他の二子、喀丹幹古勒と篋里克とは、妾よりなりき(多遜二、九九)禿喇奇納は、秘史卷八の朶唎格程、后妃表の脫列哥那六皇后乃馬真氏追諡昭慈皇后なり、庫由克は、秘史の古由克、本紀の定宗簡平皇帝貴由なり、庫壇は、世系表の闊端太子、憲宗紀の擴端なり、庫出は、世系表の闊出太子、太宗紀の曲出なり、喀喇札兒は、世系表の哈刺察兒王、喀失は合失大王、喀丹幹古勒は合丹大王、篋里克は滅里大王なり、又阿倭兒思は、巴禿の西征を叙べたる後に、蒙古人に對する批評を下せり、その批評は、甚面白ければ、こゝに引かん、里固尼慈の戰とそれに續ける殺掠とは、囉馬帝國に恐怖の心を満たさめたれば、教主古喇果哩第九は、十字軍を興さんことを勧め、あらゆる人の加はらんことを願ひき、その信者どもに頒ちたる書は、悲哀恐怖の辭にて次の如く陳べられけり、「あまたの事ども、靈地(基督の墓のある所)の悲しき状態、囉馬帝國の哀なる事情は、我等の注意を要む、然れども我等は、それらを言はざらん、塔兒塔兒どもより起れる禍の前にては、それらを忘れん、彼等は基督教徒の名を根こぎ倒すらんことを想へば、我等の骨は皆碎け、我等の髓は涸れ、云云……いかになり往くかを我等は知らず」○荒えびすのむれの恐ろしき出現に遇ひ、輪を掛けたる(法螺吹ける)記載多く著れたる、夜吠の微音先揚曰く「巴禿は、洪鳴哩亞を襲ふ前に、惡魔の神だちを祭りたれば、その中の一柱は、偶像の中より辭を掛けて、汝は、心強く進め、我、汝の前に三柱の神を送らん、その神だちの前に敵は立つこと能はざらん」と云ひしが、果して三柱の神現れたり、それらは、不和の神猜疑の神恐怖の神なり、倭勒甫二八七、納兒奔の愛佛は、愕くべき事を記せり、蒙古の諸王は、狗の頭をもち、死人の體を食ひ、たゞ骨

を残して鷹に與ふ、然れども鷹どもは、その残りを嫌ひて食はず、老いたる醜き女は、泣の民どもに毎日の食料として分たれ、美しき少き女は、淫けたる後に、その胸を切り割き、軟き肉として貴人に供へらる(倭勒甫三四四)○歐囉巴の歴史家の書ける此等の輪掛けたる談に、珀兒沙人のそれも泣く得べし、伐撒甫は、蒙古人の種種なる性質を數へて、獅子の如く猛く、狗の如く耐へ忍び、鶴の如く注意届き、狐の如く狡猾に、鳥の如く遠目き、狼の如く貪り、雄雞の如く闘に鋭く、雌雞の如く子を憐み、猫の如くこつそり近寄り、猪の如く餌を取るに烈し」と云へり(倭勒甫一二六)又は含篋兒の云へる如く、蒙古にて用ふる十二支の動物の種種なる性質を集めて、蒙古人の徳を數へ、「鼠の如く竊み上手に、牛の如く強く、豹の如く烈しく、兔の如く用心深く、龍の如く恐ろしく、蛇の如く、たくらみあり、馬の如く物に動ト易く、羊の如く柔順に、猴の如く子を受み、雞の如く家に馴れ、狗の如く忠信に、豕の如く穢し」とも云ひ得べし(含篋兒の亦兒罕四四)吉奔(囉馬衰滅史)は、蒙古の侵寇の恐れは、歐囉巴の遠き隅まで廣まり、一二三八年、果昔亞(瑞典の果昔亞)甫哩沙の漁人は、彼等を畏れて、英吉利沖に緋取に往きかねて、それが爲に緋の價は大に騰りきと云へり(吉奔八、一五、注)○その時皇帝甫喇迭哩克第二と教主との大なる確執は、一つの原因となり、封建の念の極度まで發展したる(諸侯の專横なる)ことは、今一つの原因となりて、歐囉巴は分裂し居たる故に、洪鳴哩亞の如き禍をその免れたるは、多通の言へる如く、蓋只幹歌台合罕のをりよき死に因りてなり、重き鎧に、身を堅むれども、身動きならぬ僅の騎士の一騎打の武勇と、その從者なる農民の訓練なき羣集とに對ひては、蒙古人の嚴しき訓練は、對敵以上の效を著せり、その訓練の上

太宗に對する
阿倭兒思
の稱揚

に、又他の軍人の徳、即工夫を善く運らすこと、甚堪能なる軍略兵法ありき。實に、蒙古人は、亞細亞の荒遠なる隅より出で、國の地圖をも、又その地形を學ぶべきまも、全く他國人（不知案内）なり。事、彼等は、歐羅巴にのみならず、西の人の考へ方などに、したるに非ずして、雪なだれの如く人の國に突進したる事、彼等の衣食の供給運送の、かたは、亞細亞の曠野沙漠に、適すれども、歐羅巴の事物の甚異なる状態に、適せざりし事、これらの事をのみ考へなば、彼等の、か成功したるのみならず、その軍略上の計畫は、理學に依りたるが如く、立てられたる事は、殆ど神異不測に近く、その思はざるべからず、疑なく、彼等の皆殺しと殘酷との恐ろき方法は、その敵人の膽を破りて、神經を痺れさせき、疑なく、又彼等は、科曼人、嚕西亞人などの如き、いかなる寇にても、掠奪を許さるれば、嚮導先鋒として、十分に働かんとする、雇はれ根性の浪人どもを使ひき、然れどもこの事ありとも、我等は、猶この偉勳に驚き、軍の成功として、世界の歴史の何れにも之を較ぶることを、辭せざらん。阿倭兒思は、又太宗の事業を、残らず述べたる後に、「我等は、幹歌台を最運好き征服者と見ても、納坡列翁阿歷散迭兒の帝國も、較ぶれば、甚小きほどの大國を支配する強盛なる君主と見ても、夥しき民衆を、長き時代に、涉りて、結び固めたる制度を、組立つることを、差圖たる治國者と見ても、世界に現れたる最大なる帝王の一人たる人格を、彼に與へざるべからず。事業の多くは、人の手にて、彼に代りて、爲されしことは、彼の位置より、價を減せず、大國の君、屢誤るは、能臣の選擇にあり。成吉思の大名は、少くとも、英吉利文學にては、その子のそれを、勉（蔽ひ）たり。この論は、これまでより多く、

太宗十二年
の大會

注意を彼に引かんとする甚穩當なる企望に外ならず」と云ひて、太宗の篇を結べり。

大忽哩勒塔に會して、鼠の年七月に、客魯唎河の闊迭額阿喇勒の、朶羅安孛勒答黑失勒斤、扯克兩の、闊兒朶思に、下馬して居る時、書きて畢へたり。（鼠の年は、我が四條天皇仁治元年庚子、宋の理宗嘉熙四年、元の太宗十二年、西紀一二四〇年なること、序論に云へるが如くにて、太宗昇遐の前年なり。闊迭額阿喇勒は、卷四一三六頁とこの卷五八四頁とに、注せり。朶羅安孛勒答黑は、卷四一三六頁に、朶羅安孛勒答兀惕とありて、ここに注せり。朶羅安孛勒答兀惕は、七つの孤山にして、孛勒答兀惕は、孛勒答黑の複稱なり。孤山七つあれば、複稱に云ふべきを、ここに、單稱に書けるは、恐らくは誤ならん。又原文に、孛勒答合とあり、孛勒答合は、孛勒答黑に「なり」とは、「に」の字の入るべき所に非ざる故に、誤寫ならんと見て、刪れり。幹兒朶思は、幹兒朶の複稱なり。こゝは、太祖の大幹兒朶にして、帳殿の設けも、一二に止まらざる故に、複稱に呼べり。上文五九五頁に、大幹兒朶思、親征録に、戊子の年、秋、太宗皇帝自虎八會於先太祖皇帝之大宮、太祖紀に、十一年丙子春、還廬阿河行宮、太宗紀元年己丑即位の處に、曲雕阿蘭の地、また庫鐵烏阿刺里、四年壬辰、十一月、如太祖行宮、憲宗紀元年辛亥即位の處に、闊帖兀阿蘭の地、七年丁巳夏六月、謁太祖行宮、祭旗鼓、明宗紀天曆二年六月、戊申、大

太祖の大幹
兒朶

成吉思汗實錄卷の十二

四つの幹兒
朶

闊朶傑阿刺倫などあるは、皆この幹兒朶思なり、后妃表を案するに、太祖の幹兒朶は、四所にあり、第一の幹兒朶を大幹兒朶と云ひ、孛兒台旭真大皇后、孛兒帖兀真大合屯と皇后六人と妃子一人とそれに住み、第二の幹兒朶には、忽蘭皇后(忽蘭合屯)以下皇后四人と妃子四人と住み、第三の幹兒朶には、也速皇后(也速合屯)以下皇后七人と妃子三人と住み、第四の幹兒朶には、也速干皇后(也速干合屯)以下皇后五人と妃子七人と住み、四の幹兒朶を合せて、大皇后一人、皇后二十二人、妃子十五人なり、外に幹兒朶の知れざる妃子一人ありて、后妃すべて三十九人なり、表の皇后妃子は、蒙古語の合屯(妃)額篋(妻)をくか譯したるにて、支那の后妃よりは、軽く、大皇后即大合屯のみは、眞の皇后なり、洪鈞曰く「拉施特書曰成吉思婦有五百、案五百、恐是五千之訛、四の幹兒朶のありかは、諸史に明文なけれども、大幹兒朶は、この幹兒朶思なること論なし、他の三は、意をもて推すに、第二は、薩里川(撒阿里客額兒)の哈老徒の行宮、金幼孜の北征錄なる撒里怯兒の宮殿なるべし、第三は、王罕の舊營なる秃刺河の合朶屯の幹兒朶なるべし(前卷の五四三頁に見えたり)、第四は、西游記なる乃滿國の窩里朶即乃蠻の塔陽罕の舊營なる額帖兒河の幹兒朶にして(前卷の四七六頁四七七頁を見よ)、その「皇后」と云へるは、也速干合屯なるべく、漢夏公主」と云へるは、金の衛紹王の女岐國公主と夏の襄宗の女察合となるべし、忽哩勒塔は、即忽哩勒台にして、「に」なる後置詞を踏む時は、「亦」の音を、略く、忽哩勒台即聚會は、遊牧の諸部落には、大抵有れども、その部落大きくなり、君權強くなるに隨ひて、聚會の勢力衰ふるは常の事なるに、蒙古にては、國はいやが上に太りたれども、聚會は中廢れずして、永く(少くとも)世祖の即位の頃までは、その勢力を保てり、百戸内外の部落

遊牧諸國の
聚會

定宗即位の
大會の盛況

ならば、相談の必要ある時、會長は、小山などに登りて、相談あるから聚れ」と大音に呼はりても、部眾残らずを即刻に聚め得らるべし、かかるに亞細亞歐羅巴に跨れる大國となりては、召集の使を發してより會員の揃ふまでに一年餘りを費やし、又その會員は、聚まり得る人數に限ありて、平民は、參列することを得ず、代議の制などは、夢にも知らざれば、おのづから皇族貴族重官大帥の聚會となれり、かくて一むれのむらびとの總寄合は、四海に薄れる大帝國の國會となり、牛飼羊飼どもの寄り聚ひたる平民の相談會は、王侯將相の列れる威儀堂堂たる貴族議院となり、迭抹克喇西は、阿哩思脫克喇西に變りたり、太宗の崩りたる後五年、丙午の年(定宗元年、西紀一二四四年)に、攝政秃喇奇納合屯(秘史朶朶格捏、元史脫列哥那)の召集に由りて聚れる大會の時、囉馬教主の命を受けて、蒙古に使せる普刺諾喀兒關尼、その處に居て、記録を世に遺したれば、漢文の書には、更に見えざる蒙古の大會の盛況も、我等に知らるゝに至れり、阿倭兒思の蒙古史に曰く「大忽哩勒台は、幹歌台の常に夏を過せる科依揭の湖に近き地に聚るべく召集せられき、幹歌台の常に夏を過したる所は、多遜の史に幹兒篋克秃阿の昔喇幹兒都なりとあれば、科依揭の湖に近き地は、何かの誤ならん、今巴秃罕は、蒙古にて最重要なる人なり、この王の來會運きに由りて、大會は、延び延びになりき、巴秃の口實は、その馬どもの足弱くと云へるなれども、實の理由は、攝政とその子庫由克とを惡めるなりき、巴秃は、竟に會せずして、大會は、一二四四年の春、巴秃なくして開かれき、大會の開かれたる昔喇幹兒都まで亞細亞のあらゆる所より輻輳せるかなたの道路に、旅人羣集しけり、成吉思の弟兀出肯は、その子孫四十八人を伴れて來ぬ、拖雷の寡婦とその諸子

と、幹歌台、拙只、札噶台の子孫たち、支那の蒙古領の文武長官、珀兒沙の牧長、阿兒昆、突兒其思壇、河間地方の牧長、馬思速惕、嚕姆の薛勒主克種、の速勒壇、囉古訥丁、嚕西亞の大、公牙囉思喇甫、古兒只の王位の競争者にて二人共に名は蒼吡惕、阿列坡の速勒壇の弟、巴固答惕の合里發の使、亦思馬額勒宗派なる阿刺木惕の君の使、抹速勒發兒思客兒曼、博帕惕の使ども、昔里沙の王海團の弟、この人人は、皆立派なる獻上物をもちて來ぬ、この大人たちの中に、人に知られざる出家二人は、その衣服の卑しきと、その使命の大なるとにて著しかりき、この二人は、教主と里翁の僧會との命にて、蒙古人を正教に導かんが爲に至れるにて、その一人なる都普喇諾喀兒關諾は、即位の盛禮を記載せり、二千の白き天幕は、貴人の爲に設けられ、その貴人は夥しき故に、頭を曲げて行き過ぐる機會あるのみなりき、會談する機會を得ざりき、平民の大、眾は、その人たちの外の方に、天幕を張りき、皇族大帥の會合する大なる天幕は、二千人を容るゝ程にて、その周圍は、やゝ離れて繪もて蔽はれたる欄干をまはしき、その天幕に、入口二つあり、一は、合罕の爲にて、それより入らんとする大膽者のあ、るべき筈なければ、そこには守兵もなく、他の入口は、弓と劍とを持てる兵士守衛し、けり、毎朝會眾は、會の事務を議し、午後は馬乳酒を飲みて日を送りき、毎日會員は、種種なる色の衣服、第一の日は白き、第二は赤き、第三は紫の、第四は紅の衣服を、着ぬ、ある貴人たちの乗れる馬の轡は、銀貨二十巴里施以上の價ありき、選舉の前より、庫由克は、大なる尊敬をもて取扱はれき、(迭邁刺の引ける喀兒關諾九、二四三)外に往けば、讚美の歌を歌はれ、頭に紅の毛附きたる權力の仗を己の方に傾けられき、選舉の日來つる時に攝政と會員とは、昔喇幹兒都より二三禮古離れたる金

の天幕に赴きて、合罕の選擇の事を討議し、けり、金の天幕は、金の釘にて金の板を柱に捲き附けたるが故に、か名づけられ、紅の毛氈を敷き、帷幔をもて蔽はれ、き、幹歌台は、初にその第三子庫出(世系表の闕出、太宗紀の曲出)を相續人に名ざり、たれども、庫出は、一二三六年(太宗八年)支那にて死したる故に、又庫出の子失喇門(世系表の昔列門、定宗憲宗兩紀の失烈門)を名ざりたりき、然れども禿喇奇納は、その長子なる庫由克を立てんことを願ひ、失喇門はまだ年少きことを言ひて、庫由克を選舉せんことを會眾に勧めき、庫由克は、通例の習慣に隨ひ、一時はうはへの辭退して、竟には皇位をその子孫に保たんことを諸王羣臣の誓へる上にて、幹歌台のなせるが如く承諾し、けり、昔蒙迭散寬壇と阿兒幾尼亞の海團とに據れば、朝廷の大人たちは、庫由克とその妻とを方形なる黒き毛氈の臺に載せて、それを高く擡げて、庫由克を合罕と呼び上げけり、これは、明に甚古き廣く廣がれる習慣なりき、(原注、阿提刺の、また洪噶哩の諸王の、選舉の談を引きくらべよ)會眾は、九たび拜伏して敬禮を行ひ、會場の外に居たる大眾は、同時に類を地に垂れき、その時庫由克は、從者を伴れて天幕より出でて、日を三たび禮拜し、けり、禮式畢りて、祝宴に移り、その間なりたての合罕は、高御座に坐り、右に諸王(諸王駙馬)左に諸女王(公主王妃)を列ね、飲食は夜半まで續き、音樂軍歌は室内に響き渡りき、宴會は、七日の間引續き、然る後に總花は、まき散らされ、人人その位に隨ひて賜物を受けき、庫由克は、その父の大氣なるにも勝らんことを願ひ、商品を七萬巴里施の價ほど買ひ、その拂ひには、征服したる國に當てたる命令手形を渡すきと云へり、それらの品は、惜しげもなく羣眾に分配せられ、兒ども奴どもすら賜物を受け取りけり、二度目の分配までなく

たるに、夥しき貯藏は盡きざりしかは庫由克は、残りをば勝手に掠奪せよと命じて
畢へけり(多遜二、一九七―二〇三、荷車五百輛あまりに積みたる金銀絹衣物は、皇居
より遠からざる小山の上に置かれて、悉く分配せられきと喀兒關諾は云へり)

成吉思汗實錄卷の十二終り。

成吉思汗實錄奥附

定價金參圓

明治四十年一月十五日印刷

明治四十年一月十八日發行

著作者

文學博士那珂通世

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

發行兼印刷者

大日本圖書株式會社

右代表者

專務取締役宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷

大日本圖書株式會社支社

全國諸道府縣特約販賣所

發賣所

不許
複製



大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

北海道 村上商店。川南。魁文會。一二堂。富貴堂。**東京府** 地球堂。森江。森江分店。實文館。杉本。文林堂。水野。東京堂。
 林平。丸善。青野。中四屋。杉村。有隣堂。中央堂。松島。大倉。金刺。北隆館。三友。播磨屋。內田。東海堂。文會堂。池田。良
 明堂。二松堂。嵩山房。山岸。**新潟縣** 弘集堂。田沼。丸屋。正心堂。**前橋縣** 高桑。高橋。覺張。野島。西村。中山。萬松堂支
 店。北光社。目黒。山本。柿村。越佐同盟書館。**埼玉縣** 埼玉書局。水野。いろは堂。尙古堂。**群馬縣** 煥乎堂。淨觀堂。木田。
 多田屋。**茨城縣** 伊沼。明文堂。川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。**栃木縣** 內山。永樂屋。平石。青木。**愛知縣** 川
 瀬。永東。**靜岡縣** 吉見。谷嶋屋。古澤。三原屋。大石。**山梨縣** 柳正堂。**岐阜縣** 郁文堂。郁文堂支店。住。**長野縣** 日新堂。
 水學堂。小林。朝陽館。西澤。西澤支店。盛文堂。丸山。**富山縣** 藤崎。松榮堂。**福井縣** 虎屋。陽文堂。上野屋。**滋賀縣** 文
 港堂。佐藤。近藤。文明堂。**京都府** 青霞堂。今泉。今泉支店。伊吉。**山形縣** 盛文堂。日向。牧野。相原。八文字屋。**秋田縣**
 曙堂。東海林。藤嶋。大澤。**富山縣** 中田。學海堂。**京都府** 若林。文港堂。松田。南波。**大阪府** 中村。岡島。金川。中川。柳原。
 小谷。松村。開盛館。實文館。前川。丸善。田中。三宅。石田。北村。本田。中井。竹內。**兵庫縣** 熊谷。石田。福浦。竹內。木村。
 藥師寺。西村。中井。**長崎縣** 虎與號。集英堂。**三重縣** 安屋。**奈良縣** 文進堂。文進堂支店。畝傍館。**滋賀縣** 廣田。澤。
福井縣 品川。中村。**石川縣** 宇都宮。近田。**鳥取縣** 德岡。今井。久松堂。安達。**島根縣** 大龜。川岡。板倉。**岡山縣** 武內。
廣島縣 積善館。芸香堂。原田。**山口縣** 含美堂。梅龍堂。日新堂。超世館。**香川縣** 平女堂。**德島縣** 靜壽堂。**香川縣** 開益堂。
 開文會。龜友堂。**愛媛縣** 向井。土肥。足立。**高知縣** 富士越。**福岡縣** 元野木。積善館。博文社。金文堂。**大分縣** 甲斐。
 野依。梅津。中園。佐野。**佐賀縣** 牧川。汲古堂。**熊本縣** 長崎。**宮崎縣** 修進堂。谷。**鹿兒島縣** 吉田。金光堂。**沖繩縣** 豐見
 城。小澤。**臺灣** 新高堂。

40
818